

レゾンデートル

鳶しま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生トリップしていたオリ主がゲツコウガとプラチナ軸のシンオウ地方をめぐる話。

※原型ポケモンとのガチな異種間恋愛描写を含みますので、大丈夫だ、問題ない。と
いう方のみまつたりご覧ください。

目次

か	い人	0	0	0	0	0	0
Chapte	r.	1	月よりも秘密の多				
ter.	2	野の鳥は恋を知る	36	30	24	19	10
							4

0	0	C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
2	2	h	2	2	2	2	2	2	2	1	0	
8	7	a	6	5	4	3	2	2	1	0	9	
		p	.								8	
		t										
		e										
		r.										
		4										
		花冠のつくりかた										
203	195	た	189	184	174	166	158	152	147	143	133	125

18

Chap 040

5

硝子の靴は拾わな

307 301 293 284 274

0	0	0	0	0	0
4	4	4	4	4	4
6	5	4	3	2	1

346 340 333 326 321 314

C
h
a
p
0
4
4
6

迷宮にて君を待

360 つ 352

諸注意とオリ主設定

▼初めに

自サイト（本拠地）では名前変換ありの夢小説仕様ですが、ハーメルンではオリ主のデフォルト名のままでお話を掲載しています。

基本遅筆のため、更新は最低月1～2回を目安にやつていく予定です。

各章タイトルは a s f a r a s I k n o w 様 (<http://m45.o.o7.jp/>) よりお借りしています。

▼補足説明兼注意書き

原作キヤラやストーリーとも偶に絡みますが、メインはあらすじのとおり【オリ主がゲツコウガと恋愛的な意味で結ばれるまで】となっています。

ポケモンの擬人化はありません。ただし主人公のみポケモンと会話できたり、ポケモンが普通に4つ以上のわざを覚えていたり（公式バトルではその中でも4つまで使用可）といった、多少の独自設定が含まれた世界観でお送りします。

ゲツコウガのみ例外ですが、この話に登場するポケモンとタイプの種類は【初代～第4世代まで】です。

実際にゲームをプレイしながら執筆してはいますが、一部キャラの口調や性格が原作と異なる描写も出てくるかもしれません。

以上を了承の上で大丈夫な方は、まつたりお付き合いくださると幸いです。

▼オリ主設定

セツナ age: 15

※作者の気紛れで偶に挿絵が変わっている場合があります

(→は2019/1/2掲載)

前世は現代日本人だった女性。ポケモン初代～BWまでプレイ済。

BW2・XY・ORASはプレイ経験こそないものの、各御三家と大まかなあらすじ程度は把握済。

推定10歳の頃、シンジ湖で倒れていたところをフタバタウンの住人に発見され、以降は糺余曲折を経て原作女主人公（ヒカリ）の家で居候となる。

前世の記憶は微妙に残っている反面、この世界で生まれてからシンジ湖で発見されるまでの記憶が全くなく、本人にも出自不明。

転生後は白髪に薄紅の目という容姿からよく儂いイメージを持たれる。

しかしその内面は逞しく、中身はとつくに大人なのだからと言い聞かせつつギンガ団

相手に退かない辺り度胸はある方かもしれない。

長年ゲームで培われてきたバトルの腕前は相当なものだが、本人はバトル云々よりもポケモンとゆつくり過ごすひとときが好き。

▼最後に

作者は重度のゲツコウガ厨です。

ある日ふとゲツコウガっていうかケロマツ族って皆可愛いしイケメンすぎて超つらいんだけど！性的！かつこいい！好きです！！という謎テンションが大爆発した結果、このお話が生まれるに至りました。

ゲツコウガ好きな同士の方にめぐりあえることを一つそり楽しみにしております。
宜しくお願ひ致します。

Chapter. 1 月よりも秘密の多い人 001

遠くで、私のことを呼ぶ誰かの声が聞こえた。

けれど私はそれに応えられず、口からは言葉の代わりにひゅう、と音にすらならないただの空気しか出てこない。私を呼ぶ誰かは必死に何か呼びかけていたけれど、その内耳も、それまで握っていた手の感覚も全てが瞬く間に失われていく。ああ、つまりはこれが私の最期というものなのか、とすんなり理解できて、納得している本人を他所にどうやらまた泣いているらしい誰かにせめてましな顔を見せられているといいと思つた私は、口元が引き攣るのを我慢して今の自分に出来る限りの笑みを浮かべた。それはきっと美しさとは無縁の、むしろそういうものから大分かけ離れたものだつたに違ひない。それでも、それまで私の腕に滴り落ちていた誰かの涙が止まる程度の効果はあつたらしく、その事実に私はほんの少しだけ安堵していた。別に死ぬのが怖くないわけではない。それでも、それまで私の腕に滴り落ちていた誰かの涙が止まる程度の効果はあつたらしく、その事実に私はほんの少しだけ安堵していた。別に死ぬのが怖くないわけで怖いくらいだ。それなのに私がこうして落ち着いていられるのは、私が一人きりで死んでいくわけではなく、誰かが傍についてくれていると分かつていていたから。

「おいていかないで、」

意識も朦朧としはじめた頃、誰かの悲しい声が届いてひどく耳に残る。私だつて、あなたをおいていきたくはない。その思いに嘘はなく、握っていた手に力を込めようとしたもののすっかり弱つてしまつた握力では上手くいかず、私の手はほんの僅かに動いただけだつた。けれどもその僅かな動きさえ分かつてくれた誰かは、改めて私の手を優しく握つてくれる。それが嬉しくて、そして寂しい。

「一緒にいてくれるつて、言つたのに…… の、嘘つき」

そうだね、あなたの言うとおりだ。約束を守れず先に死んでいく私は嘘つきで、ひどいやつだろう。ごめんなさい、私ももつとあなたと一緒にいたかつたよ、と伝えたい気持ちを抱きながら、抗えない眠りに負けて瞼を閉じる。それと同時にまた涙がぽつり、と腕に滴り落ちて、ああ結局泣かせてしまつたな、と後悔した私の意識はそこで確かに遮断された。

……はず、だつたんだけどなあ。

「セツナお姉ちゃん！ねえねえ、ヒカリに絵本読んで！」

「ヒカリばっかりずるい！大体、セツナは今日おれとこれからデートするんだぜ！」

「あーっ、ジュン！お姉ちゃんのこと呼び捨てにしないでよね！」

「何だよ！セツナがいいって言つてるんだから別にいいだろ。なつ、セツナ！」

「お姉ちゃんはヒカリのお姉ちやんだもん！だからジュンには渡さないの！」

「なにをくつ?!」

私の目の前で言い争つている、幼い少年少女たち。その姿に見覚えがありすぎて、最初眩暈がしていたのはもう大分前のことになる。

「もう、一人とも……喧嘩はだめだよ？それに、一人からのお誘いは嬉しいけれど、残念ながら今日は先約があるんだ」

「えーっ、そんなあ」

しゅんとして俯いたヒカリの頭を撫ると、涙目だつた彼女はすぐにぱつと顔を上げて私を見つめ、にこにこと微笑む。その子どもらしい反応が可愛くていいなあ、なんて内心和んでいると、ヒカリの隣にいたジユンが途端に頬を膨らませて私に抱き着いてきた。まだまだ子どもらしい二人は現在十歳。と言つても、あと数日待てばどちらもトレーナーとして旅立つ予定の子どもたちである。

「ごめんね。ヒカリの絵本は、帰つてきてから寝る前にでも読んであげるから。ジユンも、私みたいな年上よりはヒカリとデートしてきた方が楽しいんじゃない？」

「ちょ、ちょっとお姉ちゃん?!」

「なんだよー！セツナのケチ！」

「ふふ、けちでごめんね。また今度、ね」

慌ててているヒカリとまだ納得していない様子のジユンを残し、私はそつと今の家へ戻ると予め用意していた軽い鞄と小さめの籠だけを持つてゆつくりとある場所へ向かう。のどかだけれどそこかしこに人の気配がある町から、森の方向に歩いていき十五分程度。太陽に照らされて、きらきらと光る湖面を眺めながら木に凭れ掛かっていると、背後から叢の揺れる音がした。私はそれに驚くことなく、難なく振り返るといつものよう

に挨拶する。

「おはよう、ゲツコウガ。ちょっと遅れたかな?」
『いや、いつも通りだ』

この地方ではまず見かけない、青と白に彩られた体。そして、首元の赤いマフラーのような舌がゆつくりと目の前で揺らめく光景に、今更ながら感心する。そんな私の様子はこれまで何度も見てきたからか、少し首を傾げた程度で私の隣に腰を下ろした彼はまだその場に立っていた私をじっと見つめた。少し切れ長の目は、人間のそれよりも大きくてそういう違ひもまた面白いな、とつい観察してしまう。

『……どうした。座らないのか?』

「ううん、何でも。今日もポフイン持ってきたから、ゆつくり食べてね』

『ああ』

彼につられるようにしてそのまま座れば、今度は私が持ってきた籠の方に視線を移してそわそわはじめた彼の様子が微笑ましくて思わず笑う。そこで私の微笑みに気付

いた彼には、少しだけ間が悪そうに目を逸らされてしまつたけれど、私が笑いながらも籠を開ければその中から焼いてきたポフインを躊躇なく手に取つて口にしてくれた彼に何だかほつとしてしまつた。湖の上を、鳥ポケモンの群れが轟りながらも翔けていくここは、かつていたどの場所と比べてもとても穏やかな時間が流れている。そう、私は強く思う。

湖の名前はシンジ湖。そして、私が今住んでいる町の名前はフタバタウン。
一度死んだはずの私は、現代世界では実際に存在していないゲーム上での地名でしかなかつたそこでいつからか、紛れ込むように生きていた。

終わりが唐突ならば、始まりもまた唐突で。もう二度と開かれることがないと思つて、いた自分の目に映つた光景を、私は今でも忘れられない。

ざわめく人々の姿に、全く見覚えのない透きとおつた綺麗な湖。そして何より、二次元上でしか存在しなかつたはずの生命——ポケモン、と呼ばれる存在がすぐそこに居て、驚きすぎた余りその場で失神したのは今となつては笑い話と言えるかも知れない。

私の現状について単刀直入に言うと、どうやら現代で死んだ私はポケモンが生きているこの別世界——おそらくは、ある程度原作のゲームに準拠した世界へ所謂転生トリップ、というものをしてしまつたらしい。

理由は今もよく分かつていらない。生前、ポケモンのゲーム自体は初代からBWまでプレイして全て殿堂入りまでしたくらいに思い入れがあったのは確かだが、死ぬ間際特に願つたわけでもないのに自分がこの世界にいる理由はいくら考えてみても結局今に至るまで分からなかつた。

ちなみにただのトリップではない根拠がいくつかあつて、一つはこのシンジ湖で倒れていた当時、今から五年前の私が身に着けていた服のポケットに私の名前と生年月日の

み記された、何とも簡素なカードが入っていた、ということがある。勿論そんなカードの存在なんて全く身に覚えがなかつたし、そもそもカードの情報自体、或いは出鱈目という可能性も全くないとは言い切れなかつた。けれど意識を取り戻した当時の私には、それ以外にこの世界での自分の立ち位置について何の情報もなかつたから、ほんの少し罪悪感を持ちながらも周囲にはそのカードに記された自分の名前と生まれた日以外何も覚えていない、記憶喪失ということを通した。ただでさえ出自不明の怪しい子ども相手に、何かしら疑いの目を向けられても文句は言えないと思つていた私の予想に反し、この町の人々は私を疑うどころか、むしろ心配する人々ばかりだつたことで逆に大丈夫だろうかと心配になつたが。ともかく、そこからも色々とあつて今の私は原作主人公であるヒカリの家で居候として過ごしている。ヒカリの幼馴染であるジユンともそこから知り合いになつたけれど、今私の隣でポフインを頬張つている彼に出会つたのは実はたつた一年前のことだつたりする。

「一年、かあ」

『?急にどうした』

「あなたと初めて会つたばかりの頃を思い出してね。あれから一年なんて、何だかすごくあつという間だつたなあ、つて」

『……そんなに前のことだつたか？』

首を傾げながらも、食べていたポフインを飲み込んですぐまた次のポフインに手をつけた彼を眺めてやつぱり不思議だと思うのは自分自身のことである。この世界の人々はそもそもポケモンと言葉が通じず、大本身振り手振りでコミュニケーションをとることが当たり前になつていて、私はといえばなぜか人と話すときと同じく、ポケモンとごく普通に会話することが出来ていた。はつきり言つてかなり異常なことだ。例外として、BWに登場していたNもポケモンと会話出来たようだが、私は彼のように大っぴらに喧伝するつもりはない。この町は良い意味でお人好しな住人が多いから杞憂かもしれないけれど、おそらく今後、ヒカリの前に立ちはだかるギンガ団のような組織にこれが原因で目を付けられては一堪りもないからだ。だから私がポケモンと会話出来ることは、今の時点だと隣に座っている彼以外まだ誰も知らない。この一年で、彼がとても寡黙だということを私はよく知つていたから、誰かに言いふらされるなんて心配も全くしていなかつた。

「懐かしいね。あのときは、確か雨が降つていたんだつけ？」

『そうだ。それで、この辺りで雨宿りをしていたお前が偶然俺と出くわして、俺の名前を

呼んだ。あれにはかなり驚かされた』

「私もあるのとき、結構驚いたんだけどね？ゲツコウガって、この辺りじゃまず見かけないポケモンだつたから」

『……まあ、そうだろうな』

相変わらずポフインを口に運びながらも、どこか遠い目をした彼は息を吐いてから静かに目を閉じる。私と会う前の彼がどんな生き立ちで、どこで何をしていたのか、私は彼の過去を何も知らない。知っているのは彼が野生のポケモンで、この辺りの森を住処にしていて、一週間に一度はこうして私の前に姿を現す、ということくらい。聞こうと思えばこの一年、いつだつて彼に尋ねる機会があつたにもかかわらず、私は彼の過去について根掘り葉掘り問い合わせそとは思えなかつた。彼に興味がない、といえばそれは嘘になるけれど、その一番の理由は私自身が別世界からの転生者という、俄かには信じ難い存在であつたからかもしれない。

「ところでゲツコウガ、言いそびれていたけれど

ふと立ち上がりつて、何となくそのまま湖の方に向かつて歩んでいく。そして湖の数歩

手前まできて立ち止まり、振り返れば結構な数のポフインを食べたからか、若干眠そうにしている彼の姿に自然と笑えた。可愛い、と言つたら怒られてしまうかも知れないけれど、私は彼のそういう姿もいいなあと思つているのはここだけの秘密である。

「私、ヒカリやジュンと同じように、そろそろ旅に出ようと思つてingの」

心地の良い風が吹き抜けて、湖の水面と周囲の叢を揺らす。彼は何も言わない。けれど、ほんの一瞬その目が僅かに揺らいだように見えたのは私の見間違いだつたのだろうか。それから暫く無言の時間が数秒流れただれど、風が吹き止んだと同時に、座っていた彼も立ち上がりつて私の元まで静かに歩み寄ってきた。足音を立てないところがますます忍者らしい。

『……、そうか、』

「今まで旅に出なかつたのは、そもそもヒカリが旅立つまで、あの子のことを見守つていたといつて思つていたこともあるんだけれどね。周りに比べたら旅立ちがすぐ遅いだろうし、アヤコさんには五年前からお世話になりっぱなしで、まだ何一つ、返せていないんだけれど……一度は、この世界を私のペースでめぐつてみたいつて、そう思つたの。

私が、この世界でこれからも、私として生きていいるように。なんて言つたら、大袈裟に聞こえるかな?』

『いや。少なくとも俺は、お前らしい理由だと思うよ』

「そつかあ。かつこつけつて思われなくて、良かつた』

『心外だな。俺がお前をそんな風に思うとでも?』

「ふふ、冗談だよ。だつてゲツコウガ、すごく優しいもの』

マフラーにも見える赤い舌をそつと撫でれば、まるで人肌みたいな温かさに当たり前だけれどポケモンも生きているんだな、と思つて不思議な気分になる。そんな私とは異なり、私に優しいと言われた彼はなぜか訝しい視線を私に向けていて、その理由が分からなかつた。

『……本当にそう思うのか?』

「え? だつて、優しくなかつたらこの一年、こんな風に私と過ごしてくれることすらなかつたんじやないかなつて思つていたんだけれど。違つた?』

首を傾げながら止められることもないの、そのまま私が彼の舌を撫で続けていけ

ば、彼はやや間を置いて随分と長い溜め息を吐いた。

『……やつぱり、セツナはかなり変わってる』

「ええ、そうかな？うーん……ごめん、自分じやよく分からないや」

『だろうな。だが、お前はそのままでいい』

「そう？ともかく、今まで私と一緒に居てくれてありがとう、ゲツコウガ。旅に出てしまった前に、あなたには一度きちんと挨拶しておきたかったから。今日会えて、良かつたよ』

『……』

そんなことを言いつつ、内心、ゲツコウガも一緒に来てくれたなら本当はかなり心強いのになあ、なんて思っている私は結構欲張りな人間だ。だけどゲツコウガには今の住処があるし、原作知識はともかくこの世界のトレーナーとしてはまだまだ素人でしかないので、いきなりついてきてほしい、なんて言えるほど私は大それた勇気を持ち合わせていなかつた。それでもせめて笑つてお別れが出来たらいい。そういう思惑で、彼から離れようとしていた私を引き留めたのは、他でもない彼自身だつた。

『旅に出れば、……なかなか、ここにも戻つてこなくなるな』

「？ そうだね。 そらをとぶ、を覚えた鳥ポケモンがいたら、帰つてくる頻度は多少増えるかもしけないけれど。 暫くは旅に慣れるのに手一杯で、そういう余裕すらないかもしない」

『まさかとは思うが、いきなり今日旅に出る、なんてことはないよな？』

痛くない程度に私の腕に添えられた彼の指は青くて、人肌に比べると若干ひんやりとしている。 そこにまた自分との違いを見出しながらも、私は彼から向けられる視線に応える。

「初心者なんだからそんな思いきつたことしないよ？ もうお昼だし。 それに旅に出るなら、朝早い内にしようって決めていたから」

『ならばいい……セツナ、』

「ん？ どうしたの？」

『旅立つ日は、……もう一度、この森に寄つてほしい。 お前に渡したいものがある』

『渡したいもの？』

『ああ。 だめか？』

「ううん、だめじやないよ。 でも、ゲツコウガは平氣？」

『俺のことなら気にしなくていい。ただ、忘れずにここに来いよ』

彼が言う渡したいものの内容が分からず、再度首を傾げた私は彼は最後まで優しい眼差しで見つめていた。

003

過去。

それは少なくとも俺にとつて、余り良い意味の単語ではない。けれど同時に気になるものもある。勿論、後者は何も俺自身についてではなくて、一年前に出会つたばかりの今はまだトレーナーですらない人間の彼女——セツナのことにはならない。

かつてタマゴからケロマツとして生まれた俺は、覚えている限り最初は今いるここから随分と遠く離れた地方にいた。だが運が悪かったのか、俺を育てようとしたトレーナーは所謂効率重視、というやつで、俺以外にもたくさんのポケモンのタマゴを抱えていたことを今でも僅かながらに覚えている。俺は偶々、他の個体と比べて能力値とやらが高かつたからか生まれてからもそこまで粗末な扱いを受けることはなかつたが、目前でタマゴを一心不乱に選別し、一日中血走った目でひたすら数字に追われているあのトレーナーは幼い俺にとつて恩を感じるどころか、ただただ不気味で恐ろしい存在でしかなかつた。だからこそ捕獲される前に隙を見て逃げ出し、遠い地方へ向かう船にただひとりで乗り込んだまでは良かつたのだけれど、そこからは弱肉強食の世界だつたと言わざるをえない。全く知らない地方でただひとり、生きるために必死で野生のポケモン

や珍しい俺を付け狙うトレーナーとのバトルを重ねていく内、進化を重ねた俺はどこまでいつてもひとりでしかなかつた。寂しいなんて思う暇もないほど、ただ生きるので精一杯だつたがある日ふと、今進化した自分は一体何という名前なのか。それすら知らないことに、俺は愕然とすることになる。

——俺は一体、だれなのだろう？

生まれた地から遠く離れたここでは、そもそも俺の進化前の名前を知っている人間すら皆無だつた。研究者も探せばいるだろうが、それも悪い人間に捕まつてしまつたら最後、実験体にされて終わるのかもしれない。そう思うと迂闊に人間の前にも姿を現せなくなつていき、ぐるぐると頭ばかりが痛む不毛で、とても退屈な日々を暫く送ることになつた。けれど、そんなときだ。そんなときだからこそ、俺はセツナに出会つたのではないか、と思う。

その日は昼を過ぎた頃から小雨が降り出して、ちょうど湖の近くを住処にしていた俺は木々に紛れて無心でいつもとほんの少しだけ違う湖を眺めていた。あらゆる土地から転々と移ってきたが、今俺が居るこのシンジ湖はわりと大人しいポケモンや幼いポケモンが多く、ポケモン同士の争い自体滅多に起こらないのでなかなか住み心地の良いと

ころだつた。但し、それ即ち平和すぎて出来ることが限られてくるというのが贅沢な悩みでもあつたが、やがて町の方角から一人の人間が慌ててこちらに走つてくるのが見えて咄嗟に身を隠した。大方、雨宿りでもしにきたのだろう。人間が一人ではなく、これが複数人でそれも俺の存在が噂されでもしたらここにも居られなくなってしまう。そうなると困るから、俺は思わず、息を潜めてその人間をじつと見ていた。

「あちゃー、いよいよ降り出したかな？こんなときに限つて傘は置いてきちゃつたし……アヤコさんの言うとおり、傘借りておけば良かつたかも」

ぱたぱた、と人間の衣服から僅かに水滴が垂れる音が妙に耳に残る。雨に濡れた白い髪は他の町でも見かけるが、それより印象的だったのはその人間の持つ薄紅色の目だつた。自然の中でも、そしてポケモンでも同じ色合いを俺は今まで見たことがなかつた。どうしてか、あの人は普通の人間とはどこか違う、そんな気がした俺は息を潜めながらもゆつくりと、彼女に気付かれないように忍び足で近付いていった。しかし、滅多にとらない行動で緊張しそぎたのか、ぱきり、と小枝を踏みしめる音が周囲に響いて彼女がこちらに振り返る。見つかってしまった。まずい、そればかりが頭の中を駆け巡つていたのに、とうの本人はいとも容易くこう言つたのだ。

「……ゲッコウガ？ 何で、こんなところに？」

きよとんとした顔で告げられた、ただ純粹な驚きだけが込められたその言葉。しかし、それは今の自分を碌に知らなかつた俺にとつて、とても大きな衝撃を齎した。驚きすぎて最初は無言で彼女の前から立ち去つてしまつたが、時を経て驚きの次に沸いたのは有り余る喜びという名前の感情。それから、俺を呼んだ彼女が一体どんな人間なのか、彼女についてもつと知りたい、という望み。こんなことは初めてで、けれどもこの地方では珍しい俺の存在を誰に言いふらすこともせず、ただあの湖で一緒に過ごすようになつた彼女を、いつからか俺はどうしようもないほど気に入つてしまつていた。それこそ、もう手遅れなくらいには。

『言つたこともないから知らないだろうが。俺が優しくする人間はお前だけだよ、セツナ』

すっかり日が暮れてしまつた湖の向こうで、数時間前、俺に向かつて旅に出ると告げたセツナの幻影が見える。セツナは俺にかつこつけなんて思われなくて良かった、なん

て言つていたが、今から俺がとる行動はセツナよりある意味かつこつけの気がしてきて笑えてくる。しかし、例えどんな風に思われたとしても、こんな真似をしてまで俺がお前から離れたくないと思つているのは紛れもない事実なのだ。

『俺もまだまだ、と言つたところか？本当に、セツナは面白いし、見ていて飽きない』

見渡す限り広大なこの湖で、果たして俺の探し物は見つかるだろうか。流石にこの広さで一つもない、ということはない信じたいが、早ければ明日の朝にでもセツナがまた来るかもしれない可能性を思い出した俺は、何の躊躇いもなく夕焼けに照らされたシンジ湖の水面へ飛び込んだ。

すうすう、と穏やかな寝息を立てて眠っているヒカリの頭を優しく撫でる。

あれからゲッコウガとはシンジ湖で別れて家に戻つてきた後、夕飯を食べてお風呂にも入つてから、私はヒカリとの約束通り彼女のベッドで絵本を読んであげていた。別に私自身は朗読が特別に上手なわけでもないけれど、物心ついた頃からこの家で一緒に日々を過ごしてきた私のことをヒカリはすっかり姉として慕つてくれているらしく、自分がトレーナーとして旅立つ直前の今でも変わらず私に甘えたがる彼女を私自身も可愛がつている。容姿の違いさえなければ或いは本当の姉妹のように見えたのかもしれないけれど、生憎現在の私はヒカリと違つて白髪に薄紅色の目という、いかにもゲーム世界にお逃え向きのような容姿だったので本人からしてみれば若干萎えたのは仕方がないことだと思ったがつた。

「セツナ、ちょっとといいかしら？」
「あ、はい」

生前とは全く違う、どこまでも真っ白でしかない自分の髪を適当に弄つていると扉を何度かノックされてから、この家の大黒柱でもあるアヤコさんがヒカリの部屋に入ってきた。アヤコさんは眠つているヒカリを優しい目で見つめてから、次いで私にその視線を向ける。

「全く、ヒカリつたら昔からお姉ちゃんに甘えてばかりね？こんな調子でこれから旅に出て、この子つたらちゃんと一人でやつていけるのかしら？」

「大丈夫ですよ。ヒカリは甘えたがりかもせんが、芯のある強い子です。それに、これからはポケモンと一緒にですから、決して一人ではありませんし」

「……セツナはまだ15歳とは思えないくらい、逆にしつかりしているわよね。私のことも、結局ママとは呼んでくれなかつたし？」

「え、えつと。それはその……」

「ふふ。大丈夫よ、怒つてないから。私をそう呼ばないのは、お世話になつてゐるからつていう遠慮もあるんでしょう？それも分かつてゐるから。だけどね、これだけは忘れないで。たとえ義理でも、あなただつてヒカリと同じ。私にとつては、大切な娘だつてことを」

目を見つめられながら、そつと添えられた手の温かさに最期に居てくれた誰かを思い出した私はほんの少し泣きたくなつたのを悟られたくなくて、思い切つてアヤコさんの胸元に抱き着くように倒れ込む。咎められるだろうか、と一瞬不安になつたけれど、アヤコさんはお姉ちゃんも甘えたさんね、と笑つて、ただ私を優しく抱きとめてくれただけだつた。

「……セツナも一応、数日後には旅に出る予定だつたかしら？」

「そう、ですね。折角だから、ヒカリやジュンと合わせようかな、とは思つていて」「ヒカリと一緒に旅はしないのね？」

「はい。それはヒカリのためでもありますし、私自身のためでもあります。何より、私の旅は単純なバッジ集めとか、リーグ挑戦が目標ではなくて……私自身を知る為の旅ですから。多分、人よりずっと時間がかかると思うんです。そんな私のペースに、ヒカリを付き合わせるのはあの子の成長を阻む原因にもなりかねません」

ヒカリと一緒に旅をする、という選択肢も確かにかなり魅力的ではあつた。けれどその場合、ヒカリよりもむしろ私がヒカリに依存して、彼女の足を引っ張るような事態にでもなればそれは原作の流れとして本末転倒になつてしまふ。原作を一度プレイした

身としては、後に台頭してくるギンガ団も決して放つておけないのは確かだつたけれど、大筋を根本から変える何かがあつては万ーの時に対処できないかもしない。それが何よりも怖かつた。ギンガ団を阻むのはあくまでも主人公であるヒカリとその仲間であつて、私はそもそもこの世に本来存在すらしていないはずのイレギュラーなのだから、出過ぎた真似は控えるべきだろう、と考えてもいたのだ。

……最も、私の目の前でヒカリに危害を加えられでもしたら、その時は私もただ黙つて見ているだけで済まさないとは思うが。

「そんな難しいことまで考えなくとも、私は大丈夫だと思うけれど……まあ、それがあなたの意志であるのなら、私はそれを尊重するわ。ただ、旅に同行するのは難しいとして、偶に出会つたら一緒に夜を過ごすくらいはしてもいいんじゃない？ ヒカリもあなたも、まだまだ若いんですもの。一緒に悩んで、分かち合つてこそ人は成長していくものよ？ なんてね」

一応人生の先輩としてのアドバイスよ、と微笑んだアヤコさんは大人だけれどとてもお茶目な人で、正直母親には見えないくらい若々しい。それは彼女が今でも時々、ポケモンコンテストに出場していることともしかしたら関係があるのかもしれない。

「ヒカリはもう寝ちゃっているから、先に渡しておくわね？これ、モンスター・ボールと傷薬の詰合せセットよ。本当はセツナにもヒカリとお揃いで、ランニングシューズと迷つたんだけれど……あなたの旅は、ゆっくりじっくり、自分と向き合う旅になりそうな気がしたから。一応、実用性も兼ねてこっちにしてみたの」

「本当に、何から何まで……ありがとうございます」

「もう、そこまでかしこまらなくたつていいくつて言つたのに、変に律儀ねセツナは。でも、そういうあなたも私は勿論、ヒカリも大好きよ。それをどうか、旅の途中も忘れないでね」

「……、はい」

「うん、いい子。あなたの初めてのポケモンは、一体どんな子になるのかしら？それもこれから楽しみね。それじゃあ、私からの話はこれでおしまい。セツナもそろそろ、お休みなさい」

「ええ、また明日。お休みなさい」

五年前から自分の名前と生まれた日以外には何も分からぬ、この世界において素性不明な私を引き取ってくれたアヤコさんと、私を姉として受け入れてくれたヒカリには

本当に感謝してもしきれない。彼女たちがいなければ、間違いなくこんな穏やかな気持ちで誰かにお休みなさいと言える私はきっと存在していなかつただろう。アヤコさんと話していた間も変わらず眠っていたヒカリの頭をもう一度撫でると、寝ているにもかかわらずヒカリは嬉しそうに微笑んだ。良い夢でも、見てているのだろうか。そうだつたらいいな。

「……ヒカリとこうして一緒に眠るのも、旅に出たらなかなか出来なくなるんだよね」

それは寂しいなあ、と呟いた私の一言に当然ながらヒカリからの返事はない。それでも私はどこか満足して、ヒカリの隣に潜り込むと自分も寝そべることに成功する。起きたらヒカリには驚かれてしまうかもしれないけれど、あと数日後にはお互い旅に出て暫く別れてしまうのだから、それまでの我儘として許してもらおう、と考えた私は幼い寝顔をしている妹を見守りながら自分も眠りに着いたのだった。

「アヤコさんから貰ったモンスター・ボールに傷薬、着替えと非常食、財布、寝袋、は最初に入れておいたし……うん。大体、こんなところかな?」

天気も考慮し、ゲッコウガと最後に会つてから何だかんだ三日が経つた現在。

私はいつもより早めに起きると、いよいよ旅に出る前に荷物の最終チェックをしていた。ゲームをプレイしているだけでは分からなかつたけれど、この世界では旅をするポケモントレーナーのことを考えてつくられた専用の旅行鞄やモンスター・ボールをセットする為腰に身に着けるホルダーなど、そういういつたトレーナー向けの必需品にも本当に色々な種類があつて、それらを選ぶだけでも大分時間がかかるつてしまつた。形から入る、というわけでもないけれど、やつぱりある程度の備えは必要ということでアヤコさんからの意見も取り入れた結果、既にそれなりの重さになつた旅行鞄を眺めてふうと息を吐く。窓の外では相変わらずこの辺りに生息している鳥。ポケモンの囀りが響いていて、今更ながらここが私のかつていた現代と全く違う世界であることを突きつけられた気分になり、思わず苦笑いが零れた。けれど感傷に浸つている暇なんてない。だつて今

日は、私にとつてとても大切な一日となるのだから。

「アヤコさん。シンジ湖の方へ散歩に行つてきますね」

「分かつたわ。それから戻つて、この鞄を取りにきたら……いよいよ、セツナも旅立つのね。はあ、一気にこの家から二人もいなくなるなんて、想像しただけで寂しくなるわ」

着替えと準備を自室で済ませてから、玄関の隅に大きな旅行鞄を下ろした私を見てアヤコさんが軽い溜め息を吐く。ヒカリはまだ寝ているが、あと少し経てば原作と同じようじゅんがヒカリの元へやつて来て、おそらくあの子たちの旅も今日始まるはずだ。正確な日付が分からずとも、家にやつて来たジュンと一緒にテレビに齧りつくように画面越しのポケモンをきらきらとした眼差しで見つめていた最近のヒカリを知つていれば、あの子もきっと旅立つのだろうということは私にも予想できた。だからこそ私はヒカリに自分もこれから旅に出ることを教えたのだけれど、それを聞いたヒカリから一緒に旅に出ないかと誘われて驚いたのはつい昨日のことである。

しかもヒカリだけでなく、そのとき一緒だったジュンにまでなぜか同じように誘われ、ジュンとヒカリが喧嘩しあじめてから最終的にアヤコさんが収めたところまで、まるでいつも通りだったことはまだ記憶に新しい。誘われたこと 자체は純粋に嬉しいと

思いつつも、私には私の旅の目的があつたので旅の同行についてはどちらもきっぱりと断らせてもらつた。けれどその代わり、どこかの町で出会つたらそのときはゆつくりお茶でもしようと約束すれば、幼い二人は拗ねながらも納得してくれたのだから本当に良い子たちに育つてくれたと思う。その分、これから嫌でも出会うことになるギンガ団と出くわしたときがちよつとだけ不安だけれど、いざとなれば私が一人を助けられるように、私自身も強くなれるように頑張ろう、と改めて決意していた。

「そう言つてもらえて嬉しいです。とは言つても、新しい町に着いたらまずアヤコさんに電話しようと思つていますし、葉書も送りますから」

「ええ、約束よ？・ヒカリは頻繁に連絡してきそ�だから、その点で安心しているんだけど、セツナは逆に連絡が少なそうで心配だし。遠慮なんかいらぬんだから、いつでもうちに連絡してちようだい」

「ありがとうございます。それじゃあ、ちよつとだけ出かけてきますね」

「あ、そうそう！いけない、私としたことがまた忘れるところだつたわ」

「どうしたんですか？」

「ごめんねセツナ、ちよつとだけここで待つていてくれるかしら？」

頷けば慌てたように居間へ戻つてしまつたアヤコさんに首を傾げつつ、そのまま大人しく待つているとやがてアヤコさんが小脇に何かを抱えて戻ってきた。それは見る限り新品の、真っ白なダッフルコートで、私が驚いているのも構わずアヤコさんは笑つてそれを私に差し出した。

「この辺りはまだいいけれど、シンオウ地方は寒いところが多いから」

「え、……え？ 私に、ですか？ ヒカリの分は？」

「ヒカリの分は、また別に用意してあるから大丈夫。このくらいしかあなたに餞別として贈ることが出来なかつたけれど、言つたでしよう？ 遠慮はいらないつて。だから私としては、このままセツナにこれを受け取つてもらえたらい番嬉しいんだけどなあ」

それとも白は嫌だつたかしら？ と困つたように微笑むアヤコさんに慌てた私は、思わずアヤコさんから差し出されたコートを言われるままに受け取ると、おそるおそる上から羽織る。ぶかぶかとまではいかない程度に、けれどもびつちりとするほどきつくもない、ほどよく余裕のあるサイズのコートを着た私を眺めると、目の前の彼女は満足そうに微笑んだ。

「うんうん、やつぱりセツナには白がよく似合うわね！とつても素敵よ！」

「あ、……ありがとうございます」

「うふふ、セツナつたら照れちゃつて可愛い～！つと、いけない、今から散歩に行くところだつたのに結構引き留めちゃつたわね。まだ時間は平氣？」

「はい。大丈夫です」

「なら良かつた。それじゃあセツナ、また後でね！」

につこり、と音がつきそうなくらい満面の笑みで私を送り出してくれたアヤコさんに、私も笑いかえすと一步を踏み出す。

(……今の私を見たら、ゲッコウガは何て言つてくれるのだろう。そもそも今も、彼は私を待つてくれているのかな？)

玄関を出て、最初は少し早足程度のペースだつたのに彼のことを思い出すとなぜだか私は止まらなくなつて、自然と小走りでこの一年通い続けたシンジ湖に向かつて一人で駆けていく。朝早い時間帯だからか、幸いなことにアヤコさんから貰つたばかりのコートを着て走っている私は誰の目にも留まらない。正直、あれから私がどうするべきか、

そもそもどうしたいのか、という結論はまだ出ていない。それでも私は、どうしてだろう。今日という旅立ちの日だからこそ、あなたに早く会いたかった。

いつもなら家から歩いて十五分はかかっていたシンジ湖までの道のりが、今日は走つてきたこともあつて何だかあつという間の距離に感じられる。その反面、朝から走つた所為で今の私はすっかり息を切らしていく、シンジ湖の入口に着いた辺りから息を整えるためにもゆっくりと歩き出した。真冬でもないのに口から白い息が出ているのは、今が朝という時間帯でいつもより気温も低めだからだろうか。天気予報では確か暫く晴天が続くはずなので、この寒さも昼間になれば問題ないだろうけれど、アヤコさんに貰つたコートを着ていなかつたら今頃かなり肌寒い思いをしていたかもしれない。そんなことを考えながら湖まで更に歩いていくと、やがてこちらに背を向けて静かに佇んでいる彼の後ろ姿が見えてきて思わず息を飲む。そこで不意に振り返つた彼と、私の視線が真っ直ぐに交わる。他の野生ポケモンも大半がまだ寝ているのか、二人の周囲は静寂に包まれていた。

「……おはよう、ゲツコウガ」
『……ああ。おはよう』

何十秒か続いた沈黙を破り、思いきつて私から声をかければいつものように彼も私に挨拶してくれて、無意識に入っていた力が体から抜けていくのが分かる。気負う必要はない。だつてこの一年、私は誰よりも彼とともに時間を過ごしてきた存在だと確信できたから。最後に彼と会つてからの数日、ひたすら色々なことを考えてばかりで私の頭の中はuzzつとぐるぐるしていたはずなのに。今彼に会つただけでそれが落ち着いてきた辺り、どうやら私の中で彼の存在は相当大きくなつていたらしい。それを自覚しながら、彼の隣まで歩いていく。目の前に広がるシンジ湖は今日も変わらず綺麗で、その水面は既に青空を映していた。

「いつから私を待つていたの？」

『お前と会つて翌日からここで待つていた』

「！ そうなんだ……ふふ、」

『……何が可笑しい？』

「ううん、可笑しいんじやなくて嬉しいんだよ。こんな風に誰かに待つてもらえるのつて、幸せなことなんだね」

脈絡もなく笑つた私をジト目で見ていた彼にそう告げれば、ぱちぱち、と何度も瞬きした彼は溜め息を吐くとなぜかそっぽを向いてしまう。その反応を不思議に思いながら今度は私が無言で彼を見ていると、その内観念したらしい彼が私の頭に手を添えて、ぎこちない動きで私の頭をそつと撫ではじめた。とりあえず、怒っているわけではないらしい。

「なあに？ どうかしたの？」

『……何でもない。セツナは今日、旅に出るんだよな？』

「うん、そうだよ。あなたに会つてから、準備してきた荷物を取りに一度家へ戻るけれど、そこから旅を始めるつもり」

『そうか。なら、俺が前に言つていたものをここで渡そう。だがその前に、セツナにいくつかやつてほしいことがある』

「やつてほしいこと？」

『まず、どっちでもいいから前に手を出してくれ』

「……こう？」

『それでいい。あと、俺がいいと言うまでは目を閉じていてほしい』

彼に言われたとおり目を閉じた私の視界は、途端に真っ暗になる。一体、ゲツコウガは何を渡してくれるんだろう、とわくわくしている私を他所に彼は一瞬だけその場を離れると、私の掌に何か軽いものを乗せてきた。掌にちょうど収まるくらいのそれは、どうやら丸い物体のようだ。その正体がすぐに思いつかなくて悩んでいると、もういいぞ、とゲツコウガから声をかけられて閉じていた目を開ける。そこで目に入つたものの存在に驚いてゲツコウガを見れば、彼はいつも以上に穏やかな目で私を優しく見つめていて。

「ゲツコウガ、これ、」

『大したものでなくて悪いが、あの日、お前と別れてからこの湖に潜つて見つけたんだ。ポケモンだけじゃ、人間の町で買い物なんて簡単には出来ないだろう?』

だからこうするしかなかつた、と答える彼に私は何と言つて良いのか分からなくて、自分の掌の上にあるそれをそのままぎゅっと握り締めてみる。赤と白、そして真ん中にラインが引かれているそれは、表面にくつか細かい傷がついているもののモンスター・ボールで間違いない。けれど余りにも都合が良すぎて、私はもしかしたらまだ夢を見る最中なのかもしれない。

「どうしよう。私、もしかしてまだ寝てるのかな？」

『……、……突然どうした』

「だつて、もしこれが現実なら私、あなたにものすごく勘違いしちゃうんだけど」

『ふうん。例えば、どんな？』

「その……ゲッコウガが、私と一緒に旅に出たいのかな、って」

そういう勘違い、と呟くと彼は普段なかなか見せないにやりとした笑みを浮かべて、赤い舌先で私の頬をペロリと舐める。突然の思いも寄らない感覚に震えた私を愉快そうに眺めながら、彼はいつの間にかとても上機嫌そうにぐるぐると喉を鳴らしていた。

「つ、いきなり、何？」

『……くく。勘違いなんかじやないぞ？ セツナ。その通りだからな』

「え、」

『別れの餞別にこんなボール一個だけを渡してやるほど、俺は良い性格をしていない』

『……、』

『お前にこの先会えなくなつたら、俺は間違ひなく退屈する。それは嫌だ。ならばむし

ろ、俺は今後もお前の傍に在りたい。無論、足手纏いにはならないと約束する。それなりの強さならばもう身に着けている自信がある。ここまで言つても、まだ説明が必要かいになるかも知れないよ?』

『俺がいいと言つているんだ、問題あるまい。さあ、セツナ。どうする?』

このボールを受け取るか——即ち、私がゲツコウガと旅に出るか否か。
微笑むゲツコウガを見つめながら、私の出す答はもう決まっていた。

「そんな風に聞かれたら狡いよ。一緒に行こうとしか、言えないじやない」

『ふふ。だがそれを分かつていても、お前は俺と行くのだろう?』

「まあそうだけど……でも、正直安心した」

『ん?』

「私もゲツコウガと離れ離れになるの、本当はすごく嫌だつたんだ。でもゲツコウガに
とつてはここが住処で、私もこれから旅に出る初心者だから誘われたら嫌な気分にさせ
るかなつて思つて、ずっと言い出せないでいたの。全部私の杞憂だつたみたいだけれど

……それでも、これからもあなたと一緒にいられるつて思うと、すぐ嬉しく。だから、
ありがとう」

握り締めていた掌をゆっくりほどいて、表面に傷のついたモンスター・ボールをゲッコウガに向けて差し出す。そうすると、何だか照れくさそうに目を伏せていたゲッコウガが自らボールの開閉スイッチを押した途端、彼は瞬く間にボールの中へと吸い込まれていった。カチン、と音がしたボールは、ゲームで見た捕獲の時と違つて微動だにしない。それは彼が私を一人のトレーナーとして認めてくれているということで、そう考えると胸の中が喜びと嬉しさで満たされていく。こんなにも煌く感情を、現代にいた頃の私は何一つ知らなかつた。この世界には、こんな風にきつとたくさんの未知が溢れているのだろう。勿論その全てが美しいことや素敵なことばかりとは限らない。けれど、私は一つづつでもいいからあなたと一緒にたくさんのことを探つていきたい。この一年、変わらず私の傍に居てくれたあなただからこそ。

「不束者な私ですが、これから末永く宜しくお願ひします」

そう呟いた私に対し、掌の上のボールはまるで返事をするかのように小さく揺れてい

た。

「……、」

——そんな私たちのことを、他に見ていた人がいたなんて気付かずに。

Chapter. 2 野の鳥は恋を知るか 007

ゲッコウガの入っているボールをシンジ湖に来る前から腰につけていたホルダーへセットすると、私は一度来た道を引き返しそのまま家まで戻ることにした。ゲッコウガにも言つたとおり、家に置いてきた荷物を引き取りに行かなければそもそも旅にも出られない。今から向かえば、おそらくはもう起きているヒカリやジュンにもゆつくり挨拶していくのはずだ。そう信じて暫く一人で歩き続け、シンジ湖の入口まで辿り着いたとき。私のその考えは、いつも容易く突き崩された。

「ポツチャマ！これから宜しくね！」

「ナエトル！おれと一緒に旅に出ようぜ！」

「……、あれ？ヒカリに、ジュン？」

シンジ湖の入口からフタバタウンへ戻る途中、201番道路の片隅でヒカリとジュンがそれぞれポツチャマとナエトルに何か話しかけていた。しかも彼らのすぐ近くには、

ゲーム画面ではともかくこの世界ではまだテレビ越しにしか見たことのなかつたナナカマド博士と、その助手をしていると思われるコウキ君まで一緒に思わず呆気に取られてしまう。しかし、そこで私はある違和感を覚える。確かに、彼らが初めて博士からポケモンを貰つたのはシンジ湖でアカギとすれ違つてからではなかつただろうか、と。

(ただの偶然? それとも、私の記憶違い? もしも原作通りにヒカリたちがシンジ湖に来たなら、先に来ていた私とゲツコウガが気付かないわけがない。でも、シンジ湖ではアカギらしい人なんて見かけなかつたし……)

「うん? 君は……」

「あっ、お姉ちゃん! あのね、私とジ Yun、そこにいるナナカマド博士からポケモンを貰つたの!」

「へへっ、いいだろ?」

私の混乱を他所に、ポツチャマを抱えたヒカリと同じくナエトルを抱えたジ Yun が自慢するように私の元へ駆け寄ってきて、その素直さにほんの少しだけ微笑ましくなる。けれどもその間、突然シンジ湖から現れた私をナナカマド博士は見定めるようにじつと

見ていて、その隣にいるコウキ君はそんな博士にどこかおろおろしている様子だつた。このままヒカリやジ Yun に構いたいのも山々だけれど、相手はポケモン研究界で名のある博士だ。無碍にするわけにもいかず、私は一度ヒカリとジ Yun の頭を撫でると博士の前まで歩み寄る。

「初めまして、ナナカマド博士。ヒカリの姉のセツナと申します。どうやらあの子たちが、博士から大切なポケモンを貰つたとのことで……今この場に居ない二人の保護者に代わり、お礼を言わせてください。ありがとうございます」

「……ふむ。見たところ、君はトレーナーかね？」

「いいえ。私もヒカリたちと一緒に、たつた今これから旅に出る予定のただの初心者です。この町を出る前にシンジ湖を散歩していたのですが、荷物を取りに家まで戻る途中で」

「あれ、そうなの？ 僕はてっきり、もうホルダーにボールがついているから普通にトレーナーかと思つていたけれど」

コウキ君が思わず漏らした言葉を聞きつけ、凄い勢いで駆け寄ってきたジ Yun とヒカリは私の腰についているモンスター ボールを見て驚いたように目を見開いた。隠すつ

もりではなかつたけれど、私がこの一年シンジ湖でゲッコウガに会つていたことは二人にも言つていなかつたから、驚くのも当然の反応だつた。

「ええつ……マジで?!」

「お姉ちゃんつたら、いつの間に?!」

「うん? さつき、そこのシンジ湖でちよつとね」

「何だつてんだよー! てつきり、俺とヒカリがトレーナー一番乗りかと思つていたのに！」

「ジユン、トレーナーは一番乗りするものじやないと思うんだけど……」

悔しがるジユンを宥めようとしたのも束の間、ポン、という音がどこからか鳴る。それは、ナナカマド博士の鞄に残つていた一つのボールから放たれて。眩い光が収束すると同時に、そのボールから出てきた何かが突然私の体に飛びついてきて少しバランスを崩したが、何とか倒れず持ち直した私はその存在を見て再び呆気に取られてしまつた。

「こらつ、ヒコザル! セツナさんにいきなり何やつてるんだ!」

『ポツチヤマとナエトルばっかりずるい! ぼくだって、皆と同じように旅がしたいよ』

！」

コウキ君が頑張つて私に抱き着いたヒコザルを離そうとしてくれているが、ヒコザルはコウキ君の制止を振り切り更に私にしがみついてくる。このヒコザルに何があつたのか分からぬけれど、とりあえずはこの場を落ち着かせることが先決だろう。

「私なら大丈夫。だから、えつと……」

「あ、そういういえば自己紹介がまだでしたね。僕、ナナカマド博士の研究所で助手をしてい
るコウキです！宜しくお願ひします！」

ゲームで何度も見かけたから知つてゐるよ、何てことは流石に言えず、曖昧な笑顔で
宜しくとだけ答えた私は今もしがみついていたヒコザルに視線を移す。ヒコザルは自
分を見てくる私に余程驚いたのだろうか、その表情にはどことなく不安が浮かんでいる
ようだつた。

「そう、コウキ君ね。コウキ君、良かつたら少し時間を貰えないかな？」

「……え？」

「急ぎじやなれば、の話だけれど。ナナカマド博士も『多忙でしょうし』
「いや、私なら大丈夫だから構わないと。どうするつもりかね?」

それまで事の成り行きを黙つて見守っていたナナカマド博士が静かに口を開く。
さつきよりは大分ましになつたものの、未だにどこか私を見定めるような視線を向けて
いるような気がする博士に内心冷や汗が流れたが、そんな私の気持ちを察したかのよう
に腰の辺りで揺れるボールの存在に気付いた私はゆっくりと一度呼吸してから博士に
向き直つた。

「……彼に、頼んでみようと思ひます」

008

慎重にホルダーから取り出したボールの開閉ボタンを押すと、赤い光が放たれた直後にゲッコウガが私の前に佇む。ポケモン研究者であるナナカマド博士は別として、ヒカリとジユン、そしてコウキ君は多分初めてみたであろう彼に心底驚いていた様子だつたが、生憎今の私にはそんな彼らを見て和んでいる暇もなかつた。

「出てきてくれてありがとう、ゲッコウガ」

『何てことはない。中から今の状況については把握している』

『そう。じゃあ、早速で悪いけれど、この子と話してみてくれる?』

未だに私から抱き着いて離れないヒコザルを見て、ゲッコウガは若干目を細める。そして、場合によつては睨んでいると言えないこともない視線でヒコザルを見つめながらも、とても冷静な声でこう尋ねた。

『ヒコザル、といつたか。お前は一体、セツナに何を望んでいる?』

『……、』

相手は幼いポケモンなんだからもう少し優しい口調で尋ねた方がいいんじや、なんて
ちよつと心配していた私を他所に、なぜか暫く無言だったヒコザルの目がゲツコウガを見つめてきらきらと輝きはじめる。

『か、』

「ん？」

『かっこいい……!!』

「……、……あれ？」

『ねえねえ！お兄さん、お兄さんは何ていうポケモン?!』

てつきり泣き出すのではないか、という私の考えに反し、しがみついていた私の腕から離れそうになるくらい勢いよく身を乗り出したヒコザルが今後は逆にゲツコウガへ尋ねる。ちなみにゲツコウガ自身はそんなヒコザルに驚くこともなく、あくまでも冷静なままだった。

『……、ゲッコウガだ。それがどうした?』

『初めて聞いた! お兄さん、遠くから来たの?』

『ああ。生まれはここよりも更に遠いところだ』

『そうなんだ! あのね、ぼく、今までポツチャマやナエトルと一緒に過ごしてきたんだけれど、ずっとトレーナーと旅に出てみたかったの! でも、あの子たちには選んでもらえなくて……だからぼく、お姉さんと一緒にいい!』

『つまり、……ここを偶然通りがかつたからお前はセツナが良い、と?』

『違うよ! だつてお姉さん、今までぼくが見てきた人間の中で一番優しい目をしていたから! そんなお姉さんと一緒にいたら、ぼく、もつと強くなれそうな気がして、ええと、あとは……うーん。うまく言えないや。ねえ、これだけじやだめ?』

『だ、そうだ。セツナ、どうする?』

「うん? どうするつて?」

『このヒコザルはまだ幼いが、決して頭が悪いわけではないようだ。むしろお前をパートナーにと選ぶ辺り、良い目を持っていると思う。俺は連れていっても構わない。そう判断するが、決めるのはセツナ自身だ。好きにするといい』

ゲッコウガからそう告げられた後で、私は今も私に抱き着いているヒコザルを見下ろ

す。私は私自身が特別優しいと思つたことなんてないけれど、どんな切欠であれ私と旅に出たいと思つてくれているのなら、一つ聞いておきたいことがあつた。

「ヒコザル。私とも、少しだけお話してくれる?」

『……うん、』

「私もあの子たちと同じ、これから旅に出る初心者なの。だから私と一緒にきたら、もしかしたらバトルの指示出しが上手くいかなくてあなたを苛々させることがあるかもしれませんし、ご飯だつて研究所にいた頃とは違つて、場合によつてはいつも贅沢なものは食べさせてあげられないかも知れない」

『……?』

「ええと、要するに……研究所で過ごしていた方が幸せだつた、つて思う可能性があるかもしれないってことを言つておきたかったんだけど。そのくらい、トレーナーと旅に出るのつて実は結構危険で厳しいことなの。ヒコザルには、その覚悟がある?』

『かく?』?

「そう。例えこれから何が起きても、私と一緒に生きる、という覚悟

『……お兄さんにも、あるの?』

大人しく私の話を聞いてくれていたヒコザルは眉間に皺を寄せつつ、不意に私たちを見守っていたゲツコウガへと視線を移す。ヒコザルにつられて私もゲツコウガを見ると、彼自身は優しい眼差しでただ私たちに微笑んでいた。

『ああ。俺はセツナを信じている、何があつても。だからこそこうして、セツナの傍に在る』

『そつか……そつかあ、』

余りにストレートな彼の物言いにちよつとどきつとした私は、それを悟られないように願いながら再びヒコザルに視線を戻す。ヒコザルは何かを噛み締めるように何度もうんうんと唸つていたものの、結論が出たのか私を笑顔で見上げてきて。

『……うん！ やっぱりぼく、お姉さんやお兄さんと一緒にいい！』

「……あれ、そうくる？」

『聞いたのはお前だろう。しつかりしろ、セツナ』

「いや……うん。私今、ヒコザルに結構厳しいことを言つたつもりだつたんだけど」

『だつて、お姉さんの言つてることつてすぐ当たり前のことじゃない？ 一緒に旅をす

る内に、一緒に生きて、一緒に乗り越えてこそお互いに強くなれるんじやないかな?』

『ほらな。やつぱりこのヒコザル、頭は悪くなかったただろう?』

『ねえねえ、お姉さんは? お姉さんは、ぼくと一緒にだと、いや?』

ヒコザルの答に驚かされた私をさておき、ゲツコウガは相変わらず冷静に、そしてヒコザルは何も言わない私に不安を感じたのかまた眉間に皺を寄せてしまう。そういう顔をさせたいわけではなかつたので、ヒコザルには何も言えないながらもそつと頭を撫でてみると、まるで花が咲くかのように微笑んだヒコザルが尚更私に擦り寄つてきて正面かなり癒された。

「……けれど、あなたと一緒に連れていくてもいいかどうかは、私だけじゃ決められないわ」

「いや、もう十分だよ」

「ナナカマド博士?」

「セツナ、と言つたかね。君はきっと良いトレーナーになる。今の君たちのやりとりを見ていて、私はそう確信した。だからこそこのヒコザルは、セツナ、君に譲ろう」

それまで私たちの様子を見ていたナナカマド博士から思わぬ発言が出てきて、私は咄嗟にナナカマド博士をまじまじと見てしまう。よく考えればかなり失礼なことだつたろうに、博士は私の不躾な視線を気にするどころか、逆に微笑ましそうな視線を向けられて恥ずかしくなつてしまつた。

「……本当に、宜しいのですか？」

「構わないよ。むしろこちらこそ、疑うような真似をしてすまなかつたね。最近はポケモンを粗末に扱う乱暴なトレーナーも増えてきてるから、どうにも警戒しそぎてしまついたらしい。年寄りの悪い癖だ。セツナ、ジ Yun とヒカリにも既に伝えたが、君も後でマサゴタウンにある私の研究所まで一度来てみると良い。きつと損はないはずだ」

「え、ええと。ありがとうございます……？」

あつさりとヒコザルの譲渡、もとい研究所への訪問を許されたことにびっくりしすぎて頭がついていかない。しかし呆けているわけにもいかず、何とかヒコザルを抱きかかえたままでお辞儀をすると、博士はそんな私を相変わらず微笑ましそうに見つめていた。……もしも私が自意識過剰であるのならば、この視線は今私の腕の中にいるヒコザ

ルに向けられていたものだつたのかもしれないが。

「……ふふ。君の将来が実に楽しみだな。さて、落ち着いたところで私は先に戻るとしよう。コウキ、そろそろ行くぞ」

「あつ、はい！それじゃあ皆、また後で！」

颯爽と歩き出したナナカマド博士に続き、慌ててコウキ君もその後を追つて駆けていく。そんな彼らを、取り残された私たちは結局姿が見えなくなるまで見つめていた。

マサゴタウンへ向かうナナカマド博士とコウキ君を見送った後、201番道路に取り残された私たちの間には何とも妙な空気が流れる。ここはこの中で年長の私から何か声をかけるべきだろうか、と頭の中で考えながらも私に抱き着いたままだつたヒコザルがぎり落ちないように抱えなおしていると、意外にも最初に声をかけたのは妙に興奮しているらしいジユンだった。

「セツナ、すっげー！流石おれが認めただけのことはあるぜ！ヒコザルに加えてそのポケモン……えっと、ゲッコウガだつたつけ？そんな見るからに強そうなポケモン、一体どうやつて捕まえたんだ？なあ、おれにも教えてくれよ！」

少し前のヒコザルと同じように、目をきらきらと輝かせたジユンがナエトルを連れたままゲッコウガの周囲をくるくると駆け回る。彼については私が捕まえた、というよりも私と一緒に来てくれることになつた、といった方が正しいので何と答えればよいか迷つていると、ゲッコウガはどこか呆れたような視線をジユンに向けてから無言でボー

ルの中へ戻つてしまつた。あ、と声を上げるも時既に遅く、再びゲッコウガが外へ出てきそうな気配はない。基本的に寡黙な彼のこと、もしかしたらジュンが元気すぎてちょっと疲れたのかもしれないと私は考えていたが、ジュン本人はそんな彼の性格を全く知らないこと也有つて不思議そうに首を傾げていた。

「……ジュンがあんまり元気すぎて、引かれたんじゃない？」

「んなつ?!」

「ヒカリ、何もそこまで厳しく言わなくて……」

「そう? あたしはあながち、間違つてないと思うけどなあ」

あからさまにショックを受けてしまつたジュンに対し、ヒカリは更に容赦ない言葉を浴びせる。そのまま俯いたジュンは体をわなわなと震わせながらも、次の瞬間に再び顔を上げたかと思えば、今度はヒカリを真つ直ぐと見据えていて。その眼差しの強さに私だけでなく、ヒカリ本人も少し驚いた様子でジュンを見遣る。

「くくっ、こうなつたら……ヒカリ! おれとポケモン勝負しようぜ!」

「ジュン、本氣? あたしが貰つたポツチャマと、ジュンの貰つたナエトルじや、お互いま

だ簡単なわざしか使えないと思うけど……」

「それがどうした！ポケモントレーナーなら、バトルをやつてみてなんぼだろ！それともヒカリ、お前、おれとナエトルに勝つ自信もないってことか？とんだ腰抜けだな！」

あくまでも強気な態度でいるジュンとは異なり、ヒカリの方は眉間に皺を寄せながらポツチャマをぎゅっと抱き締める。どうやらヒカリはバトル 자체にそこまで乗り気ではないものの、ジュンに腰抜けとまで言われたのが彼女にとって大変気に食わなかつたらしい。その証拠に、ヒカリの腕に抱かれたポツチャマも厳しい目付きでジュンとナエトルを見つめている。私が覚えている限り、原作における二人の初めてのバトルは確かにここまで陥落な空氣じやなかつたはずなんだけれど……。

「いいわ。そこまで言うなら、受けて立つてやろうじやない！」

「よおし、そこなくつちやな！それじゃあ早速バトル、始めようぜ！」

すっかり熱が入つてしまつたらしいジュンとヒカリはそのままゆつくり向かい合うと、それまで腕に抱いていた互いのポケモンを地面に下ろす。そして完全に戸惑つている私とヒコザルをさておき、混じりあう視線の中央でいつそ激しい火花が聞こえてきそ

うなほど真剣な眼差しをした二人は、そのままどちらともなく声を張り上げた。二人の指示を聞いたポケモンたちも同時に走り出し、周囲に砂埃が舞う。

「何だつてんだよー！途中まではいい感じだつたのに……！」

「ふふ。あたしが腰抜けじやないつてこと、これで分かつた？」

「あー、はいはい分かりました……つでも！次会つた時は、おれが絶対勝つ！そんでもつて、セツナ！おれ、強くなつたらお前にも挑むから、今の内に覚悟しておけよな！」

二人のバトルに関して、結末から言つてしまえば今回はヒカリが勝利した。ジ Yun は攻撃だけでなく、ナエトルが覚えていた『からにこもる』も適宜指示してナエトルの防御も強化していたのだけれど、始終攻撃に徹したヒカリとポツチヤマに惜しくも敗れてしまつたのだ。ナエトルをボールに戻した後、悔しそうな表情を浮かべながらもヒカリとなぜか私にも宣戦布告したジ Yun は、私たち二人を置いてフタバタウンへと駆けていく。きっと、バトルで傷ついたナエトルを治療したらすぐにでも旅に出るつもりなのだ

ろう。原作を思い起こさせるように、相変わらずせつかちなジユンも見送った後でヒカリへと視線を移せば、ヒカリはどこか安堵した様子でポツチャマの頭を撫でていた。私は最後まで見ていることしか出来なかつたが、きっと少なからず緊張していたに違ない。

「ヒカリ、ポツチャマ。初めてのバトルお疲れさま」

「あつ、お姉ちゃん！ごめんね、あたしとジユンのバトルに付き合わせて」

「ううん、いいよ。二人のバトル、見応えがあつたし、参考になつたから。ね、ヒコザル」

折を見て声をかけた私と、私の言葉に笑顔で頷いたヒコザルを見てヒカリがほつと息を吐く。突然始まつた二人のバトルには驚かされてしまつたけれど、何はともあれ無事に終わつたのは良いことだつたと思いたい。

「ヒカリ。とりあえず、私たちも一旦家に帰らない？ポツチャマも初めてのバトルで疲れただろうし、私も荷物を取りにいかないといけないから」「あ……、そうだね。うん、ここにいても仕方ないし、帰ろつか」

ヒカリもポツチャマを、ボールに戻そうとしたものの、あくまでもヒカリと一緒に良いのか横に首を振ったポツチャマを見て、ボールを直す代わりにポツチャマと手を繋いだヒカリが一度だけ私を呼ぶ。それに返事をしたものの、何でもないとだけ答えたヒカリは敢えて私の一步前をいくように意気揚々と歩き出した。日の光を受けて仲良く歩くヒカリとポツチャマの姿が、何だかとても眩しく思える。それは今まさにこの瞬間、トレーナーとしての一歩を踏み出した妹の成長を間近で見たからこそなのだろう。

ヒカリやポツチャマと一緒に家まで戻ってきた後、玄関に置きっぱなしにしていた自分の荷物を手に取つた私は、当初の予定通りそのままフタバタウンを出発することにした。アヤコさんは私とヒカリがそれぞれナナカマド博士からpokeモンを譲つてもらつた話にとても驚いていたものの、再び私を笑顔で見送り、ヒカリは名残惜しそうにしながらも私に行つてらつしやいと言つてくれる。ちなみにヒカリも旅に出るつもりではあつたものの、そのための準備が完全に整つていないこと、何よりもポツチャマと一緒に時間を過ごすためにも明日旅立つつもりでいるらしい。何かあつたら必ず連絡するよう、とアヤコさん以上にヒカリから念を押されて言われた理由が特に思い当らず首を傾げた私を他所に、まだボールに戻つていなかつたヒコザルはちょうどポツチャマと別れの言葉を交わしていた。

『それじゃあ元気でね、ヒコザル。また会えたら、今度はヒコザルともバトルしてみたいな』

『うん！ポツチャマも元気でね！』

笑顔でポツチャマへの挨拶を終えたヒコザルに声をかけ、一度ボールに戻した私はそうして初めてこの家を出る。前世とは似ても似つかない、けれど、今生において血の繋がりがなくとも私にとつて既に大事な家族となってくれたアヤコさんとヒカリに感謝しながら、一度も振り返ることなく201番道路へと進んだ。この旅がいつ、どんな形で終わりを迎えるのか。それは私自身にもまだ分からぬ。しかし、いつかは訪れる旅の終わりで、せめてあの二人に恥じない自分で在れたら良いと——歩みながらも、それだけはもう決めていた。

「……それで、これからのことなんだけれど」

201番道路に到着してすぐ、私は周囲に誰もいないのを確認してからゲツコウガヒコザルをボールから出すと、鞄にしまっていたシンオウ地方の地図を広げた。ゲームでは特に気にしたことなかつたけれど、これから私と一緒に旅をしていくことになる二人とは出来る限り一日の予定を共有しておいた方が戸惑わせずに済むだろう、という私の独断からの行動だったが、二人はそれを嫌がるどころかむしろ興味を持つて一緒に

地図を見てくれたことに安堵して言葉を続ける。

「まず、今いる201番道路を通りてマサゴタウンに着いたら、先にナナカマド博士の研究所に寄るよ。多分そんなに時間はかかるないと思うけど、博士に会った後は202番道路も通つて、遅くとも夕方までにはここ、コトブキシティまで行くつもり。で、今日の夜はコトブキシティのポケモンセンターで宿泊して……とりあえず明日はゆっくり町を散策、つてところかな？ 万一博士のところで時間がかかつたら、マサゴタウンのポケモンセンターに宿泊するかもしれないけれど。ここまでで、何か聞いておきたいことはある？」

地図を指差しながら二人に一日の流れを説明すれば、二人は頷きながら私の話を聞いてくれる。ゲツコウガは特に問題ないらしく、無言のまま地図を眺めていたが、代わりにヒコザルが炎の灯つた尻尾をゆらゆらと揺らしながら私をじっと見つめてきた。

『……ねえ、今やつと気付いたんだけど。もしかして、お姉さん、ぼくやお兄さんが何て言つているのか、分かる？』

「ああ、そういえば……まだ言つてなかつたつけ。原理は分からないけれど、どうも私は

あなたたちポケモンと普通にお話できるみたいなの。といつても、人の中ではかなり珍しいことだろうから、今ここにいるあなたとゲッコウガ以外には誰にも教えてないんだけどね』

『へえ、そなんだ！ぼくは、お姉さんともお話しできて嬉しいけどな』

純粹な眼差しで私を見つめながらそう言つたヒコザルの頭を撫でれば、ヒコザルはにこにこと笑つて私に擦り寄つてきてくれた。出会つた当初、何事もなく意思疎通がとれていたことに私よりも先に気付いた冷静なゲッコウガはともかくとして、人だけではなくポケモンの中には私のような所謂異端者を氣味悪く思う存在ももしかしたら居るのかもしれない内心危惧していた私にとつて、ヒコザルのこの反応は素直に喜ばしいものだ。

「それとヒコザル、自己紹介が遅くなつちやつたけれど私の名前はセツナよ。私のことなら遠慮せず、名前で呼んでいいからね。で、こつちはもう知つていてるけれどゲッコウガ。ちなみに彼は水と悪タイプのポケモンなの。改めて、これからよろしくね』

『うん！セツナ、こちらこそよろしく！』

『……そつちが落ち着いたようだから、俺もちよつと聞いていいか？』

元気よく頷いたヒコザルに無事自己紹介を終えると、どうやら一通りシンオウ地方の地形を確認できたのか、器用に地図をたたみながら私の鞄に戻してくれたゲツコウガからタイミング良く声をかけられた。

「うん。どうしたの？」

『いや、今まで単純に聞きそびれていたんだが。セツナは他のトレーナーのように、最終的にこの地方のリーグを目指すつもりなのか、と思って』

『？リーグ？』

『その地方のジムバッジを全て制覇したトレーナーだけが挑める、トレーナーにとつての最難関の試練、とでも言えばいいのか……？正直、俺も詳しくは知らないがバトルを極めるトレーナーなら避けて通れないところだと認識している。お前は自分のペースでこの世界をめぐりたい、と言っていたが。その辺のことはどうなのか、一応確認しておきたくてな』

あくまでも原作においては、主人公の旅が辿る最終目的地と言つても過言ではなかつたポケモンリーグ。確かにゲツコウガの言つたどおり、ポケモンバトルを極めたいト

レーナーにとつては、当代チャンピオンに勝利することが最大の目的且つ栄誉とも言えるだろう。無論この世界でもポケモンリーグのチャンピオン、というのはどの地方であつても社会的に相当地位が上の存在らしく、彼らそれぞれの只ならぬ強さと相まって挑戦者の中で勝利を得るトレーナーというのは昔からごく稀らしい。つまりはそれほどに険しく、厳しい道だがその分勝利したときの喜びや栄光はそのトレーナーにとつてきつと何物にも代え難い宝となるのだろう。けれど、私には最初から『それ』を選ぶつもりはまるでない。

「それも言い忘れていたけれど、私、よほどの理由がない限りリーグには行かないよ?まあ、色々な町へ行くためにジムバッジの方は一通り集める予定だけれど……そもそも私は、最強のトレーナーになりたいわけではないし。私の旅の目的はあくまでもこの世界をめぐりながら、あなたたちと一緒に色々なことを知つていきたい、つていうものだから」

私の出自も含めてね、というのは心の中で呟き、ゲッコウガの手を取ればひんやりとした感触をしている彼の指に優しく手を包まれ、思わず笑みが零れる。出会った当時からそうだけれど、やはり彼は私に対しても優しい、と思うのは単に羨妬目からだろ

うか。

「ゲッコウガやヒコザルがもし挑戦したい、っていうなら考えてはみるけれど。どう？」

『……いや、俺自身もここまで興味はないから別にいい』

『ぼくもセツナの考えに賛成！だつて、別にバトルだけが全てじゃないもんね。あつ、勿

論バトルも最初から負けるつもりなんてないけど！』

「ふふ、そつか。じやあ、シンオウ地方をめぐるためにジムには行くけれど、今後リーグに行く予定はなしつてことで。話もある程度纏まつたことだし、まずはナナカマド博士の研究所へ向かいましょか」

ゲッコウガとヒコザルの二人とも今後のことについて同意を得られた後、私は再び二人をボールに戻してから201番道路を歩き出す。研究所へ向かうべくすっかり足取りの軽くなつた私をまるで見守るかのように吹いた風は穏やかなもので、ただ私の髪を優しく撫でていった。

0
1
1

ゲームでは操作するだけで数分かからなかつた道のりも、実際に201番道路を歩いてみればゆうに十分程度はかかっていることでこの世界が今の私にとつての現実そのものなのだと知る。さりとて悲観しているわけではない。初めてこの世界で目を覚ましてから五年も経つた今となつては、一度死んだ以上かつて生きたあの世界へ戻れるはずがないことは分かりきつていたし、何より私にはアヤコさんやヒカリにジュン、そして私と一緒に旅に出る彼らだつて居る。ギンガ団のことを考えると決して不安がないわけでもないが、今の私はシンオウ地方をめぐるこれから旅でどんな人やポケモンに出会うのか、どちらかといえばそういつた未知に対する楽しみによつて心が満たされていた。

「あつ、セツナさん！お待ちしていました」

201番道路で初めて叢に足を踏み入れてはみたものの、一度も野生のポケモンに遭遇することなく極めて順調にマサゴタウンへ到着した私は、ちょうどナナカマド博士の

研究所前で佇んでいたコウキ君に声をかけられる。原作通りならばここで声をかけられるのはヒカリだつたはずだけれども、あの子は明日まで家にいる予定だ。そもそも家を出る前に出会つたナナカマド博士から私もヒカリたちと同じように声をかけられたから、こうしてコウキ君が私を待つてくれていたのは別段不自然なことではなかつた。

？」

「さつきぶりだね、コウキ君。もしかしなくとも、博士の元まで案内してくれるので案内して貰えるのかな？」

「ううん、そんなことないよ。待つていてくれてありがとう」

「そう言つてもらえると助かります。それじゃ、このまま僕についてきてください」

簡単な挨拶を済ませた後、コウキ君が研究所の扉を開けるのに続いて私も所内に足を踏み入れる。ぱつと見ただけでもポケモンに関するものだと分かる分厚い本や研究資料、そういうものが雑然と並んでいる中でも変わらず颯爽と歩くコウキ君についていくと、ナナカマド博士は研究所の奥にある部屋にいた。どうやら何か作業をしている途中だつたらしい。

「博士、セツナさんをお連れしました」

「ああ。ご苦労、コウキ」

「ナナカマド博士、こんにちは」

「僕、ちょっとお茶でも淹れてきますんで、セツナさんもどこか近くに……あ、ちょうど椅子があるので、良かつたらここに座つていてください。博士はいつものでいいですか？」

「うむ。よろしく頼む」

「はい！」

こちらに振り向いた博士に挨拶した直後、コウキ君は私を空いていた椅子に座らせる
と少し慌てた様子で部屋から出ていってしまう。年上の私が来た所為で気まずくなつ
たのだろうか、とぼんやり考えていると、ナナカマド博士がなぜか口元に手を当てて声
を抑えるように笑いはじめた。その笑みの意味が分からず首を傾げる私と、博士の視線
が合う。初対面の時と異なり、博士の視線はもう私を見定めるようなそれではなく、ご
く普通のものだつた。

「……コウキの奴、珍しく張り切つてゐるな。よほど君がここに来たことが嬉しいらし
い」

「……え？」

「何、コウキは私の助手として普段から出かけることは多いが、その分同年代の子どもと接する機会が少なくてね。本人は助手の仕事に集中するためと言つているが、どうも昔から騒がしいのが苦手らしく余り自分から人に声をかけるのも乗り気でないようだ。だからこそ、同じく子どもにしては落ち着いた雰囲気のある君をコウキは気に入つていいのだろう」

まあこれも私の推測に過ぎないが、と続けて呟く博士に私は何と言つたらいいのか分からぬ。そんな私の混乱も察したのだろう、博士は目を細めながら椅子の背凭れに身体を預け、多少リラックスした体勢になつてから静かな口調で語りかける。

「何も難しく考えることはない。私が言いたかったのはようするに、友人として今後もコウキに付き合つてもらえると嬉しい、ということだ」

「……ですか。そういうことなら、喜んで」

「あれ？ 博士、セツナさんに図鑑の説明はまだされていなかつたんですか？」

お盆に三人分のマグカップを乗せて戻ってきたコウキ君が、きよとんとした顔で博士にそう尋ねる。博士はコウキ君から飲み物（色からしてどうやらコーヒーラしい）の入ったマグカップを難なく受け取ると、机の隅に置かれていたあるものに手を伸ばした。

「ああ、ちょっと別の話題があつたものだからね」

「……？」

「单なる世間話の一つだ。さて、コウキも戻つてきたところだしそろそろ本題といこう。セツナ、君には今後トレーナーの一人として、今から私が渡すこのシンオウ図鑑のページを埋める作業に協力してもらいたい。ちなみに、ポケモン図鑑のことは知つていてるかね？」

「……ある程度のこととは。ポケモンに出会うことで身長や体重、生息地といったあらゆるデータが登録されていく他に、今自分が連れているポケモンがどんなわざを使用できるのか。それも簡単に確認できてしまう最新鋭の図鑑、ですよね？」

「その通り。コウキは勿論のこと、ジ Yun やヒカリにも手伝つてもらうつもりでいるが、人手が多いに越したことはない。あと、君には彼らとは別にこちらの図鑑も渡しておこ

う

今博士が説明してくれたシンオウ図鑑とはまた別に、シンオウ図鑑に似ているものの、形状が若干異なっている図鑑と思われるものも私に渡される。どうやらコウキ君も知らなかつたものらしく、彼も私同様それをまじまじと見つめていた。

「ナナカマド博士、これは……？」

「それはカロス図鑑、読んで字の如くカロス地方のポケモン図鑑だ。元は予備品だが、予備のままここに置いておくよりはあのポケモン……ゲッコウガを連れている君が持つておいて、損はないだろうからね」

「へえ、セツナさんが連れていたポケモンって、カロス地方のポケモンだつたんですか？僕はてっきり、シンオウの中でも珍しいポケモンかと思っていましたが」

「ゲッコウガはこちらにおけるエンペルト……つまり、ポッチャマと同じく元はケロマツというポケモンの最終進化形でもある。まあ、私とてこの目で実際にカロスのポケモンを見たのは今日、セツナの連れていたあのゲッコウガが初めてのことだつたがね」

「いや、急ピッチでデータのアップロードに取り掛かっていたんだけれど、どうやら間に合つたようで安心したよ！そつちの図鑑自体は、もう問題なく使えるはずだからね！」

それにしても、まさかシンオウ地方にゲッコウガがいるだなんて夢にも思わなかつたなあ」

博士の目の前に置かれていたパソコンから突如明るい声が聞こえたかと思えば、画面上には見たこともない男性がこちらに向かつてにっこにっこに微笑んでいた。彼も白衣を羽織つている辺り、ナナカマド博士と同じ研究者であることはほぼ間違いないだろう。否、本当は私も知識として彼のことを少しだけ覚えていて。BWの次世代、XYの舞台となつたカロス地方で主人公に初めてのポケモンを託してくれた存在。ああそうだ、彼の名前は――。

「……これ、プラターヌ君。自己紹介もなくいきなり話しかけられて、セツナも驚いているではないか」

「ああ、すみませんナナカマド博士！つい、博士の会つたトレーナーとゲッコウガが一体どんな子なのか気になり、いてもたつてもいられなくつて」

「プラターヌ博士、お久し振りです。お元気でしたか？」

「おっ、コウキ！暫く見ない間にまた遅くなつたね！そして……初めまして、君がセツナかな？僕はプラターヌ！今はカロス地方でポケモンの研究をしているんだけれど、昔

ナナカマド博士の元でお世話になつていた時期もある新米博士です。宜しくね！」

ナナカマド博士に促される形で、簡単に自己紹介してくれた。プラターヌ博士がやはり満面の笑みを浮かべたまま私に手を振ってくれる。画面越しとはいえど、ナナカマド博士とはまた違つてどこか緩さも感じられるようなプラターヌ博士の様子に、自然と私も笑えていた。

「初めまして、セツナです。こちらこそ宜しくお願ひします」

「うんうん、ナナカマド博士から聞いてはいたけれど、予想以上に可愛い女の子だね。」
いつかはカロスにも是非来てほしいものだよ！」

「……プラターヌ君、大事な話の最中でしけつと女性を口説きにかかるのは感心しないね。あと、忘れてはいるかもしれないが、セツナは未来あるシンオウのトレーナーだ。少なくとも、私の目が黒い内に手を出すのは却下させていただこうか？」

「じよ、冗談ですよナナカマド博士！流石の僕も、そこまで良心を失つたわけでは……！」

「ふふ、知つてゐるとも。私なりの冗談だ」

……途中、何やら不穏な会話が交わされていた気もしたが、幸か不幸か咄嗟にコウキ君から耳を塞がれたこともあり。そのときのプラターヌ博士とナナカマド博士が結局何を喋つていたのか、私が知ることはなかつた。

プラターヌ博士とパソコンを通じたテレビ電話を終えてからも、楽しい時間はあつと
いう間に過ぎていく。研究所ではナナカマド博士の好意に甘えてコウキ君と三人でお
昼をご馳走になつてしまつたり、研究所を出た後はコウキ君にポケモンセンターやフレ
ンドリイショップについて簡単に案内してもらつたりしている内に、気がつけばおやつ
前の時間帯にまでなつていた。

今日は元々夜までに202番道路を通過し、コトブキシティのポケモンセンターで宿
泊する予定だつたからそろそろマサゴタウンを出発しないとぎりぎりの到着になる可
能性がある。日が暮れるまでまだ時間もあるが、途中でトレーナーに勝負を挑まれる可
能性もあるし、何よりゲッコウガやヒコザルがついてくれているとはいえ、ぱつと見少
女の一人旅にしか見えない今の自分が夜遅くまで行動するのは好ましいことではない
と自覺していた。回避できる危険ならば、用心するに越したことはない。

ちなみにコウキ君はヒカリの案内も控えているために今日はマサゴタウンで宿泊す
るらしく、私がコトブキシティへ向かうと知ると少しだけ残念そうにしていたが、おそ
らくまた明日も会うと思うと伝えれば途端に目を輝かせていた。そんな彼に博士の助

手といつても、彼もジ Yun と同じくまだまだ年相応の男の子なのだなあ、とこつそり微笑ましくなったのは秘密にしておこうと思う。

さて、結論からいえば私たちは夜までに無事目的だつた町、コトブキシティまで辿り着くとポケモンセンターの宿泊施設でゆっくり体を休めていた。道中、やはり予想していた通りトレーナーからバトルを挑まれることも何回かあつたが、相手の大半がトレーナーになつたばかりの子どもたちだつたこともあり、幸い私たちがそこまで苦戦する事態はなかつた。とはいえた初めのバトルで少なからず緊張していたのか、夕飯を食べて早々うとうとしあじめたヒコザルは既にベッドの中央で丸くなつており、今ではすっかり熟睡している。そんなヒコザルを、私とゲッコウガは起こさないように気をつけながらお互いただ見つめていた。

「ヒコザル、今日バトルでいっぱい頑張つていたね。旅立つたばかりなのにすゞいなあ」
『……そうだな』

余程眠かつたのか、尻尾の炎さえ消えて深い眠りに落ちてることから相当疲れていたのか。或いは初めての旅ということで、無意識にはしやぎ疲れていたのか。もしかし

たらその両方だつたのかかもしれない。何にせよ、明日の朝にはまた元気な姿を見せてくれるだろう。

「何だか、ヒコザルを見てたら私も眠くなつてきちゃつた。ゲッコウガは?」

『俺はそこまで眠くはないが、セツナがこのまま寝るなら俺も眠つておく』

「そう。じゃあ、私も今日は早めに寝ておこうかな……、あれ? ゲッコウガはボールに戻っちゃうの?」

勿論ボールの中で休めないこともないが、てつきり! ポケモンセンターで部屋を借りてからは一緒に室内で寛いでいたゲッコウガが戻るのも不思議だつたので声を掛けてみる。

『ヒコザルはまだ子どもだから構わんだろうが……何だ、俺もそこで寝ていいのか?』

ボールを手に取る直前、振り返つたゲッコウガが私を見て目を細める。種族が違えど、どうやら彼は彼なりに私のことを心配してくれていたらしい。そういうところでもやつぱり優しいなと思いながら、私は考えるまでもなく素直に頷いていた。

「うん、いいよ。ゲツコウガも良かつたら一緒に寝よう『……、……えつ』

「駄目なの?」

『いや、だ、駄目……ではない、が』

「?嫌なら強制はしないけど」

他人の体温を感じると逆に落ち着かない場合もあるのかもしれない。そう思つて首を傾げれば、うつ、となぜか息を詰まらせたゲツコウガが暫くして、ボールからそろそろと手を離し私の方へと近付いてきた。

『……嫌じや、ない』

「そつか。じやあ、はい。こつちにどうぞ』

『……、』

ベッドに敷かれた布団の端を捲ると、無言でゲツコウガが私の隣に寝そべる。こんなときまで別に足音を消さなくたつていいのに、もしかして彼は緊張しているのだろう

か。いつも冷静な彼にしては、正直かなり珍しい姿だと思う。部屋の明かりは既に消し
たから私の目に彼の表情は良く見えず、代わりに互いの呼吸とヒコザルの寝息しか聞こ
えてこない。そういうえばゲツコウガに会っていたのは大体朝や昼が多かつたから、こう
して一緒に夜を過ごすのも実は今日は初めてだとふと気付く。それなら彼が緊張する
のも、若干分かる気がした。

「間にヒコザルがいるから、かな。何だか、あつたかいね」

『……そうだな』

「……、……ねえ」

『ん?』

「ありがとうね」

『……何が』

「何となく。これから旅で何があるか分からないけれど、やっぱり、ゲツコウガが居て

くれてよかつたなあって改めて思つて。ちゃんと伝えておきたかったの」

『……もう十分伝わってるから、いい』

「そう? ならよかつた」

ふふ、と柔らかな笑みが零れる。私も少なからず疲れていたのだろうか、何だか気分がふわふわとしている。

「おやすみ、ゲッコウガ」

『……ああ、おやすみ』

「……、……」

『……セツナ?』

ぼんやりと見えてきた視界を頼りにゲッコウガの頬、と思われる場所へ手を伸ばす。触れた皮膚はやはりひんやりとしていて、彼が私と同じ人間ではないことを実感させた。それにも構わず、私は自分から手を離そうとはしない。ただ、今私の心にあるこの気持ちが彼に少しでも伝わればいいと、それだけを願い夢心地で想いを告げる。

「……すきよ、ゲッコウガ」

『……、……は、』

「あなたの過去なんて、何ひとつ、知らないけれど……わたしは、一年前からわたしとただ一緒に居てくれたあなたが、すき。だいすき。だから嬉しかった。わたしと、一緒に

来てくれるつて知つて、ほんとに、嬉しかつた』

『……』

「……おやすみ。いいゆめ、みてね」

プラターヌ博士やナナカマド博士から、そもそも私たちがどう出会つたのか。彼がこれまでどんな風に育つたのか、そう尋ねられたときにボールから彼も出していたのだけれど、そのときの彼が一瞬悲しそうに目を伏せていたことを隣にいた私はすぐに気付いてしまつた。けれど彼の過去を私は知らないし、彼もまた私の秘密、かつてこの世界をゲームとして知つていた前世があつたことだつて知らない。お互に、知らないことはまだたくさんある。それでも今のあなたがすきだと思う人間が目の前にいることを、彼には知つていてほしかつた。

『……、なんてやつだ、まつたく』

こんな状況で呑気に夢を見るほど眠れるわけ、ないだろうに。

——そう咳きながらも私を見つめていた彼の顔がこのときうつすらと赤かつたことを、眠りに着いた私はどうどう、気付かないままだつた。

0
1
3

翌日、旅立つた昨日に比べるとやや遅めに起きた私たちは、ポケモンセンターで軽い朝食を済ませてから早速コトブキシティを探索することにした。たくさん眠った分朝から元気いっぱいなヒコザルに対し、なぜかゲッコウガは眠そうに目を擦っていたのでひとまずボールに戻っていても大丈夫だと伝えたところ、素直にそうすると答えられたために今私の隣にはヒコザルだけがいる。生まれてからナエトルやポッチャマと一緒に研究所で育ってきたヒコザルにとつては目に映る全てが興味深いらしく、周辺をきよろきよろと見渡している様子は実に微笑ましい。通りがかつた人からも、時折笑顔を向けられていた。

「ヒコザル、転ばないように気をつけてね」

『うん！ ところでセツナ、どこから行くの？』

「そうだね……まずは、テレビ局にでも行つてみようかな」

コトブキシティの主要な施設として、その他にはトレーナーズスクールにポケツチカ

ンパニー、GTSなどもあるけれど、私は敢えてテレビ局から行つてみることにした。スクールには今まで通つたことこそないものの、この世界では十歳を迎えて保護者の同意も得られれば即座にトレーナーズカードを発行することが可能となる。出自不明の私も、アヤコさんとこのシステムのおかげでトレーナーと名乗ることが出来るのだから内心ほつとしたのはここだけの話だ。スクールにも通う子どもたちは将来エリートトレーナー、つまりはジムリーダーやそこに属するトレーナーを目指している場合が多いとも聞いていたので、一度見学するだけでも得られるものはあるだろう。しかしながら、私たちは昨日この町に到着したばかりであること、それからゲツコウガが眠そうにしていたこともあり、バトルに関する施設はとりあえず後回しにすることにしたのだ。

テレビ局に着くと、毎日行つているというコトブキくじを引きにいつて見事外れたり、ポケモンとの記念写真を撮影出来るコーナーがあつたのでヒコザルとツーショットをとつてみたり、はたまた一般向けに開放されたテレビ局のスタジオを見学してみたり、と予想以上に楽しい時間を満喫出来たおかげでゆうに一時間近くは経過していた。お昼を食べるにもまだ早すぎるので、テレビ局を出た私とヒコザルはコトブキシティの噴水広場で一旦休んでいくことにする。ゲームでは限定的だったが、実際の町の中ではあらゆる場所に自販機が設置されていたのでサイコソーダとミックスオレを一本ずつ

購入してから、ヒコザルと一緒に広場のベンチに腰掛ける。お昼前という微妙な時間帯の所為か、広場にいる人はまばらで皆それぞれ思い思いの時間を過ごしていた。

「ヒコザル、どつちにする?」

『ぼくから選んでいいの?』

『どうぞ。飲みたい方を選んでいいよ』

『ありがとう!じゃあ、ぼく、これにする!』

ヒコザルが指差したミックスオレの缶を取り、蓋を開けてから差し出せばにこにこと笑顔になつたヒコザルが嬉しそうにジュースを飲む。私もそんなヒコザルを見て微笑みながら、残つたサイコソーダの蓋を開けて飲んでみると口の中にはしゅわしゅわと甘い炭酸の味が広がつていつた。今頃ボールの中で休んでいるゲツコウガには、後で直接何が飲みたいか聞いてみようと思いながら、暫くヒコザルと穏やかな時間を過ごす。この後に行くならポケツチカンパニーか、それともトレーナーズスクールか。G T Sは正直用が無いので早々に除外してジュースを飲みながら悩んでいると、すぐ真後ろから何かが落ちる音が聞こえた。

「……、二ナ？」

「え？」

振り向ければ、なぜか私を見てとても驚いた顔をしている男の人が自分の鞄を落としていた。呼ばれた名前にも全く聞き覚えがないので私自身困惑しつつ、飲み干した缶はそのままに落とした鞄を拾いにいけば、途端に申し訳なさそうになつた彼から謝られる。

「す、すみません。お嬢さんが、私の知り合いと随分よく似ていたもので……」

「いえ、お気になさらず。鞄は大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとうございます」

「そうですか。それなら良かつた」

「……、」

「あの……、何か？」

鞄を受け取つてもなお、私をじつと見つめ続ける彼にどこかで会つたことがあるのだろうかと首を傾げるも、残念ながらやはり心当たりがない。もしかすると私自身が忘れているだけという可能性もあつたが、現時点では覚えがないのでどうしたものかと少々

気まずい沈黙が流れる。しかし、そんな空気を破つたのは彼の方からだつた。

「……お嬢さん。突然で本当に申し訳ないんですが、この後、少しお時間はありますか？」

「え？ えっと、」

「あつ、申し遅れました。私、ノモセシティのサファアリゾーンに所属している研究員のトオルと申します」

困惑する私を見て咳払いをしながら、トオルと名乗った彼は懐から名刺を取り出して私に差し出す。それを受け取つてみると、確かに名刺には彼が言つたとおりの地名と一緒に住所や電話番号まで添えられていて、彼が決して嘘をついているわけではないことが分かつた。

「いつもはノモセにいるんですが、ちよつとした事情があつてこの町に来ていまして」「そなんですか……もしかして、その事情と何か関係が？」

「その通りです。ただ、ここで説明するのはどうにも難しく……もしお嬢さんの了承が得られるならば、そこのコトブキマンションまで着いてきていただきたいんです。いき

なり声をかけてきて正直怪しい、と思われるのも当然だと、自覚はしております。ですが、それでもどうか信じていただきたいのです」

言葉だけ受け取れば、確かに彼自身が言うとおり見ず知らずの他人から突然話がしたいと誘われるのは不自然極まりないことだろう。けれども彼が私を見つめる目にはどこにもそういういた疚しさが見当たらず、それどころかむしろ切羽詰まっているような印象を受けた。ちょうど次の行き先を決めかねていたし、万一何かあればヒコザルやゲツコウガに助けを求めることがたって出来る。そう判断した私は、私と同じように戸惑った表情をしていたヒコザルを抱き寄せるときには了承の返事を伝える。果たして、何の話があるというのか。内心どきどきしながら、私は出会つたばかりの彼とともにコトブキマンションへとついていった。

0
1
4

迷いなく進んでいく研究員ことトオルさんの後を追い、噴水広場から五分も経過しない内にコトブキマンションへと辿り着く。ゲームではいつでも簡単に入れたマンションだが、流石にそんなこともなくトオルさんが持っていたカードキーによつて入口のロックを解除された後、私たちはともにエレベーターへと乗り込んだ。他の住人に出くわすことも一切なく、エレベーターが目的の階まできて停止すると難なく扉が開く。無機質な廊下には全く同じ見た目の扉がずらつと並んでいたが、そこでもトオルさんが先に進み、一番奥に当たる部屋の前まできてから漸く彼は立ち止まる。

「ここ、ですか？」

「そうです。別の鍵があるので、もう少々お待ちください」

玄関で使つたものとはまた別に、おそらく各部屋専用と思われるカードキーも懐から取り出したトオルさんによつて部屋の扉が開く。どうぞ、と声をかけられながら恐る恐る私も足を踏み入れると、てつきりトオルさん自身の部屋と思つていたそこは淡い色遣

いで統一されていて驚いた。

「……もしかして、二ナさん、のお部屋?」

「察しが良いですね。まあ、こういう色合いで男というのは珍しいかもしませんが」

リビングの白いソファに座るよう私に促したトオルさんは、一人だけその先にある部屋にも入つたもののすぐさま戻つてくる。しかし、その両手にはあるものが抱えられていた。

「ポケモンのタマゴ……?」

「ええ。これが、あの広場ですぐに事情を説明できなかつた要因の一つでもあります」

「あの……今更ですが、私、セツナつていいます。すみません、ちゃんと自己紹介もしていなくて」

「それを言うならこちらこそです。仮に不審者として通報されてもおかしくなかつたところを、お嬢さん……いえ、折角お名前を教えてくださつたのならばセツナさん、とお呼びするのが適切ですね。ともかく、セツナさんは私を信じてここまでついてきてくださいました。それだけで、私にとつては十分なことでしたから」

テーブルを挟んで向かいのソファに腰掛けたトオルさんは、別室から持つてきたタマゴを隣に置くと不意に深呼吸する。その間も、タマゴはぴくりとも動かない。

「……さて。前置きもこの辺りにして、早速本題をお話させていただきましょう」

「はい」

「まず、セツナさんも気になつていると思われるので先に伝えておきますが、私との部屋の所有者だつた二ナは学生時代に縁がありまして、彼女は私の後輩でした。ポケモンの研究者とともに志した同士……ああ、お恥ずかしながら、私は何年か留年した過去がありましてね。年齢こそ離れていましたが、彼女は特に私が目をかけていた後輩だつたんです。

いつだつて、彼女はポケモンに対する愛情が深く、フィールドワークにも積極的に出かけていく、とにかく元気がとりえの後輩でした。ホウエン地方のオダマキ博士をご存知でしようか？まさしく、彼のように一度ポケモンと聞けば西にも東にも躊躇わざ向かっていくという点で、とりあえず大人しい学生ではなかつたですね。それでしょっちゅう無茶もしていましたし。もう少し落ち着きを持ってと色んな人から注意されても、彼女はまた懲りずにフィールドワークに向かうんです。だつてそこにポケモンがいる

から！なんて、

大人のくせに笑つちやいますよね、と微笑むトオルさんは懐かしいものを見るように部屋の棚に飾られている写真を見つめる。そこには確かに、私と似た顔で白衣を着ている女性の眩しい笑顔が映っていた。写真のニナさんは私と全く異なる髪色をしていてが、それでも他人の空似と呼ぶには何となく私自身と顔のつくりが一緒に思えて不思議な気持ちだ。これなら、トオルさんが私と彼女を間違えて呼びかけたのも分かるよう気がした。

「私が彼女より先に学校を卒業し……ノモセのサファリゾーンで研究者として勤務するようになつてからも、彼女との交流は暫く続いていました。しょっちゅうフィールドワークに行つて周囲を心配させてしまう難点こそありましたが、彼女は同年代の中でもずば抜けて優秀だつたんです。だから学業についてはさほど心配していなくて。当然、彼女も卒業したら私と同じようにいづれ研究者として活躍するようになるだろうと思つていましたから」

「トオルさんにとってニナさんは、自慢の後輩だつたんですね」
「……はい。余り多用すると陳腐に聞こえるかも知れませんが、私にとって彼女は紛れ

もなく、かけがえのない存在でした。ああ、別に恋愛感情ではなくてですね。まるでお転婆な妹が出来たような、そういう意味合いでです」

「それで、その二ナさんは今どちらに？」

彼女の所在を尋ねると、トオルさんはそこで一旦口を噤んでしまう。よほど言い辛いのだろうか、眉間に皺を寄せながらも、やがて彼は噛み締めるように言葉を紡いだ。

「つい先日、亡くなりました。私の目の前で」

「……えつ、」

「……六年ほど前から、でしようか。それまで、フィールドワークに行くにしても私には必ず報告を送つてくれていた彼女と、全く連絡が取れなくなつたんです。当時の私は、彼女のことだからどうせまたどこか遠い地方の砂漠か遺跡にでも集中して潜り込んでいるのだろうと、然して気にしていませんでした。サファリゾーンに生息するポケモンたちの研究に追われて私自身、暫く多忙だつたこともありましたが、それだけ彼女が打ち込める研究対象が見つかつたのだろうと思つて。ところがそうではなかつた。彼女はある時を境に完治不能の重い病にかかり、病院に通いながらも一人で研究を続けていたそうです。私のところに連絡が来たのも、つい一週間ほど前のことでした。慌てて病室まで会いにいくと、学生の頃の面影がまるでない、やつれ果てた彼女がベッドで横になつていて。どうしてこんな状態になるまで何も言つてくれなかつたんだ！つて、……そのとき、恨みがましく怒鳴つてしまつたんです。そんな私に彼女は、力なく笑つてこう言つていました。『決して許されないこととしたから、その罰が当たつただけだ』と

「許されないこと……？」

「それが、具体的には何なのか……私が何度問い合わせても、彼女は一切口を割りませんでした。ただ、自分の部屋に残してきたあるタマゴの世話と、残してはいけない資料があるからそれをどうか処分してほしい、と。それだけ伝えて、三日前、息を引き取つたんです」

予想だにしない話を聞かされ、私は何と言えばいいのか分からず沈黙する。

「……重い話で、さぞや驚いたことでしよう」「……」

「いいんですよ。どうか気を遣わず、何も仰らないで。その方が私も助かります。ただ、彼女の遺言、と言つてもいいものかどうか……彼女には身内がおらず、唯一最期に立ち会つた私が必然的にこの部屋の鍵を譲り受けることになりました。それも、どうやら事前にそうするよう、このマンションの管理人が彼女から強く頼まれていたようです。彼女の言つていた資料とやらは処分したものの、正直、彼女の死を一人で受け止めるのは荷が重くて。タマゴのことだって、今まで研究一筋だった自分にいきなり世話なんて出来るわけがないって自棄になりかけていた。そんなときに、……セツナさん。あなた

を、見掛けたんです」

そこまで語つてから深く溜め息を吐いた彼は、隣に置かれてもなお微動だにしないタマゴを大きな手で撫でてから、静かに私を見つめる。その瞳にどこか、羨望が込められているように思えたのは——私の気の所為、だろうか。

「本当に驚きました。髪の色こそ違いますが、セツナさん、学生の頃の彼女とよく似ているんですよ。性格だつて多分、セツナさんが当時の彼女よりずっと大人びていますけれど、何よりポケモンに向けるひたむきな愛情が彼女とそっくりすぎて……それで、先程声をかけてしまつたんです。彼女が、目の前で亡くなつたにもかかわらず」「そう、だつたんですか……」

「……もしかしたら既にお察しかもしれませんが、もしセツナさんが良かつたら私はこのタマゴをあなたに譲りたいと、そう考えています」

「それは、……私が、彼女と似て いるからですか？」

「正直、それもあります。ですが一番は、私のような研究しか取柄のない男が育てるよりもセツナさんのように未来あるトレーナーにこそ育ててほしいと、本気で思つているんです」

「ちなみに、そのタマゴは何のポケモンなのかニナさんは言つていましたか？」

「……、いえ。生まれてくるまでの楽しみにしていてほしいからと、最後まではぐらかされてしまいました。結局親のポケモンも何なのか、残念ながら託された私ですら知りません」

「……、」

「やはり、何のポケモンなのかも分からぬのに引き取るなんて……無理、ですよね」

「つ、そんなことないです！あの、一度そのタマゴ、抱いてみてもいいですか？」

「……？ああ、はい。どうぞ」

ソファに置かれていたタマゴを両手で持ち上げたトオルさんは、テーブル越しにそのまま私へと手渡す。思わず立ち上がり、落とさないように気をつけながらも慎重に受け取ると、タマゴから僅かに温もりを感じて一瞬息が詰まつた。全く動いていないけれど、この中には確かにポケモンが存在している。そう、誰に言われども直感したのだ。

「すごく失礼な質問ですけど……このタマゴの子、まだ元気なんですよね？」

「ええ。彼女が亡くなつてから、一度ポケモンセンターのジョーイさんに診てもらつたのですが、ちゃんと生体反応はあるようです。ただ、元の持ち主である彼女が傍にいな

い時間も長かったのか、孵化するまでの時間は通常以上にかかるかもしないと言われました」

「そうですか。元気なら、良かつた……。トオルさん、」
「はい」

「お言葉に甘えてこのタマゴ、本当に譲つても良いでしょうか？」

タマゴを両腕に抱きかかえてソファに座りなおしていると、トオルさんはそんな私を見ながら目を見開いていた。

「それは、こちらからすると願つてもないことなんですが……セツナさんこそ、いいんですか？そのタマゴ、一体どんなポケモンが生まれてくるかも分からぬのに」「こう言うのも何ですが、……分からぬこそ、楽しみでもあるんです」

「楽しみ……？」

首を傾げるトオルさんは裏腹に、私は笑いながら腕の中のタマゴを見つめる。この気持ちを言い表すとすれば——そうだ、昨日私がゲツコウガにモンスター・ボールを渡されたあのときの嬉しさと、とてもよく似ているんだ。

「実は私、昨日旅立つたばかりで。この世界について知らない方がずっと多いって、自分ではそう考えています。大人のトオルさんから見れば、きっととても未熟です。けれど、始まつたばかりだからこそ、この子が無事に生まれたら同じペースで世界を知つていくことも出来るんじやないかな、つて。どんなタイプなのか、どんな性格なのか、生まれてから何を感じて、何を好きになるのか……もしかすると、ニナさんはそういうことも想像しながら、この子の誕生をトオルさんに見守つてほしかったんじやないでしようか？」

「……」

「……あつ。す、すみません！憶測で色々言つてしまつて、」

「いいえ。そうか、そういう考え方もあるんですね。確かに私が知つていてる彼女ならば、そういうことを考えつく可能性だつてあるかもしねりない。完全に盲点でした。我だけでは、決して考えつかなかつた……」

ソファから立ち上がつたトオルさんは私の近くまで歩み寄ると、まじまじとタマゴを見つめる。その間もやつぱりタマゴは動く気配すらなかつたけれど、彼はそんなタマゴを眺めながらもただ優しく笑つていた。

「そこまで言われてしまったのなら……私からは、もう止める理由もありません。改めてセツナさん、どうかこのタマゴのこと、彼女や私に代わってお願ひしても宜しいでしょうか？」

「…………はい、喜んで！」

「…………ありがとうございます。きっと、彼女もセツナさんの手に渡つたと知つたら、喜んでくれたことでしょう」

まだびくともしないタマゴを、それでも私は大切に抱き締める。いつかは分からぬけれど、この温かさと直接触れ合える日がこれから訪れると思うと心から楽しみだ。そのときがくるまで、託してくれたトオルさんやニナさんに代わり私がこの子を守つていかなければならない。そういうた責任もあつて全くどきどきしないと言つたら嘘になるけれど、たとえどれだけ時間がかかるても構わない。ただ、無事に生まれてきてさえくれたなら、それでいい。

「確かに、セツナさんは旅立つたばかりとのことでしたが、そうなるとこれからクロガネジムに向かう予定でしようか？」

「そうですね。シンオウのジムは、ひととおりめぐる予定で います」

「なるほど。それでは今後、ノモセシティに来るときは私にご連絡ください。長時間は難しいかもしませんが、サファリゾーンの中でしたら喜んでご案内致しますよ」

「本当ですか？ そうしていただけだと助かります」

「いえ、特別大したことでもありませんが……、こうして私の話を聞いてくださつただけでなく、そのタマゴも、引き取つてくださるというんです。セツナさんには、本当に感謝してもしきれません。もし今後旅先で困つたことがあつたら、遠慮せず教えてくださいね」

トオルさんは微笑みながら、私の抱えているタマゴをもう一度だけ優しく撫でる。私によく似ているという彼女のことを思い出したのか、彼の瞳からは音もなく涙が零れていた。

タマゴを受け取った後、自分の涙を見られて少しだけ恥ずかしそうにしていたトオルさんからよければ昼食もここで食べていかないかと尋ねられ、私はそんな彼の誘いに喜んで了承した。声を掛けられたばかりのような気まずさは既に私たちの間になく、それよりはむしろ大切な秘密を共有出来たような、ある意味親近感をもつて私はトオルさんと接している。冷蔵庫からいくつかの野菜に生クリームとチーズ、更には戸棚からパスタの麺を取り出したトオルさんは自前のエプロンを着けながら手早く昼食を仕上げていく。私はここに初めて来たということもあり、野菜の下揃えや教えてもらつた食器の用意など、比較的簡単な手伝いをやつていつた。

「凝つたものでなくて申し訳ないんですが、少しばかりポケモンフレーズも用意しました。良かつたら、セツナさんのヒコザルや他の子にも分けてあげてください」

「あ、ありがとうございます」

タマゴが置かれたソファがあるリビングのテーブルにポケモンフレーズの入つた皿を

一旦置くと、私はボールを手に取つてヒコザルとゲツコウガに出てきてもらう。ふたりともどうやらボールの中から私とトオルさんの会話を聞いていたらしく、ポケモンフーズよりもソファの上で未だ微動だにしないタマゴを揃つて興味深そうに見つめていた。

「いつ会えるかは分からぬけれど、この子もこれから私たちと一緒に旅していくことになつたから。ふたりとも、宜しくね」

『うん！弟かな、妹かなあ？どつちにしても楽しみだね！』

『ああ。そう、だな……』

「……？ゲツコウガ、どうかした？」

『……、いや。何でもない』

「そう？何かあつたら、いつでも呼んでね」

タマゴに對して何か言いたげなゲツコウガが気になつたが、トオルさんを待たせていたこともあり、私はリビングから少しだけ離れたキッチンの方に戻つていく。キッチンの近くにはまた別のテーブルが置かれており、備え付けの椅子に座るとトオルさんは驚いた表情でゲツコウガのことを眺めていた。

「すみませんトオルさん、お待たせしました」

「ああ、いえ……。あのポケモンって、私の見間違いでなければゲッコウガ、ですよね？」
「知つていらつしやるんですか？」

「まあ、これでも研究者の端くれですから。とはいって、カロス以外ではまず見かけないポケモンですね。シンオウ地方在住の一般人に限定すれば、認知度はまだ低い方かと思われます。ケロマツの頃から一緒だつたんですか？」

「いえ、私が初めて出会つた頃から彼はあの姿でした」

「……?! それはまた、珍しいケースですね」

どちらからともなく手を合わせ、パスタを食べながらも会話を続けていると私の返事を聞いたトオルさんがますますゲッコウガを見つめて喰る。そんなにも珍しいことなのだろうか。口にせずとも、そんな私の疑問が伝わつたのかトオルさんはゆっくりと説明しはじめた。

「たとえば……、そうですね。この地方ですと、ヒコザルやムツクルのように進化前のポケモンの方が一般的にはより懐きやすいとされています。なぜだか分かりますか？」
「えっと、……幼いから、でしようか？」

「簡単に纏めるとそうですね。総じて、タマゴから生まれたばかりのポケモンは皆基本的に警戒心が低く、我々人間を信じやすい傾向にあります。だからこそ初心者のトレーナーには、ヒコザルを含めた三種族のポケモンのいずれかが最初のパートナーとして選ばれ、次に捕まえるポケモンもムツクルやスボミー、コリンク辺りが代表格となつてきます」

あくまでも一般論ですが、と言つて一区切りつけてからも、更にトオルさんの解説は続く。

「進化を重ねていけば当然のことですが、そのポケモンが本来持つ能力も進化前と比べて各段に強化されていきます。ここで、先程挙げたポケモンたちの進化後……ムクホークとロズレイド、レントラーが揃つて目の前に出現したとしましょう。すると、一匹だけでも捕まえるのはおろか、三匹が相手となれば熟練したトレーナーでも一気にバトルの難易度が上がります。それぞれが進化に即した強さを身に着けているのですから、それだつて当然の摸索なわけです。つまりは、最終進化に達するまでの強さを身に着けたポケモンが旅に出たばかりのトレーナーに自ら着いていく、というのは何もシンオウに限らず、世界的に見ても極めて珍しい事例と言えるでしょう。まして、セツナさんはジ

ムバッジをこれから集めていくという段階。理論だけで考えれば、普通はまずポケモンがセツナさんの指示を簡単に聞かないでしょうし……そもそも捕獲の時点で、かなり困難を極めているはずです」

「ここまで語ったトオルさんはグラスに入っていた水をゆっくり飲んでから、一息つく。私自身は今まで良く考えたこともなかつたけれど、相手がゲッコウガでなかつたら出会つた瞬間に攻撃されていた可能性だつてもしかしたらあつたのかもしない。そんな可能性、想像すらしたくなかつたけれど。

「しかし、……これらは私が述べたとおり、あくまでも理論だけで考えた場合の仮説にしか過ぎません。見たところ、あのゲッコウガはセツナさんのことをとても信頼しているようですね」

「えっ……？」

「だつてそうでしよう？ バッジの有無に関わらず、自ら望んだからこそ、今こうしてあなたの傍にいる。その事実だけで、知り合つたばかりの私でも既にセツナさんを認めていっていることはよく分かりました。単純なポケモン同士での力比べでなくて、何と形容するべきか……ポケモンの方から寄り添いたいと思わせる何かを、セツナさんは持つて

いるんじゃないか、つて。少なくとも、私はそう思うんです」

真面目にそう言い放ったトオルさんの視線に射抜かれ、私はフォーカクを持つていた手が止まるとともに顔が熱くなっていくのが分かつた。決して異性的な意味合いではなく、自分を褒められることそのものに普段慣れていないからか、どうしても照れてしまふ。

「何だか、……恥ずかしいですね。そこまで思われるほど、私には大したことを見た覚えなんて全くないんですけど」

「ふふ。自覚がなくとも、セツナさんと一緒にいることこそが何よりの答えではないでしょうか？研究者としても勿論ですが、私は純粹に一人の人間としてセツナさんの将来が楽しみです。トレーナーとして、きっとあなたは稀有な存在になることでしょう。今之内に予言しておきます」

「よ、予言……？」

「……なんてね。まあ、私の希望的観測はともかく、折角つくったパスタが冷めてしまいます。美味しい内にいただきましょう」

につこりと笑つたトオルさんに促され、それからはパスタを食べることに専念させられる。自分の将来——本来ならば一度死んだ時点で、とつくなき昔に失われていたはずのそれを考えるのはまだ早いと思つていたことを突き付けられ、内心冷や汗をかく私をさておき、時間はただ緩やかに過ぎていった。

0 1 6. 5

: : :

「……、ごめんね。私では、きっとあなたを育てきれない」

「こんなはずじやあ、なかつたのに」

「後悔しても、もう遅い、けど……」

: : :

「……私に、どうしろと言うんだ」

「君がいなくなってしまつたら、もう質問することも出来ないじやないか」

「育てる才能はからつきしだつて……君の方が、私以上によく知っていたはずだろうに」

：　：　：

——さむくて、つめたい。だれもいない。

いつかきこえたはずのこえも、いつからかきこえなくなつてしまつた。
のぞまれていない？だからこのまま、きえてしまうの？

ああ、……いやだなあ。

これがかんじようなのだとしたら、くるしくて、かなしいよ。

：　：　：

「いつ会えるかは分からぬけれど、この子もこれから私たちと一緒に旅していくこと

になつたから。ふたりとも、宜しくね』

『うん！弟かな、妹かなあ？どっちにしても楽しみだね！』

『ああ。そう、だな……』

……？

だれだろう、こえがきこえるのはひさしぶり。

みえないけれど、そとからやさしくふれられているのはわかる。

たのしそうなこえ。それに、ぬくもりをかんじる。

ああ、だけどまだ——あうためにはたりない。

いきるためのちからが、たりていなない。

：：

:

「今更だけど、何の相談もなしに決めちゃってごめんね？でも、どうしてもこの子に会つてみたいって、私もそう思つたから……」

『ああ、構わないさ。俺も気長に待つとしよう』

『どんな子だろうね？私は元気ならそれで充分なんだけど』

『……、あの男も似たようなことを言つていたが、希望のタイプとかはないのか？』

『？うん。そういうのは、無事に生まれてからゆつくり知つていけばいいことだと思つし』

『そうか、……くくつ、』

『えつ、何でそこで笑うの？』

『いや、何でも？』

『本當かなあ……』

『……仮に、だが。このタマゴからベトベターやドガースが生まれてきたら、お前はそれでも受け入れるのか？』

『ん？うーん、そうだね……まあ多少びっくりはしちやうかもしけないけれど、そのときは頑張つて私が慣れるよ。だつて、そうだとしてもタマゴの子は何も悪くないでしよう

?』

『そう、だな……セツナ、』

「なあに？」

『……、やっぱり、何でもない』

『えー、ここまできて？逆に気になるよ！』

『……なあ、聞こえているか？焦らなくともいいから、頑張れよ。俺もセツナも、ヒコザルだつて、お前に会うのが楽しみなんだ』

「……、」

『何だ、そんなに見てどうした？』

『ゲッコウガ、お父さんっぽい……』

『……、じやあ、セツナが母親だな』

『いいのかなあ。私人間だし、結婚すらまだなんだけども』

『そこを気にするのか……？』

：　：　：

ああ、あたたかい。

たゆたうように、まもられるように、なんどもやさしくなでられている。
ふたつきこえてくるこえのやわらかさに、どうしようもなくみたされる。
おとうさんとおかあさんがいたら、こんなかんじなのかな?
……そうだつたら、うれしいな。

いまはまだ、あえないけれど。

いつかかなならずうまれてくるから——ふたりにあいに、うまれてくるから。
だからどうか、あとすこしだけまつていて。
あとすこしだけ、……ねむらせて。

Chapter. 3 利口な子供の見解

017

トオルさんによつて昼食を「駆走」になり、その片付けも手伝つてから一段落着いた頃。部屋の整理を続けるべく、もう少しマンションに残るつもりだというトオルさんに一旦別れを告げてから、私はコトブキマンションを後にして。託されたタマゴは鞄の中で大事に包まれていてことを確認し、改めてこれからどうするべきか——即ち、このままトレーナーズスクールに一人で向かうか、それともポケツチカンパニーから見にいくか考えていると、ふと聞き覚えのある声に呼び止められる。

「セツナさん！·こんにちは」

「お姉ちゃん、一日振りだね！」

「ああ、……こんにちは、コウキ君。それにヒカリも、一緒だつたんだね」

原作ではともに主人公だつたコウキ君とヒカリが並んで佇んでいる光景に一瞬だけ懐かしさを覚えつつ、私からも声をかければ一人とも嬉しそうな顔でこちらに駆け寄つ

てくる。

「えへへ。今朝ポッチャマと家を出発して、マサゴタウンに行つたんだけど。博士の研究所でコウキ君にも会つてね、それからここまで一緒についてきてもらつたの！」

「僕の持つているポケッチ、数日前からちよつと調子が悪くて……。折角だからポケッチカンパニーで詳しく見てもらおうと思って、元々コトブキシティに寄る予定だつたんです」

にこにこと微笑みながら何気なく私に抱き着いてきたヒカリを見下ろすと、彼女が腰に着けているボールホルダーには既に三つのボールが並んでいた。このことからポッチャマ以外の二体については、おそらくコウキ君にレクチャーを受けながら捕獲したのだろうと予想する。その二体がどんなポケモンなのかはまだ会つたことがないので分からぬが、いずれにしてもこれから是非ヒカリと仲良くしてほしいな、と心の中で願つておいた。

「なんだ。じゃあ、一人ともさつきコトブキシティに着いたばかりって感じ？」
「うん！ ところでお姉ちゃん、もうトレーナーズスクールには行つた？」

「ううん、まだだよ。今から行こうかとは思つていたんだけど、特に急ぎでもないから。ポケツチカンパニーの方も寄り道してみようかなつて考えて、迷つっていたところ」

「あ、それなら……セツナさんが良かつたら、折角ですし三人で行つてみませんか？一人で行動するのもありますけれど、スクールで勉強していくのなら僕も多少はアドバイス出来ることがあるかもしません」

「それいいねー！あたしは賛成！ね、お姉ちゃんはどう？」

ヒカリの頭を撫でながら質問に答えていると、コウキ君から思わぬ提案を受けたが特に断る必要もなかつたので、私もヒカリ同様頷きながら言葉を続ける。

「うん、私もいいよ。そうすると……先にポケツチカンパニーに行つておいた方がいいかな？もしコウキ君のポケツチに修理が必要で時間がかかるなら、スクールでその時間潰しが出来るかもしれないし」

「そうですね。お二人には恐縮ですが、そうしてもらえると僕もあります」

「……コウキ君つてさあ、すつごく丁寧な口調だよね。ジ Yun とは大違い。あたしやお姉ちゃんには、もつと碎けた話し方してもいいんだよ？」

「碎けた話し方、ですか……」

「うん！ま、無理強いはしないけどね。とりあえず、皆でポケツチカンパニー行こつか！」

戸惑いを隠せないコウキ君を他所に、ヒカリは私から離れると意気揚々とポケツチカンパニーに向かって早足で歩き出す。まるでスキップしているかのような足並みに思わず笑つて見守つていると、一度振り返ったヒカリは早くおいでよ、と言いながら更に先へと進んでいった。そんな彼女につられて、私とコウキ君もゆっくり後を追うようにな歩き出す。

「そういえば……すっかり遅くなつてしまつたけれど、今日はヒカリと一緒に来てくれてありがとう。コウキ君」

「あ、いえ、お礼を言われるようなことでは！僕は本当にヒカリちゃんについてきてただけで、その。これといって、たいしたこともしていませんし……」

「それでも、フタバタウンから出て始めの一歩を踏み出すのは、きっとあの子にとつてとても勇気がいることだつたと思うから。今までは私やジ Yun もすぐ近くにいたけれど、これからはあの子だけの旅が始まつていく。その始まりに、ほんの少しの時間だけでもコウキ君が一緒にいてくれたことは、あの子にとつて少なからず助けになつたはずだ

よ」

だからありがとう、ともう一度感謝の思いを込めてお礼を言うと、私と視線が合ったコウキ君は僅かに目を見開いた後でゆっくりと俯いてしまった。そんな彼の様子に、もしかして何か気に障ることを言つてしまつただろうか、と若干不安を感じていると一つ溜め息を吐いた彼が再びこちらに顔を向けてくる。

「……そういう、セツナさんもこれから旅をしていくんでしたよね？」

「うん。皆よりずっとスタートが遅いだろうけれど、私は後悔していないよ」

「すごく失礼なことを聞きますが、セツナさんつて今、おいくつでしたつけ

「？十五歳、つてどころかな。それがどうかした？」

「……、何というか。仮に僕も、セツナさんと同じ年齢になつたところでそこまで落ち着けないだらうなあ、つて思いました」

「そうかな？ジ Yun に比べたら、コウキ君も十分落ち着いている方だと思うけど

「二人ともおつそーい！早く来ないと、このまま置いてつちやうんだからね！」

「あら、それは大変。コウキ君、ちょっとだけ急ぎましょく

「あつ、はい！」

一向に追いつく気配がない私とコウキ君に焦れたのか、再び振り返ったヒカリからそんな風に呼びかけられたので今度は駆け足で彼女の後を追いかける。ヒカリは勿論、自身の旅もここから漸く、始まつたばかりだつた。

018

「うーん……ぱつと見た感じ、どうやら中の部品が劣化してきてるようだね。でもこれくらいなら、多分一時間程度で調整も済むと思うよ」

「そうですか。それじゃあ、このままお願ひできますか?」

「勿論だとも、任せてくれ。ところで……後ろにいるお嬢さんたちは君の連れかい? 可愛いガールフレンドが一人もいるなんて、結構な幸せ者だねえ」

「えつ?! いや! あの一人はそういうのじゃないです!」

「ははっ、これくらいで照れるなんて初心だねえ、少年! ま、修理はきつちりやつておくから、また一時間後にでも取りにきてくれよ」

ポケツチカンパニーに到着後、修理を請け負ってくれた社員のおじさんにひとまずお礼を言いながらも、こちらに向けられるにやにやとした視線から逃れるべくそそくさと椅子から立ち上がった僕は、近くで待つてくれていた二人の元へ駆け寄った。幸い、社内の新商品を眺めていた二人に先程の会話は聞こえていなかつたらしく、そつと胸を撫でおろす。

「あ、おかえりコウキ君。どうだつた?」

「……やつぱり、修理の必要があるみたいで。でも一時間程度で終わるようなので、また後で取りにきます」

「そつかあ。それじゃ、時間潰しも兼ねて今度はトレーナーズスクールに行こつか!」

そう言つて、再び軽い足取りのヒカリちゃんが僕らの前を歩いていく。決して走つてはいないが、楽しそうな気持ちを微塵も隠そともしない彼女の溌剌とした明るさは僕の妹のそれともまた違つて、見ていて微笑ましいものだつた。十歳になつた頃の僕は、ヒカリちゃんほどはしやいだ記憶がないのもあり、ほんの少しだけそんな彼女が眩しく見える。

「ああもう、ヒカリつたら……ごめんねコウキ君。あの子、早速はしやいでいるみたい」

「いえ、元々僕もついていくつもりだつたんで、大丈夫ですよ」

「そう? そう言つてもらえると助かるよ」

対してありがとう、と再び僕にお礼を告げたセツナさんは、穏やかに微笑みながら静

かな歩調で僕の隣を歩いている。失礼を承知の上で年齢を尋ねてみたところ、本人は正直に十五歳と答えてくれたが、今まで僕が会つたことのある同年代のトレーナーでもここまで落ち着いた雰囲気を持つていた人は少ないのでないだろうか。他の心当たりとして、一応クロガネジムのジムリーダーであるヒョウタさんも挙げられるが、それでも彼女だけはどうしてだろう。その辺にいる大人より、彼女の方がずっと大人びているような気がした。

「コウキ。これはあくまでも私の個人的な意見だが、彼女はきっと近い将来、トレーナーの中でも類い稀な存在となるだろう」

「彼女?……というと、セツナさんのことですか?」

「ああ。勿論、ジ Yun やヒカリにも全く期待していないわけではない。むしろあの二人にも期待している。だがそれ以上に、私はまずポケモンに寄り添い、彼らと心を通わせる彼女の在り様をその目で見て、少なからず影響を受ける者も出てくるのではないかと思っている」

再びヒカリちゃんについていく形でトレーナーズスクールへと向かう道すがら、昨日ナナカマド博士と交わした彼女に関する会話がふと脳裏に過ぎる。

「思い出してみるといい。出会つたばかりのポケモンに抱き着かれたとして……それが旅に出た経験もない普通の子どもだつたら、自分のパートナーとして早速ゲットしようとするか、或いは驚いて振り払おうとする場合もあつたかもしれない。だが彼女はそのどちらでもなく、まずはヒコザル自身の真意を理解しようとしていた。極め付けはあるのゲッコウガだ。通常、最終進化まで到達したポケモンの捕獲とはそう簡単なものではない。手持ちのポケモンとのバトルを通して捕獲するトレーナーも存在するが、彼女は未だジムバッジを一つも持つていないどころか、そもそもトレーナーですらなかつた時点でのゲッコウガに接触し、その上で彼の信頼を得ていた。彼女自身はそれを何とも思つていいようだつたが……私のような研究者からしてみれば、まず真似すら出来ない事例であることには違ひない」

確かに博士が言つたとおり、ヒコザルがボールから出てきてセツナさんにしがみついたその瞬間、僕もまずはヒコザルを引き離そうとしていたことを思い出す。ポケモンは

バトルにおいてトレーナーの指示を聞き理解はするものの、僕ら人間との間で言葉は通じないのがこの世界の常だ。一部、エスパー・タイプや伝説と称されるポケモンの中にはテレパシーによつて人間とも意思疎通をとることが可能な個体もいるらしいが、それでもその数は全体から見れば圧倒的に少ない。だからこそ、突然ヒコザルにしがみつかれても取り乱すことなく、むしろ旅をすることの難しさを語りかけていた彼女の声を僕は忘れられなかつた。

「これは、彼女には敢えて言わなかつた話だが……プラターヌ君によれば、カロス地方では何年か前、ポケモンにタマゴを過剰につくらせたトレーナーが事情聴取された事例があつたらしい。そしてそのトレーナーは当時、ケロマツのタマゴも多く所有していたようだ」

「！もしかして、セツナさんのゲッコウガは……」

「無論断定は出来ないが、元々そのトレーナーがかつて所有していたタマゴ、或いはそこから生まれてきたケロマツが何らかの方法でこの地まで辿り着き、自力で進化した可能性も有り得る。しかし、関連性が不明である以上、現時点ではただの憶測でしかない。だから言わなかつたというのもあるが、……仮に言つたところで、私は最早無意味だとも思つたのだ」

「無意味……？」

「だつてそうだらう？たとえあのゲッコウガにどんな経緯があつたにせよ、彼らは互いを信じ、そして自ら互いの傍に居ることを望んだがゆえに一緒に旅をはじめたのだ。その事実の前では、先に挙げた我々の憶測など結局些事でしかあるまい？」

にやりと笑つた博士はそこで一息つくと、研究所の机から古びた一冊の本を取り出す。それはこの地方で昔からたくさんの人々に読まれてきた、有名なシンオウ昔話の本だつた。

「……、太古の昔。人とポケモンは、今以上にずっと近しい存在だつたのかかもしれない。彼女とあのゲッコウガを見ていると、なぜだかこの本にある人とポケモンの結婚に関する記述について久し振りに思い出したよ」

「け、結婚つて……。博士、いくら何でもそこまで考えるのはちょっと大袈裟なんじや、」「そうだらうか？一般的とは言い難いかも知れないが、私はあながち、決して有り得ない話でもないと思つたがね。コウキ、機会があつたら次はあのゲッコウガの目をよく見てみるといい」

「目、ですか？」

「そうとも。目は□ほどにものを言う」

セツナさんが腰に着けているホルダー、そこにセツトされているモンスターボールのどちらかにあのゲツコウガは今も存在している。ポケモンは、僕ら人間との間で言葉は通じないのがこの世界の常とされていた。僕だつて何の疑いもなくそう思っていた。しかし、ナナカマド博士に言われたとある可能性を孕んだ言葉が、今も僕の頭の中で忙しく蠢いている。

——あの目は、……彼女への信頼も含まれてはいたが、それよりもずっと、彼女を心底愛しそうに、恋しそうに見つめている目だつたよ。

(ポケモンが、人を愛する。昔話ならともかく、そんなこと本当にあるんだろうか……?)

「コウキ君? どうかした?」

すぐ隣から声をかけられ、そこで漸く意識が覚醒する。いつの間にか博士との会話を思い出していた内に、意識だけ沈んでしまっていたようだ。慌ててセツナさんに向き直ると、彼女は立ち止まつて心配そうに僕を見ていた。この辺りでも珍しい、雪のように真っ白な髪と、珍しい色合いの目は何より彼女自身の儂さを一層引き立てるが、それ以上に僕は彼女の瞳の奥で宿る光に魅せられる。

「……、大丈夫です。ちょっと、色々と思い出していて」「そう？ 何かあつたらいいつでも言つてね」

先にトレーナーズスクールへ到着していたヒカリちゃんから軽く怒られつつ、僕はこの場にいる誰にも気付かれないようにそつと唇を噛む。好奇心のままに尋ねることは実に簡単だ。ひよつとすると、年下である僕相手になら彼女も何か答えてくれたかもしれない。けれどもその行いはどこか残酷に思えて、結局のところ口を噤んだだけの僕はどこまでいつても真実を知ることを恐れている臆病者でしかなかつた。

019

トレーナーズスクールにて、ヒカリやコウキ君も交えて基本的なバトルの知識（ポケモンの身に起きる状態異常やタイプ相性等）をおさらいした後、私は二人と別れて単身203番道路へ来ていた。ちなみにコウキ君は修理に出していたポケッチを取りにポケッチカンパニーへと引き返し、ヒカリは私から聞いた話でテレビ局に興味を持つたらしく、今日はコトブキシティでひとまずゆっくりしていくという。次の目的地であるクロガネシティへ辿り着くには、この道路の先にあるクロガネゲートも通過しなければならない。しかし、クロガネゲートを通り前に、現在進行形でとある問題が起きていた。昨日202番道路を通ったとき以上に、この道路ではトレーナーや野生のポケモンとのバトルが多く発生していたのだ。

「ムツクル！『でんこうせつか』！」

トレーナーである少女の声を聞いて、相対しているムツクルがこちらに先制攻撃を仕

掛けてくる。相手の素早い攻撃を完全には避けられず、『でんこうせつか』を受けたヒコザルは軽く弾き飛ばされてしまつたが、そこから器用に着地すると再びムツクルに向いた。

「ヒコザル、『にらみつける』

「……ねえ、さつきから全然攻撃してこないけど、それで大丈夫？ 私は次で決めるわよ！ もう一度、『でんこうせつか』！」

最初だけ攻撃の指示を出したものの、それから何回か続けて『にらみつける』だけを繰り返していたヒコザルに対し、トレーナーの彼女は話しかけながらも止めの指示をしてくる。しかしヒコザルは勿論のこと、私自身、最初からこの勝負を諦めたつもりではない。

「ヒコザル！ ぶつかってきたムツクルをつかまえて！」

「……、えつ？」

戸惑う彼女を他所に、ぶつかってきたムツクルを後退りながらも小さな体でまっすぐ

受け止めたヒコザルは、そこからムツクルを抱き締めるように自身の手を伸ばしてつかまえた。

「そのまま『ひのこ』！」

指示を聞いた直後、ヒコザルの口からは少量の炎が放たれ、難なくムツクルの体に直撃する。一度手を離してから距離を取ったヒコザルに対し、おそらくはやけども負つてしまつたのか、先程まで勢いがあつたはずのムツクルは既にふらついていた。

「ああっ、ムツクル！」

「ヒコザル、続けて『ひつかく』！」

彼女がうろたえている間に、私は次の指示を出す。ヒコザルはその場からすぐさま駆け出すると、足取りが覚束ないムツクルに鋭い爪で攻撃を繰り出した。事前に『にらみつける』を複数回繰り返された影響も受け、防御が下がっていたムツクルにとつてこれが止めの一撃となり、ゆっくりと地面に倒れていく。そうして慌てて走り寄った彼女の腕に抱きかかえられたムツクルは、完全に目を回していた。

「あーあ、負けちゃつたか……でもお姉さんとのバトル、何だかどきどきして楽しかった！」

「私も楽しかつたよ。コトブキのポケモンセンターまで少し距離があるけれど、大丈夫？」

「うん、キズぐすりは持つてるから。生憎やけどなおしの方はないけれど、とりあえずこつちを使ってからポケモンセンターに行つてくるわ」

元々は彼女から提案されたバトルだったが、今も目を回しているムツクルを見て少しだけ申し訳なさを感じていると彼女は然して気にした様子もなく、逆にあつけらかんと私に賞金を渡してくる。なお、この賞金についてはバトルをする前にあくまでもお互いが合意の上で敗れた相手から渡すものであり、バトルが片方からの一方的な喧嘩に近い様相であれば適用されない場合もあることを補足しておく。

「バトルしてくれてありがとう！クロガネシティまであと少しだけど、気をつけてね！」

「うん！バイバイ！」

宣言通りキズぐすりを使用してムツクルを取り急ぎ治療した彼女は、モンスター・ボルに戻すと元気にコトブキシティの方角へ駆けていった。そんな彼女を見送った私はヒコザルを伴つたまま先へ進み、やがてクロガネゲートの入口に差し掛かる手前で足を止める。野生のポケモンも含め、周囲には私たち以外に誰もいないことを確認してから漸く私はヒコザルに話しかけた。

「……ヒコザル、バトルお疲れさま。大丈夫だつた？」

『うん、平気！……って言いたいけど、ちょっとだけ疲れたかも』

その場にしゃがみこむと、昨日以上の連戦を受けて確かに疲れたのだろう。困ったよううに笑っていたヒコザルの体についた砂埃を手で軽く払い落とすと、私は鞄からキズぐすりとボフインケースを取り出す。

「あの子の言つたとおり、クロガネシティまでは本当にもう少しみたいだから、この辺でちよつと休憩していこうか。ヒコザル、キズぐすり使うね」

スプレー型になつていてるキズぐすりをヒコザルの体にひとつおり振りかければ、くすぐつたそうにしていたヒコザルが少しづつ元気を取り戻していく。未だにどんな原理でポケモンの体を回復させているのかは分からぬながらも、ともかく元気になつたヒコザルを見てほつとした私は続いてポフインケースの蓋も開けた。アヤコさんから家を出る前に一つ譲つてもらつたこのポフインケースには、自分でつくつておいた色とりどりのポフインが何個か収められている。研究所にいた間はきっと見たことがなかつたのだろう、どうやらヒコザルは初めて見るらしいポフインに興味津々な様子だつた。

『セツナ。それ、なあに?』

「これはね、ポフインつていうこの地方のお菓子だよ」

『……ポフイン?』

「きのみを使つたお菓子なの。色によつて味付けも違うんだけど、どれでも好きなものを食べていいよ」

ケースに收められたポフインを眺めていたヒコザルは、少しだけ悩む素振りを見せていたがその内赤いポフインを手に取り、ゆっくりと一口齧つてみせる。そういうえば苦手な味がないか最初に聞いておくべきだつたかな、と後になつてから氣付いたが、幸いヒ

コザルにとつてはこのポフインが好みの味だつたらしく、一瞬できらきらと目を輝かせていた。

『すゞぐく美味しい！初めて食べる味！』

「ふふ。気に入つてもらつたみたいで良かつた。ヒコザルは、辛い味が好きなんだね」

まだあるからゆっくり食べていいよ、なんて声をかけながらヒコザルの頭を撫でてい
ると、突然ボールから眩い光が放たれる。私が不思議に思うよりも早く、外に出てきた
ゲツコウガは周囲を数秒見渡した後、今度は私とヒコザルをなぜかじつと見つめてき
た。

「もしかして、ゲツコウガもお腹空いたの？」

『……』

首を傾げながら聞いてみると、自分から出てきた手前恥ずかしくなったのか、ゲツコ
ウガは私とヒコザルの視線から逃れるように顔を背けてしまう。そんな照れている姿
も可愛い、なんて言つたらきっと拗ねてしまうだろうから、敢えて言葉を飲み込んだ私

はゲッコウガの前に回り込むとヒコザルの時と同じようにポフインケースを差し出した。

「どうぞ。ゲッコウガも遠慮せず食べていいよ」
『……、ああ。ありがとう』

ちらり、とポフインケースを見た彼は暫くしてから青いポフインを手に取ると、それから黙々と食べはじめる。あまり顔には出さないものの、どうやら満足しているらしい
ゲッコウガとは逆に笑顔でポフインを食べ続けているヒコザルも見ていると、結局私も
誘惑に抗えず桃色のポフインを手に取つた。五年前にアヤコさんから教わった末、自分でつくれるようになつたポフインは我ながら甘すぎず、美味しい味付けになつていて思わず頬が緩む。いくつかのきのみを混ぜてつくるポフインは、素朴な味ながらも私も大好きなものだつた。

「あつ、そうだ。休憩ついでに先に伝えておくけれど、次に行く町のポケモンジムは岩タ
イプのポケモンとのバトルがメインなの。だからここからはゲッコウガに頑張つ
てもらうことになると思うけれど……ゲッコウガは、大丈夫?」

旅立ちの際、アヤコさんから餞別としてモンスターボールをいくつか貰つてはいたものの、ここまで来た私の手持ちは変わらずゲッコウガとヒコザルだけだった。その理由として普通のトレーナーとは異なり、ポケモンの言葉を理解出来ている私にはこちらを警戒して飛び出でてくる彼らのことを進んで捕獲しようと思えなかつたというのもあるが、これから折角旅をともにするのならば縁のある子とともにシンオウ地方をめぐりたい、と思つていたことが大きい。つまりは他のポケモンをたくさん捕獲していくよりも、いつか出会う誰かとの出会いこそ大切にしていきたい——という私自身の我儘からきていたが、尋ねられたゲッコウガは真つ青なボフインを飲み込むと、そんな私に応えてくれた。

『任せろ。少なくとも、俺だつてそう簡単にやられるつもりはない』

「……ふふ、それは頼もしい限りね。ちなみにヒコザルにはその次のジム、えつと、ハクタイシティだつたかな？そつちのジムは確か草タイプがメインだつたから、そこで頑張つてもらいたいって考えているよ。勿論、私もついているから焦らず一緒に頑張つていこうね」

『うん！セツナと兄さんのバトル、僕も応援しているからね！』

皆でポフインを食べながら、穏やかに時間が流れしていく。けれども初めてのジム戦まで、その時は着実に近付いてきていた。

020

ポフインを食べつつ適度に休憩をとつた私たちは、それからクロガネゲートを通過して目的の町、クロガネシティへと辿り着いた。日が暮れはじめていた夕方の時間帯、まづポケモンセンターに立ち寄つた私は昨日以上の連戦で疲れを見せていたヒコザルとゲツコウガの入つたモンスター・ボールをジョーイさんに預けると、手早く今日の宿泊手続きも済ませる。ゲームだと一瞬で済んでいたポケモンの回復は、現実におけるこちらではそう簡単に終わるわけではなく、やはりある程度の時間を要するもので。ボールを預かつてくれたジョーイさんから、診察も兼ねて最低でも一時間はかかりそうだと聞いた後、宿泊予定の部屋で休んでおくべきか考えていた私にある提案が寄せられる。

「もし興味があつたら、すぐ近くのクロガネ炭鉱博物館を見てみるのもおすすめですよ。ここからだと歩いて五分もかかりませんし、閉館時間も今からちょうど一時間後くらいですでの。逆方向に行けばクロガネ炭鉱もあるんですが……入口はともかく、奥に進むと野生のポケモンが出てきますし、何より炭鉱の従業員さんからバトルを挑まれる場合もありますので。そちらについては明日の明るい内にでも、改めて見学されることをお

すすめします」

「そうですか。ご丁寧に、どうもありがとうございます」

笑顔でカウンターの奥に向かつたジョーイさんにお礼を告げると、久し振りに一人になつた私は彼女にすすめられたとおり、クロガネ炭鉱博物館へ行つてみることにした。確かに炭鉱の方に行くのならポケモンがついていないと危ないだろうが、博物館という場所柄バトルを仕掛けてくるトレーナーはまずいないだろうし、それなら一人で行つてきても然して問題ないと判断したためだ。閉館まであと一時間もないからか、館内に入るとせいいぜい二、三人しか人がおらず、とてもひつそりとした空気が流れていた。夕方の柔らかな陽射しを受けて尚存在している、炭鉱で見つかったポケモンの化石の一部や炭鉱に関する歴史を紹介したパネルなどを眺めながら、私はゆっくりと博物館を見て回る。そうしておよそ半分ほど、見終わつた頃だつたろうか。

「……、え？」

『……』

突如、足元に何かが抱き着くような感触を覚えたので振り向くと、この辺りではまづ

見かけないあるポケモンがなぜか私の足元にひつっていた。おそらく誰かトレーナーの手持ちだとは思われるものの、周囲にそれらしき人が全く見当たらず首を傾げていると、向こうも私を真似したような仕草をとる。

「どうしたの？ 迷子？」

『……』

「トレーナーさんはぐれたのかな？ どっちから来たか、分かる？」

『……』

視線を合わせるように少し屈みながらいくつか質問してみるが、私にひついたままであるそのポケモンは鳴き声の一つすら上げず、ただ静かに私を見つめていた。決して混乱しているようには見えない。それどころか、ポケモンの中でも賢い部類に入るだろうその子はおそらく私以上に今の状況を把握しているはずなのだけれど、どういうわけかぱたぱたと尻尾を振っているだけでこちらに何も伝えようとしてくる気配がない。かと言つてまるで敵意は感じないので、このまま誰も現れなければいつそ博物館の誰かに聞いてみるべきかと考えを巡らせていると、別方向からばたばたと誰かが走つてくるような足音が響いた。

「リオル！どこに行つていたかと思えば、こんなところにいたのかい？」

真っ青な帽子に、同じく真っ青なジャケットを身に纏つたその男性は私にひついていた。ポケモン——リオルに声をかけながら、焦つた様子でこちらに駆け寄つてくる。私が覚えている原作通りならば、彼と出会うのは少なくともここからもつと先の場所だつたはずだ。いや、そもそも彼があの場所以外にいることは現実である今、決しておかしいことでもないのだが。しかしながら、思わず出会いに驚いていたのは何も私だけではなかつたらしい。

「君は……？この辺りでは見かけない子だね。ああ、突然すまない。私の名前はゲン。そのリオルを連れている、ただのポケモントレーナーさ」

021

「それにしても、びっくりしたよ。一緒にいたリオルがいきなり姿を消したかと思つたら、まさかセツナのところに行つていたなんてね」

「人見知り……つてことですか？」

「うーん、厳密にはそれとも少し違うんだけど。まあ、今はそういうことにしておこうか」

博物館でお互いに衝撃的な出会い方をした私たちは、博物館を出てからもなぜか一緒にポケモンセンター内の簡易食堂で夕飯を食べていた。相変わらず自分から一言も喋らないリオルが私にひつついていたこともあるが、何よりゲンと名乗った彼自身、私そのものに対して興味を示したことがその要因として挙げられる。館内で見せた驚きの表情とは打って変わり、今では穏やかな笑顔を浮かべている彼はゲームで知つて いる通り悪い人ではないのだろう。それでもほぼ初対面にもかかわらず、こうしてただにこにこされていると逆に底が見えなくて不安になつてくるのは果たして私だけだろうか。

『……ゲン様、距離が近すぎて彼女が不安がつていいようです。全てとは言わずとも、ま
ずは手短に我々の事情からお伝えしてみてはいかがでしようか』

「おや、そうなのかい？すまないね、つい私ばかり舞い上がってしまったようだ」

「あ、いえ。こちらこそ……何だか、気を遣わせてすみません」

「はは、セツナが謝ることはないよ。とはいっても、きっと混乱しているだろうからルカリオ
の助言通り、もう一度自己紹介しておこうか」

一度咳払いをした彼は、そこで真剣な眼差しを見せながら私に再び話しかける。

「改めて、私の名前はゲン。普段はここから遠く離れたこうてつじまで彼、ルカリオと一緒に修行している一介のポケモントレーナーなんだけれど……君にくつづいているそ
のリオルは、正確にいうと、私のポケモンではないんだ」

「……？でも、博物館では連れてている、って言つていましたよね？」

「まあ、そうだね。言葉通り連れてはいるよ？でも、私はまだその子を捕獲すらしていな
い。私がかつて、道端でぼろぼろになつていたその子を勝手に拾つたんだ。近くには、
派手に壊されたモンスター・ボールが転がつていたことから……おそらくは他のトレーナーの手持ちだったと予想はしているが。セツナももう知っているだろう？リオルは

自ら声を出さない。私だけではない、当然ルカリオもこれまでたくさんリオルに話しかけてはくれたが、私たちは今まで一度も、その子の鳴き声すら聞いたことがないんだ……」

周囲にまばらながらも他に人がいることを考慮してか、少しだけ声を潜めたゲンさんの声音に隠しきれない悲しみが混じる。リオルはそんな彼の感情を近くにいて察したのだろうか、それまでただひつついでいた足元からよじ登つてくると私の胸元に抱き着き、そのまま顔を埋めてしまつた。もしかすると振り払われるだろうか、と思いながらもゆっくり小さな背中に手を添えてみると、一瞬だけ震えたものの大人しく尻尾を振りはじめる。理由は全く分からぬが、どうやら私が触れてくるのもこの子にとつては問題のないことらしい。

「自分から逃げようとしない辺り、……私たちのことは多少なりとも認めてくれているようだけれどね。それでも、まだ完全に心を開いてくれたわけではない。そんなリオルが、今日この町に来たばかりの君に自分から接触しにいった。だからこそ驚いた、とうわけさ」

ゲンさんの言葉を聞きながらも、変わらずリオルに触れていると控え目な館内放送が流れる。それは私に対する呼び出しの放送だったが、ポケモンセンターに預けていたヒコザルとゲッコウガの引き取りが可能になつたことを告げるお知らせでもあつた。

「おや、君のポケモンを受け取りにいかないとだね。さありオル、そのままじやセツナが動けないだろう？ そろそろ退いてやりなさい」

『……』

「……、仕方がないね。ルカリオ」

『はい』

行きたいのはやまやまだが、この体勢で立ち上るのは今のリオルにとつて酷な気がしたのでなかなか行動に移せないでいると、そんな私を見かねたゲンさんが溜め息を吐きながらルカリオに声をかける。ゲンさんの言いたいことを一早く察したらしいルカリオは、それまで私に抱き着いていたリオルを剥がすように抱き上げると、そのままもう一度座つていた席に戻つていつた。どうやら力関係からして、リオルはルカリオに逆らえないらしい。ただし、ルカリオに抱えられたりオルの眼差しが少し沈んでいるように見えたのは、私の見間違いではなかつたようだ。

「私たちはもう少しここにいるよ。もし、セツナの気が向いたら……今度は是非、君自身の話も聞かせてくれると嬉しいな」

とりあえず君のポケモンを迎えておいで、と告げたゲンさんに促されるような形で、後ろ髪を引かれながらも私は一旦食堂から出ていく。そんな私に、リオルは何も言わなかつた代わり出会つた瞬間と変わらず、ただこちらのことをじつと見つめ続けていた。

「……あれ、リオルとルカリオだけ？ゲンさんは？」

特に何事もなく、無事ヒコザルとゲッコウガのモンスター・ボールをジョーイさんから受け取った直後のこと。ゲンさんには気が向いたら、と言われていたがやはりあのリオルの様子がどうしても気にかかり、早足で再び食堂に戻つてくるとゲンさんの姿が見当たらなかつた。そこで先程と変わらずリオルを抱えていたルカリオに尋ねてみると、簡素な答が返つてくる。

『お手洗いに向かいましたよ。直にまた、こちらへ戻つてくるでしょう』

『なんだ。ありがとう、ルカリオ』

『え、……』

『……？どうかしたの？』

『……、不思議ですね。あなたは、姿こそヒトですが、どこか我々にも近い何かを感じます』

「え、」

椅子に座つた私を眺めていたルカリオから、突然思いもよらない言葉をかけられて驚く。ポケモンに近い何かつて、……何のことだろう？自分ですら、よく分からない。

『ああ、今のは決して悪い意味で言つたわけではないのです。それどころか何となく、あなたは他のヒト以上に我々とともに波長が合う、とでも言えば良いのでしょうか。テレビシーを使わずとも、直に言葉を伝えられるヒトに出会つたのは、私もあなたが初めてです』

『…………氣付いて、いたんだね』

『不快にさせたのなら申し訳ありません。しかし、滅多にないことでしょうから……あなたがあくまで秘密に、と望むのであれば私からこのことをゲン様にお伝えするつもりはありません。それだけは、誓つて言えます』

時にエスパー・タイプのわざも使えるルカリオならば、私が直接ポケモンと意思疎通がとれる人間であることを気付かれていても別段不自然だとは思わなかつたが、ルカリオ自身は真剣な眼差しで私の返答を待つてゐる。その眼差しがどことなく今ここにはい

ないゲンさんを思い出させて、もしかするとゲンさんとルカリオは似た者同士なのかも
しない、なんて失礼なことを考えながらも私はルカリオにこう答えていた。

「……じゃあ、お言葉に甘えて。今はまだ、そうしておいてもらえると助かる、かな」
『承知致しました。それにもしても……』うして言葉を交わしてみると、この子が自分か
らあなたに会いにいつたわけが漸く、分かつたような気もします』

ルカリオに抱えられていたリオルは、いつの間にか穏やかな寝息を立ててすっかり
眠っているようだつた。もしかすると私が席を立つていた間にどうにか寝かしつけた
可能性もあつたが、仮にそつだつたとしてもおそらくはリオルを思つてこそ、そうした
のではないだろうかと予想する。その証拠に、リオルを見つめるルカリオの眼差しはと
ても穏やかなものだつたから。

「もしかして……波長が合う、つてこと？」

『ええ。リオルは“はもんポケモン”、そして私たちルカリオは“はどうポケモン”と
称されている辺り、生き物が持つ氣そのものに元々敏感な種族だつたのでしよう。私も
ゲン様も、このリオルの身に何が起きたのか、今はただ想像することしか出来ません。

けれども当時の状況からして、……幸せとは遠くかけ離れたものであつただろうことは、察しています』

「……、

『長らく心を閉ざし続けている彼だからこそ、我々と波長が合うあなたに何かを感じ取つたのかもしません。勿論、これも私の意見でしかありませんので眞実とは限りませんが』

『……そつか。正直、私自身は旅立つたばかりの新米トレーナーだから、自分のことをそんなに凄いとも何とも思つていなければいいけれど。もし、リオルに今までつらいことがあつたのなら、これからはその分たくさん幸せになれるといいよね』

『……、そう、ですね』

今も目を閉じて眠っているリオルの寝顔はあどけなく、ゲンさんやルカリオからこうして話を聞いていなければ、私がリオルの過去の一端を知ることもなかつただろう。未だ声を出さないリオルが心に受けたその傷は、私が想像しているよりも遥かに深く、同時に痛みも伴うのかもしれない。それでも、これから幸せを願うことなら私にも出来るから。いつかこの子にも、心から笑えるような日が訪れたらいいのにと、寝ているリオルを見守りながらそんなことを思う。

「おやおや、いつの間にか私だけ除け者扱いかい？寂しいから混せておくれよ
「あら、ゲンさん。お帰りなさい」

何となくしんみりとしていた空気を払拭するように、極めて明るい足取りで戻つてき
たゲンさんに声をかけると、とても驚いた表情を浮かべたゲンさんがぎこちない動きで
足を止める。そんなゲンさんに対し、なぜかルカリオが静かに溜め息を吐いていた。

「ああ、……た、ただいま。すっかり、ルカリオとも仲良くなつたんだね？」
「ルカリオから色々話しかけてくれたんです。おかげで助かりました」

「だつて。良かつたね、ルカリオ」

『そうですね。私としても、リオルの理解者が増えたのは純粹に喜ばしいことです。し
かし……この辺りで退いておかなければ、そろそろ彼に怒られてしまいそうですね』
「……、彼？」

ルカリオが呟いた彼、という言葉に首を傾げた私に対し、当のルカリオは明言すらし
ない。眠っているリオルの頭を起こさない程度に優しく撫でてやりながら、ルカリオは

ただ曖昧に微笑んでいるだけだった。

それからも暫く私たちの会話は続いていたが、時計の針が二十時を示した頃にもなるとゲンさんからそろそろ休んでおこうと切り出されたため、私たちはそれぞれが予約していたポケモンセンター内の宿泊部屋へ戻ることになった。そのとき彼から聞いた話によると、ゲンさんは元々クロガネジムのジムリーダーであるヒヨウタさんと旧知の間柄であり、今日は修行の気晴らしも兼ねて自分から会いにきてみたそうだ。しかし、肝心のヒヨウタさんが炭鉱の仕事関係で手が離せない状況だったため、また明日にでもジムを訪れるつもりでいたらしい。そこで私もジムに行く予定であることを伝えてみると、途端に目を輝かせたゲンさんからそれなら明日は一緒にジムへ行つてみようか、と提案されて少し驚いてしまった。

「私は明日、クロガネ炭鉱に行つてからジムに挑む予定だつたので、もしご一緒するなら更にお待たせすることになるかと思うんですが……ゲンさんは、それでも大丈夫ですか？」

「ああ。鍛錬については勿論、君と君のポケモンが満足するまで存分にしてきてもらつ

て構わない。会いにきた、といつても別段急を要するものではないからね。君が炭鉱から戻つてくるまでルカリオたちと一緒にここでゆつくり過ごせるし、私は特に問題ないよ」

そう私に告げたゲンさんは、ボールに戻ったルカリオから引き受けていたリオルの寝顔を見て穏やかに微笑む。眠り続けているこのリオルにとつて、どうやらボールの存在そのものが大きなトラウマとなつているらしく、視界に映るだけでも体を震わせてしまうという。そんな経緯もあってゲンさんは無理にリオルをボールに入れようとはせず、今のところは敢えて連れ歩くだけに留めているのだと言つていた。最も、今後自分が行く場所によつてはずつとボールから出しておくわけにもいかない場合があるかもしれないので、ゆくゆくはリオルのボールに対する恐怖も克服させてやりたい、とも呴いていたが。

「ちなみに、私がクロガネ炭鉱にまで付いていかない理由はセツナにとつて初めてのジム戦、という大事なバトルの準備を邪魔するつもりがないつてことと……あとは、君があのヒヨウタに対してもんなどんなポケモンと挑むのか、折角だから観戦するそのときまでのお楽しみにとつておきたい、つてところかな？」

「……そこまで言われてしまうと、何だか変に緊張しそうです」

「ふふ。誤解がないように言つておくが、別に君を追い込みたいわけじゃないんだよ？
ただ、純粹に期待しているつてだけで。まあ、私のような観客については然して気にせず、とにかく明日は思いきりぶつかつてくるといい」

一向に起きる気配がないリオルの頭を優しく撫でながら、ゲンさんは真剣な眼差しでじつと私を見つめてくる。正直なところ、今日出会つたばかりである彼から例えリオルの件があつたにせよ、ここまで自分が気に掛けられている事実に今なお動搖を隠せない。しかし同時に、彼は先輩トレーナーの一人として明日ジムに挑む予定である私を激励してくれていることもその発言から良くな伝わってきたので、そんな彼の心遣いは素直に嬉しいとも思えた。

「……、分かりました。それでも、ずっとゲンさんをお待たせするというのでは私が心苦しいので、ひとまず昼前を目途に一度こちらへ戻つてくるようにします。可能でしたら、その頃にはポケモンセンターのロビーで待つていてもらえた有難いんですけど」「了解、私もそれで大丈夫だよ。もしその時点で君たちの準備が足りないようだつたら、またそのときになつてどうするか考えてみよう」

そんな会話の最後で互いに“また明日”と軽く挨拶を交わした後、私とゲンさんは漸く、それぞれの部屋へと戻つていった。

『……』

「……」

『……何だかふたりとも、さつきから静かだよね。どうかしたの？』

何でもない、と言おうとはしたものの、この形容し難い雰囲気から上手く声が出せず、そんな私を見たヒコザルに首を傾げられる。部屋に入つてから久し振りにゲッコウガとヒコザルをボールから出してみたところ、ヒコザルは元気そうで問題なかつたのだが、代わりにゲッコウガの方はなぜだか不機嫌そうにしていた。体力を回復してもらつたことから決して体調が悪いわけではないようだけれど、だとしたら一体どうしたのか、その理由が分からず私も首を傾げてしまう。

「えつと……ゲッコウガ、もしかして何か、怒つてる？」

『……そうじや、ない。そういうわけじゃない』

囁み締めるようなゲッコウガの返答を聞いて一瞬だけ安心したが、そうなると彼に何があつたというのか。心当たりがなくて更に戸惑う私をさておき、次に言葉を発したのはそれまで成り行きを見守つていたヒコザルからだつた。

『もしかして、兄さんも心配だつたんじやない？セツナがいきなり、見ず知らずの人から親しげに話しかけられて』

「……、え？」

『実は、僕もちよつとだけ心配だつたの。初めて会つたわりに、妙にセツナのことを知りたがつていそうな人だなあ、つて。しかもセツナの方はあの人から距離を縮められても、気にしていないみたいだつたし……まあ、傍に居たポケモンがとつても落ち着いていたから、多分悪い人じやないんだろうな、つてことも分かつたんだけれどね』

予想していなかつた内容を聞かされて驚く私をさておき、ヒコザルはにこにこと微笑みながら改めてゲッコウガに視線を向ける。つられて私も彼を見れば、腕を組んでいたゲッコウガはまるで観念したかのように深々と、溜め息を吐いていた。

『……ヒコザルにほぼ代弁されてしまつたが、まあ、大体そういうことだ。それに相手が人間の男だつたら尚のこと、もつと警戒しておいても損はない、と、俺は思う』

最後は途切れがちになりながら、それでも私に自身の意思をはつきりと伝えた彼の眼差しはいつになく鋭く見えた。しかしその鋭さを知つて尚、私が彼を恐れるということはない。それどころか、こうして気に掛けてもらえることを今は嬉しいとすら思つている。

「心配してくれてありがとう。これからはその辺も、きちんと気をつけるね」

『……ああ。分かつたんなら、それでいい』

そもそも私がゲンさんを警戒していなかつた最大の理由は、彼が原作に登場する人物であることを事前に知つていたからなのだが——それを敢えて二人に語る必要性もないと判断した私は、大人しく頷いてみせる。そんな私の反応を見たゲツコウガは多少なりとも安心したのか、纏う雰囲気が大分柔らかくなつたような気がした。

『ねえねえ。ところでセツナはあの人について、どんな風に思っていたの?』

「ゲンさんのこと? うーん、そうだね……リオルのことを良く見ていて、ポケモンに優しい人だなあ、つてところかな。ああそれと、ルカリオからも信頼されている辺り、きっとバトルも強そうなトレーナーさんだよね」

『ふうん、そういう感じなんだ。それって、つまり……』

「つまり?」

『……んーん、やつぱり何でもない!』

突然質問されたゲンさんの印象を素直に答えてみせると、それから何か考えていたらしいヒコザルは暫く首を傾げていたが、ほどなくして再び満面の笑みを浮かべる。

『良かつたねえ、兄さん。セツナはあの人に対して、そういう興味なさそうだよ!』

『……、明日はジムに行く予定なんだろう。なら、今日も早めに寝ておいたらどうだ?』

『わあ、兄さんつたら照れ隠しへ?』

『いいからヒコザルも寝る。今すぐにだ』

『あはは。セツナ、兄さんがこわい!』

『全く、怖がつてないくせによく言う……』

ヒコザルの言うそういう興味、というのが何なのか私にはよく分からなかつたが、
らずも昨日以上に賑やかになつた夜はその実穏やかで、とても優しいものだつた。

図

あれから一夜明けて、やや早めに起きてしまった私はどこか逸る気持ちを抑えつつ自分の身支度を整えていく。その途中、極力音を立てないように気をつけて部屋のカーテンを開けてみると、窓の外には既に青空が広がっていた。そこかしこに雲が浮かんではいるものの、どうやら今日も旅日和の良い天気になりそうだ。一旦窓から離れ、部屋に設置されていた電気ポットのスイッチを付けて飲み物でも淹れるべく準備していると、それまでヒコザルと一緒に眠っていたはずのゲッコウガもベッドから起き上がる。

「おはよう、ゲッコウガ。もしかして起こしちゃったかな？」
『……おはよう。いや、大丈夫だ。問題ない』

一つ、大きな欠伸と背伸びをしてからベッドを降りた彼は私と同じように部屋の窓から空を仰ぎ見ると、太陽の光が眩しかったのかすぐに目を細めてしまう。ちょうどその頃、電気ポットのお湯も沸いたのでひとまず二人分のマグカップに緑茶を注いでいると、空からマグカップに視線を移した彼は不思議そうに首を傾げていた。

『……それは？』

「ん？ 緑茶って飲み物だよ。私もさつき起きたばかりだから、飲んでおいたら眠気覚ましになるかと思って。良かつたらゲツコウガもどうぞ」

『そうか。ならば頂こう』

私と同じようにマグカップを手に取ったゲツコウガは、それから躊躇いもなく緑茶に口をつける。自分からすすめてはみたものの、もし苦手な飲み物だつたらどうしようかと一瞬不安になつた私を他所に、彼は至つて普通に緑茶を味わつてゐるようだつた。

『俺は美味しいと思つたが……ヒコザルが飲んだら、苦手に感じる味かもしねないな』
「確かに、ちょっと渋みがあるからね。私はそれも含めて好きだけれど」

何となくテレビをつける氣にもなれず、ただあたたかい緑茶をゲツコウガと一緒に飲んでいると不意に彼がくすくすと笑いはじめる。未だ眠つてゐるヒコザルに配慮してか、笑い声そのものは微かなものだつたが、実質ふたりきりとなつた空間ではそれすらも良く響いた。

「どうしたの？」

『いや、……つくづく、不思議なものだと思つてな。まさか俺にも、こんな風に人間の飲み物を飲む機会がくるなんて、予想すらしていなかつたから』

今まで野生のポケモンとして生きてきたのならば、確かに彼がこういつた飲み物を飲む機会なんてなかつたに違いない。その証拠に、いつの間にかお茶を飲み干していたゲツコウガはどこか感心したような眼差しでマグカップを見つめていた。

「そうだね。私も、一年前の時点ではあなたと旅に出るなんて夢にも思つていなかつたから、こうして一緒にいることが少しだけ不思議な気もする」

『だが、不思議と言つても決して不快なわけではない。そうだろう？』

「うん。きつとこの先、私たちが思う以上にたくさんの人との出会いがんだろうね。いつもかは生まれてくるあの子も含めて。そう考へると、これからがとても楽しみだなあ』

『……、意外と落ち着いているんだな』
「ん？」

『初めてのジム戦、と言うからにはてつきりセツナが緊張しているのかと思つていたが』

「ううん、全く緊張していない、と言えば嘘になるよ？今日は昨日より早く目が覚めたくらいだし。ただ、あなたと一緒にお茶を飲んでいたら、何だかほつとしてきてね。だから今の私がそう見えるとしたら、それはゲツコウガがいてくれたおかげなんじやないかな？」

『……そうか。俺のしたことなんてせいぜい、話し相手になつたくらいだが。とりあえず、お前に心配なさそつで良かつた、とだけ言つておく』

眩しそうにしながらも、私から目を逸らすように再び窓の外を見つめたゲツコウガは要するに照れていたのだろう。そのことに気付きながらも、私は敢えて彼に何も聞かないまま緑茶を飲む。そうしてゆっくりとした時間を過ごしている内にヒコザルも起きてきたので、私たちは朝食を済ませて早速クロガネ炭鉱へ出発することになった。

(……すごいなあ、ゲツコウガは。もうこんなに色々なわざを覚えているなんて)

クロガネ炭鉱に到着して早々、ナナカマド博士から渡されていたカロス図鑑を改めて確認しながら思わず溜め息を吐く。幸い、今私がいる周囲に炭鉱の従業員と思われる人

は見当たらなかつたので目立つこともなかつたが、代わりにこちらを振り返つたゲッコウガからは怪訝そうに首を傾げられてしまつた。ちなみにこうしてゲッコウガが既にボールから出でてきているのは、炭鉱内でいつ他の野生ポケモンに出会つてもすぐ対処しやすいように、という理由からだつたりする。

『どうした。何かあつたか?』

「ううん、図鑑を見ていたんだけどね。ゲッコウガの使えるわざの数に驚いちやつて」

『……あの日、俺が自分で足手纏いにはならないと言つただけのことはあつただろう?』

「そうね。確かにそうなんだけど」

『けど?』

「……ジムに行つたら、どんな風にバトルしようかなあ、つて思つて」

この世界において、ジムリーダー及びポケモンリーグに属する（所謂四天王やチャンピオンと呼ばれている存在も含めた）トレーナーとの公式戦では、野生ポケモン相手や一般トレーナー同士のバトルと異なり“一体のポケモンにつき、使用可能なわざは四つまで”という制限が設けられている。ポケモンは基本的にバトルを重ねていくほど、より多くのわざを覚えて更に強くなつていくとされている。ならば当然、相手より使える

わざの数が多いポケモンが有利になりそうなところだけれど、公式戦ではあくまでポケモンのわざだけに頼らず、トレーナー自身の戦略性も見るために敢えてそういう制限を取り入れるようになつたらしい。勿論、私たちがこれから向かうクロガネジムにも当然審判役のトレーナーがつくわけで、仮に四つ以上のわざを使用すればその時点で反則負けと見做されてしまうだろう。

この他にも、ポケモンに道具を持たせることは可能だがキズぐすりやどくけしといった一部の回復薬は使用出来ないこと、挑戦者側はポケモンの入れ替えが可能だがその回数も無制限ではないこと、といったいくつかのルールがあつたが、この辺りはゲームと違う現実だからこそだと思えば納得自体は容易だつた。しかし問題はそれらもよく踏まえた上で、バトルの最中どんなわざを指示するべきなのか、ということに他ならない。

(闇雲に攻撃するだけで勝てるほど、ジムリーダーは易しくないはず。今回は岩タイプが相手だから『みずしゅりけん』や『みずのはどう』、それから『くさむすび』も相手によつては使えるかもしれないけれど……最低でも、一つは変化わざを取り入れておくべき、かな?)

かつての私は何も、俗に廃人と呼ばれていたプレイヤーたちのように対戦に惹かれて

いたわけではない。むしろそれとは対極で、ストーリーに関わってくる登場人物や道中で出会い、仲間となつたポケモンたちとの関わりを楽しみにしていた、という意味では所謂ライトユーザーだったと言えるだろう。だからこそ、この世界で目覚めた後も最初から最強を目指すつもりなんてまるでなかつたのだけれど、それを理由にこれから負けにいくつもりは更々ない。折角挑むからには出来る限りの準備を整えてから、正々堂々とジムリーダーに立ち向かいたい。そしてこの地方をめぐるのならば尚更、最初の記念すべきジム戦は私についてくれたゲッコウガと一緒に勝ちたいと、心から思つてもいるのだ。

そんな考えからカロス図鑑とにらめっこを続けていたところ、不意にゲッコウガの手が頭に軽く乗せられ、そのまま緩く撫でられる。ひんやりとした感触に驚いて顔を上げると、当のゲッコウガ自身は私と違つて余り気負つていらないらしい様子で佇んでいた。

『色々と悩んでいるみたいだが……いざというときは、俺も自分で何とか出来ないか試してみるつもりでいる。だからそう大袈裟に心配しなくとも、大丈夫だ』

「……、うん」

『とはいって、それが出来なければ苦労していない、とでも言いたそุดだな』
「ばれちゃつた？」

『そのまま顔に書いてある』

「あはは……、ごめんね？ もうトレーナーなんだから、しつかりしなきゃいけないって、分かつてはいるんだけど」

『別にそんなお前を責める気はない。こういうのは、初めてなら余計不安に感じるものなんだろう。それにセツナが俺を信用していないわけではないことも分かつてている。だからお前も、今日は俺を信じてみるといい』

——仮にどんなわざを指示されたとしても、俺はやり遂げてやるよ。

それだけ言つて、私に微笑んだ彼の姿はまさに頼れる相棒そのものだった。

彼女の第一印象を敢えて答えるとするとなるならば、子どもらしくない子、といったところだろうか。本人は旅に出たばかりだと教えてくれたけれども、そういうつたトレーナーになりたての子どもたちというのは今まで私が見てきた限り総じてテンションの上がっている子が多かつたような気がする。勿論、初めて自分のポケモンを手にしたことに歓喜して、未だ見ぬ未来に希望を持つ彼らの姿そのものは私自身好ましいものだと思つてゐる。昨日私がクロガネジムを訪ねた際に見かけたあの金髪の少年も、言葉を交わす機会はなかつたがおそらくそんなトレーナーの一人だつたのだろう。

対して私が出会つた彼女——セツナ、と名乗つた少女も初めての旅に全く高揚していなかつたわけではなかつたのだろうが、昨夜落ち着いた物腰でリオルに接していた辺り、精神面は大人に近い子なのかもしけないという感想を抱いていた。私やルカリオに対しても、未だ完全に心を開けずにいるあのリオルが自分から近付いていつた彼女。そんな彼女が宣言していたとおり、昼前にポケモンセンタ一まで戻つてくると、それまで私の隣に座つていたリオルは勢いよく彼女の足元まで駆けていく。よほど彼女の傍が落ち着くのだろうか、早速セツナの足元に抱きついていたリオルを見て私は少しだけ苦

笑いを浮かべてしまつた。

「おかえりセツナ。早速だけど、一旦回復してから行くかい？」

「いえ、調子が良いらしいのでこのままジムに向かつて大丈夫みたいです。ゲンさんの方は行けそうですか？」

「ああ、私は大丈夫だよ。それにしても……すっかり、リオルは君のことが気に入つたみたいだね。ちょっとびっくりしているよ」

「私も驚いていますよ。でも、理由が分からなくとも、こうして関わろうとしてくれることは嬉しいと思います」

そんな会話を交わしてポケモンセンターから出てみると、リオルは一旦彼女の足元から離れたが、私たちと歩きながらも時々セツナの方を見上げていて。その視線に気付いたセツナがリオルを見れば、今度は尻尾を立てたりオルが慌てて私の足元へ隠れるように逃げてしまつた。……仲良くなりたいものの、向こうから近付かれることにに関しては強い抵抗を感じているのだろうか。最も、リオル自身から何も聞けていないのでこの考えは單なる私の想像に過ぎなかつたが。ひとまず今の私に出来るのはリオルが嫌がらない範囲で見守ること、そして彼女とヒヨウタがこれから繰り広げるであろうバトルを

観戦することくらいだろう。

久し振りに訪れたクロガネジム内は他に挑戦者がいなかつたこともあり、とても静かなものだつた。しかし、着いたばかりのときとは異なり、セツナとジムリーダーのヒョウタが今まさに対峙している。フイールドは既に緊迫した空気で満ちている。バトル前に私から声をかけられたヒョウタは私がいることについてとても驚いていたが、挑戦者であるセツナもいることに気付くと早くも頭を切り替えたようで、その対応の素早さは実に見事なものだつたと言わざるをえない。むしろ、私がバトルの観客ということでのやる気も一層強くなつたような気がするが……彼女自身はそんなヒョウタを見ても、気圧されていないらしい。

「君が現在所持しているポケモンの数は二体、で間違いないかい？」

「そうです」

「なら、挑戦者の君に合わせて今回は僕も二体のポケモンでバトルさせてもらうよ！念のためにルール確認だけど、バトル中の回復薬は使用不可、挑戦者側はポケモンの入れ替えが可能だけど……そうだね、今回は入れ替えに関して四回までの制限を設けよう

か。あと、ポケモンの使用するわざは最大四つまで可能という制限がある。もし審判に四つ以上使用していると判断されたら反則負けになるから、そこは注意してね。ここで何か質問は？」

「いいえ、ありません」

「いい返事だ。さてと……君のトレーナーとしての実力、そして君と一緒に立ち向かうポケモンの強さ、見せてもらうよ！」

ヒヨウタがファイールドに向かつてボールを投げた直後、セツナも自身のホルダーからあるボールを取るとヒヨウタと同じように投げる。ヒヨウタが一体目として繰り出してきたポケモンは“いわへびポケモン”と呼ばれるイワークで、その巨体はジムの天井にも届きそうなほど逞しくなった姿を堂々と見せつけていた。旅に出たばかりのトレーナー、もとい手持ちポケモンが幼ければ尚更、あの巨体を前に恐怖を感じてしまうこともあるのかもしれない。対して彼女のボールから現れたのはどこか蛙にも似た姿をとつたポケモンで、イワークを見ても怯むどころかただ冷静に観察しているかのように佇んでいただけだった。

(あのポケモン、私も初めて見るな……他の地方のポケモンだろうか?)

私と同じく、ヒョウタもセツナが出してきたポケモンを見て少なからず驚いていたようだつたが、その動搖も抑えてすぐさまイワークに指示を出す。

「イワーク、『ステルスロック』だ！」

ヒョウタの指示を聞いたイワークが、フィールド上にあつた岩を次々と浮かせていく。『ステルスロック』とは相手がポケモンを交換する度、出てきたポケモンにダメージを負わせるわざであり、少なくとも私はこのわざを受けた相手側がポケモンの入れ替えについて慎重にならざるをえないものだと認識している。ルール上挑戦者側の入れ替えを可能としていたが、一番最初からこのわざを指示してきた辺り今のヒョウタはかなり気合が入っているに違いない。しかし、次々と浮く岩を見てもなお、当の彼女たちは未だ動じていないようだ。

「ゲッコウガ、『ちようはつ』

イワークが次の行動に移る前に、今度は彼女がゲッコウガと呼んだポケモンに対して

指示を出す。『ちようはつ』を受けたイワークはあからさまに怒りを露わにし、地面に向けて自身の尾を激しくぶつけるように暴れたが、それによつてフイールドが揺れても彼女のポケモンは一切狼狽えていない。

「おつと……そうきたか、だつたら『いわおとし』！」

「次は『みずしゅりけん』で」

『ちようはつ』の効果により、攻撃技しか出せなくなつたイワークにヒョウタは『いわおとし』を指示するが、それより早くゲッコウガがイワークに攻撃を仕掛けるため走り出す。『みずしゅりけん』、という名前のとおりどこからか手裏剣に似た形状をとつたものを出現させたゲッコウガは、瞬く間に連続してイワークにわざをぶつけていく。おそらくあれは水タイプのわざだつたのだろう、巨体であるがために避けきれなかつたイワークは真正面から自分の苦手なタイプのわざを受けたことで、力なく地面に横たわつてしまつた。

「イワーク！」

「……イワーク、戦闘不能。ジムリーダー、次のポケモンをお願いします」

審判のトレーナーがイワークに近寄るが、誰がどう見ても戦意喪失状態になつていたイワークを前にバトルの続行は不可能だと判断し、ヒョウタに次のポケモンを出すよう告げる。その言葉を受けたヒョウタは厳しい表情でイワークを自分のボールに戻すと、続いて二体目のポケモンをフィールドに繰り出した。化石から復元されることもあるそのポケモンの名前は、ズガيدス。攻撃力に関して言えばイワークよりも非常に高いポケモンだが、一方でヒョウタと対峙しているセツナにはポケモンを入れ替える動作が見られない。

「イワークは倒れてしまつたけれど……僕はまだ、諦めていないよ。次のポケモンも、同じように倒せるとは限らない！」

「そうですね、バトルはいつだって不確定。だからこそ私は、彼と一緒に勝つことを信じます。それがトレーナーの私に出来る、唯一のことだから」

「……ふふ、良い目をしているね！君もまた自分が勝つことを諦めていない。ならば尚更、僕だつて負けていられないな……行くよズガيدス、『ずつき』だ！」

ヒョウタの指示を聞いたズガيدスが猛々しく咆哮を上げ、フィールドに佇んでいた

ゲッコウガに向かつて勢いよく『ずつき』を繰り出すべく走つていく。だがその前に、セツナもまたゲッコウガに対して新たなわざを指示していた。

「ゲッコウガ、そのまま『えんまく』！」

真っ直ぐ走つてきていたズガイドスに向けて、容赦なく『えんまく』が命中したためにズガイドスの周囲には薄く靄がかかり、その隙にゲッコウガがズガイドスの『ずつき』を回避する。意図せずわざが不発に終わつてしまつたことと相手の姿が見えない苛立ちから、ズガイドスは低く唸り声を上げて必死に辺りを警戒しているが、その原因たる靄が晴れないためになかなか見つけきれないようだ。

「くつ、まだ晴れないか……ズガイドス、攻撃は相手が見えてからでいい！『きあいだめ』だ！」

「いいえ、ここで一気に決める！ 続けて『みずのはどう』！」

『ちようはつ』の効果がなくなつたことも頭の隅で計算していたのか、ヒョウタはズガイドスに変化わざを指示するが、それよりも早く『えんまく』の中から飛び出してきたゲッ

コウガがズガイドスに向けて『みずのはどう』を繰り出す。『えんまく』に代わり、周囲の空間を包むように現れた水滴の数々によつてつくりだされた光景はどこか幻想的でもあつたが、岩タイプであるズガイドスにとつては同時に末恐ろしい光景でもあつたのだろう。ヒョウタが避けろ、と思わず声を張り上げるも、そんな余裕すら残つていなかつたズガイドスはあえなく『みずのはどう』を受け、先ほどのイワークと同様に倒れ込んでしまつた。

「ズガイドス、戦闘不能！よつて、今回のバトルは挑戦者セツナが勝利したものと致します」

「ま、まさか、そんな……鍛えてきたポケモンたちが！」

呆然と呟くヒョウタとは裏腹に、ズガイドスも続けて倒したゲツコウガはセツナの方へ振り返ると、ボールに戻るでもなくそのまま彼女の元へと歩いていく。そして彼女の真正面で立ち止まる、驕然としている周囲をまるで気にすることもなく目を細めながら彼女の頭を撫でていた。撫でられた彼女は驚いたものの、その内満面の笑みを浮かべて自分もゲツコウガの頭を撫でようと試みる。……こうして彼らを観察してみると、最早二人だけの世界に足を踏み入れているような気もするのは私だけだろうか。

(イワークもズガイドスも、あのヒョウタがこれまで心血注いで鍛えてきたポケモンたちだ。勿論体力だって十分にあった、にもかかわらずこうして難なく倒されていったのは……それほどまでに、あのポケモンの攻撃力がズバ抜けて高かつた、ということか)

ゲツコウガの攻撃力、もといあの素早さにも目を見張ったが、何といつてもヒョウタとそのポケモンたち相手に最後まで動じることなく、わざを指示していたセツナにはどこか初心者と思えないものがあった。だが、私はそれについて彼女に勘織るのを止めておこうと思う。今はただ、ポケモントレーナーとして見事ヒョウタとのジム戦に勝利した彼女のことを純粋に祝いたい。そして倒されはしたものの、全力で彼女とのジム戦に臨んだヒョウタも労わるべく、私はバトルを終えた彼らの元へ駆け寄る。

『……、』

——そのとき、私とともにセツナのジム戦を黙つて見ていたリオルが実はその顔を歪めていたことを、彼女の傍に在ったゲツコウガだけが気付いていたことも知らずに。

クロガネジムにて、ジムリーダーのヒヨウタさんとのバトルに勝利した私たちはコールバッジを受け取ると、まだ十分日が高いこともあり早速次の町に向けて移動を始めることにした。順当に行けば次に向かうべき町はハクタイシティなのだが、クロガネシティから見て北側の207番道路にはどうやら自転車がないと上れない急な坂道があるらしい。そのため今回は一旦コトブキシティまで戻り、そこから花の町とも名高いソノオタウンとハクタイの森を経由してハクタイシティへ向かうことにする。ちなみに私たちのジム戦を見守つてくれていたゲンさんは、本来の目的だつたヒヨウタさんとゆつくり話をしたいとのことで、そんな彼に簡単な挨拶を済ませてから私たちはコトブキシティに向けて歩き出していた。

『……それにしても、少し意外だつたな』

「うん？ 何が？」

『俺はてつきり、セツナはあのリオルもどうにかして一緒に連れていくかと思つていたが』

クロガネゲートを抜けてすぐ、念のためソノオタウンまでの道順確認を兼ねて道端で少し休憩していると、ボールから出てきていたゲツコウガが周囲に誰もいないことを確認してからリオルについて尋ねてきた。

「うーん……それも、選択肢の一つとしてありだつた、かもしだいね」

『……その言い方だと、余り乗り気ではないみたいだな』

「ああ、えつとね。決してあのリオルが気に入らないとか、そういう意味じやないんだよ？ただ、今まで色々とあつたみたいだし……急に誰かとたくさんの場所を見て回るより、どこかでゆつくり過ごせる時間がリオルに必要なんじやないかな、と思つて。そういう意味でも、今はリオルのことを見ているゲンさんと一緒にいた方が、リオルの身にとつても安全かと考えていたんだけれど……」

ゲツコウガに答えたとおり、なぜかよく私にひついてきたリオルに対して、私自身全く心動かされなかつたわけではない。むしろゲンさんに挨拶していたときも、ずっとこちらを見つめていたリオルの眼差しに後ろ髪引かれる思いになつたくらいだ。けれど、そんなリオルだからこそまずはゆつくり心身を休めてほしい、というのが私の一番

の願いだつた。仮に私ではなく、いつか他のトレーナーと旅するとしても、それはリオルの負つた傷が癒えてからでも決して遅くない話のはずで。それに今はまだ心を閉ざしていても、ゲンさんのように良識あるトレーナーの元にいれば、少なくともリオルの身に危険が及ぶ可能性は格段に低くなると思う。

『なるほど。だつたら、……俺の牽制も、然して意味なかつたかもな』

「……もしかして、リオルと何かあつたの？」

『別に大したことじやない。ただ俺は、今のあいつが気に食わないとだけの話だ』
「……、……十分、大したことになるんじやないかしら。それは』

『ふふ。俺が気に食わるのは、今、のあいつであつて……この先、どうなるかなんてまだ誰にも分からぬからな。まあ、成長の仕方次第ではむしろ見直すことも有り得るだろう』

余り自分が嫌いなものについて語らないゲッコウガの、かなり珍しい本音を聞かされて驚いていると不意に目を細めた彼が私にどうしてだと思う、と聞いてくる。

「つまり、……リオルが気に食わない理由？」

『そう。俺だつて、何も理由なくそう見做しているわけじゃない』

どうやら気に食わない、と感じるからにはそれなりの理由があるようだけれど、正直全く分からぬ。それでもゲンさんから聞いた話を可能な限り思い出しつつ、首を傾げて考えはじめた私を見かねたのか、ゲツコウガはくすくすと笑い声を漏らした。

『教えてやろうか？あいつはな、心が死んでいるんだよ』

「……え？」

『……空っぽなんだろくなあ、自分じやどうしようもないくらい。本気で自分が生きている理由、とやらが分からぬし、検討もつかない。だから、いつ死んでも自分は後悔しないと思っている。声が聞こえなくとも、あの目にはとても見覚えがあるんだ。あれは、生きる意志のないものの目だ。あわよくば流れに身を任せて、生きるも死ぬも、自分の意志では決めきれない。そういう目を見るのは、……嫌なんだよ』

——まるで、昔の俺を見せつけられているみたいで。気分が悪くなる。

「……」

『……なんて、俺の話はさておき。今日はどこまで行く予定なんだ?』

「え、つと……とりあえず、このままコトブキシティは素通りして、ソノオタウンまで行けたらいいな、つて感じ……?」

『そうか、分かった』

今日の行き先を確認した彼はそれから何を言うでもなく、またあつさりと、ポールに戻つてしまい、その場に私だけが取り残される。木々や叢を穏やかな風が通り抜けていき、一見周囲はとても穏やかなように見えるけれど、反面私の心臓は煩いくらい脈打つていた。

(ゲッコウガの“過去”、か……)

いつか、彼がそれを教えてくれる日は訪れるのだろうか。

そんな私の疑問について、残念ながら親切に答えてくれる存在は今ここに皆無だつた。

026. 5

かつてぼくの主となつたヒトは、ぼくを見てとても楽しそうに笑つていた。
もつと強くなりたいのだと言つていた。

だからそのために、これからぼくと一緒にがんばつていきたいんだと……差し伸べられた手を疑いもせず、愚直に信じてしまつたことを今ではほんの少しだけ、後悔している。

——どうして、いつまで経つても『ルカリオ』に進化しないのか。

どれだけバトルで勝とうとも、一向に進化する様子がないぼくを見ていていつからか、あのヒトはそんなことを吐き捨てながらひどく顔を歪めるようになった。

期待とか、希望とか。

そういう、ぼくにも向けてくれた楽しい感情は時間を経る毎にどんどんと擦り減つて、代わりにぼくの姿が視界に入ると苛ついたり、不機嫌になつたりする頻度ばかりが増えていく。

そんな主の変わりようを見ている内に、ぼくもまたとある事実を察してしまう。このヒトは、何もぼくという存在を望んでいたわけではなく、あくまでも“ルカリオに進化する”リオル”という種族が欲しかつただけだつたのだ、と。

……幸い、と言うべきか、直接手を上げられることは一度もなかつたのだけれど、あのヒトが持つていた他のポケモンたちからも随分と白い目で見られるようになつてしまつた。

中には哀れみを込めてぼくを見ていたポケモンもいたけれど、だからつて積極的に助けてくれるわけでもない。

きつとあのヒトがぼくに抱いた苛立ちを、自分にまで向けられたくなかつたんだろう。

ぼくを除いて、他の皆はどうの昔にそれぞれ進化を終えていたこともあり、ぼくはそんな皆の態度も仕方のないことなのだと思い込むことにした。

結局、一緒に同じものを食べても、眠つても、バトルでともに立ち向かう日々を過ごしても。

仲間と信じていたのは、ぼくだけだつたみたいだ。

だからあの日、……目の前で、主“だつた”あのヒトに自分が入つていたモンスター ボールを壊されても、不思議と悲しくはならなかつた。

やつぱり捨てられちやつたな、なんて思いながらぼくに背を向けて遠ざかつていくあのヒトを、ぼくは追いかけもせず最後まで黙つて見送つていた。

いつかはきっとこうなるだろう、と予想していた所為もあつたかもしれない。悲しくない。それは本当のことだ、嘘じやない。

でも、……何だか、胸が空っぽになつて、声も出せなくなつてしまつて。

どうしたら治せるかなんて分かるわけもなく、諦めたぼくはその場でゆっくり横になつた。

何もかもどうだつて良くなつたから。

そう、自分の命でさえ。

: : :

ろくに自分から食べ物を探しもせず、壊されたモンスター ボールの隣で寝転んでいた

だけのぼくを拾つた何とも物好きなヒトに出会つたのは、それから少し後のことだ。ぼくに失望して去つていたあのヒトがずっと欲しがつていて、ルカリオも連れている物好きなヒトは何の見返りもないつていうのに、甲斐甲斐しくぼくの世話を焼いてくれた。

多分、こういうのをお人好しつて呼ぶんだろう。

たくさん話しかけてくれるけれど、生憎今のはくは声が出せないので返事すら出来ない。

それは、相手がルカリオだつて同じことだ。

ルカリオから何度かテレパシーで意思疎通が出来ないか試されたものの、ぼくの心が空っぽになつてゐるのもあつて……というのはあくまでも“建前”で、ぼく自身がルカリオのことを強く拒絶しているがために一度も上手くいつた試しなんてない。だつてそうでしょう？

よりもよつてその姿は、ぼくがあのヒトに捨てられた原因そのものなんだから。きみには会いたくなかったよ、なんて、敢えて伝えるつもりもないけれど。

それでも、今はまだ目を背けていたいと、そう思つたぼくは決して間違つていはないはずだ。

：　：　：

あの日以来、すっかりボールそのものが嫌いになつてしまつたぼくは物好きなヒトに連れられ、初めて訪れる町にやつて來た。

そこで、意図せずある気配を感じたぼくは居ても立つてもいられず走り出し、そのままぶつかるようにその存在へとしがみついてしまう。

「どうしたの？ 迷子？」

「トレーナーさんとはぐれたのかな？ どつちから來たか、分かる？」

真っ白な髪の女の子が、屈みながらぼくを見下ろす。

姿はヒトのそれなんだけれど、どこかポケモンであるぼくともすごく近い“何か”を持つているような気がしてならない彼女は驚いたようにぼくを見ていて。

その瞳には憐憫も、嘲りも、何もなかつた。

ただぼくを、ぼくとして認識している。

それだけの視線がどうしようもなく嬉しくて、ぼくは久し振りに安心したんだ。……彼女に一番近いところにいる、あのポケモンから鋭い目を向けられるまでは。

(何で、どうして……つ)

進化していなくとも、バトルを積み重ねてきたぼく自身は決して弱くないはずなのに。

彼女の頭を撫でているあのポケモンに一瞬、見られただけで体が震えて止まらない。彼は何も言つていない。

一言も口に出してすらいなかつたけれど、その目は全てを語つていた。

『俺はお前を“認めない”』

一步踏み出しさえすれば、また触れられるほど近くに彼女がいたのに。

ぼくは、ぼくに向けられた彼の意志が恐ろしく、そして何よりもそんな彼に真正面から対峙できないほどに弱かつたぼく自身を最も許せず、ひたすら歯を食いしばるしかなかつた。

Chapter. 4 花冠のつくりかた

027

コトブキシティまで戻ってきた私たちは、そのまま204番道路も通過して当初の予定通りソノオタウンに到着した。その道中、ひでんわざの一つである『いわくだき』が必要となる場所もあつたが、ひでんマシンについてはクロガネシティでジムバッジとともにヒヨウタさんから貰っていたため別段問題なく進むことが出来た。私が覚えている限り、ゲームにおけるひでんマシンとは自力で探す、或いは誰かから渡されなければ得られないものだと認識していたが、こちらの世界ではどうやらジムリーダーとのバトルに勝利することでバッジとひでんマシン両方を受け取ることが可能になるらしい。正直、その方が旅を続けていく上でひでんマシンの所在を探す手間も省けて助かるので、内心安堵しながら今回はヒコザルだった彼に『いわくだき』を覚えてもらっていた。

「大丈夫だとは思うけど、もし具合が悪くなつたらすぐに教えてね」

『ふふつ。心配性だねえ、セツナは……でも、初めて僕らの進化するところを見たつていうんなら、それもしょうがないのかな？』

204番道路も終盤、ソノオタウンの手前辺りから私の隣を歩いているモウカザルは、随分と機嫌良さそうに炎のついた尻尾を揺らしていた。コトブキシティを経た先にある、204番道路で待ち構えていたトレーナーたちとのバトルでは次のジム戦に備えてほとんどヒコザルに任せていたのだけれど、そんな折ヒコザルの進化が突然始まつたのは実際に見ていて驚かされたものだ。ヒコザルの頃より幾分か身長が高くなつたモウカザルは、私とともにソノオタウンへ足を踏み入れると笑顔で町中に咲いている花々を見つめる。周囲にはまるで色とりどりの花々に吸い寄せられるようにバタフリーやアゲハント、それからミツハニーたちも飛んでいるようだ。町中で既にこの状態なら、奥にある花畠ではきっと更に多くのポケモンたちが生息しているに違いない。

ヒコザルが進化したこともあり、ソノオタウンへ着いたら真っ先にポケモンセンターへ行つておこうと考えていたにもかかわらず、私の足はついソノオタウンの中心部に位置していた花屋さんの方に向かっていく。モウカザルも店先のお花に興味があつたのかそのままついてくれたけれど、もしこのとき隣にいたのが今はボールの中で休んでいるゲツコウガだつたら、寄り道する私に対してもいは溜め息を吐いていたかもしない。

「いらっしゃいませ。良かつたら、店内のお花もゆっくり見ていくくださいね」

モウカザルと一緒に花屋さんのお花を眺めていると、その内私たちの存在に気がついた店員さんから声をかけられたため、お言葉に甘えて店内に入らせてもらうことになった。外には小振りな鉢植えがいくつか置かれていたけれど、店内にはお花だけでなく木の枝や太い幹なども用意されており、まさに花の町と呼ばれるに値する品揃えの良さを感じさせる。

「ここにちは。初めてこの町に来たんですけど……とつても、綺麗なところですね」「うふふ、そうでしょう？住んでいる私たちにとつても、本当に自慢の町なんです。ここはいつも花に溢れているから、特に虫タイプや草タイプのポケモンを見かけるんですねけれど……不思議と争いが起きるでもなく、皆仲良く暮らしているの。花を見ていたら和やかな気持ちになつてくるのは、人もポケモンも、案外同じなのかもしませんね」

私たちに声をかけてくれた店員さんに改めて挨拶してみると、ちょうど他にお客さんがいなかつたこともあってか、彼女は嬉しそうに微笑みながら応じてくれた。

「ところで、ここに来るのは初めてのことですが、どちらからいらっしゃったんですか？」

「えっと、フタバタウンからです。テレビでこここの花畠の映像を見たことは何回かあるんですけど、なかなか来る機会がなかつたもので」

「まあ、そうなんですね！ それなら是非、花畠の方も見てもらいたいですね。ここもお花が多いけれど、あちらの景色はきっと一度見ただけで心に残るものがあるんじやないかしら。場所自体とても広いし、天気が良ければゆっくりピクニックに行くのもおすすめですよ。あとは、花畠であまいミツを売つていらつしやる方もいるので、記念のおみやげとして買つていくのもありかもしません」

店員さんと引き続き話をしながら店内を見回していると、ふとある花の存在が目に留まる。今贈るにしては大分季節外れかもしれないけれど、敢えておみやげの一つとして贈つてみるのもありだろうか。そんな風に考えた私は、目に留まつたその赤い花にもつと近寄つた後で再度店員さんに声をかける。

「あの、ちなみになんですか……ここで花束を頼んだとして、別の場所に送つてもらうことって出来ますか？」

「ええ、勿論！配達のための鳥ポケモンもいますので、いつでも承っていますよ」

「それじゃあ、こちらのカーネーションと……カスミソウで花束をつくつてもらって、フタバタウンまで配達をお願いします」

「かしこまりました。無料でメッセージカードをお付けすることも出来ますが、そちらはどうされますか？」

「そうですね。折角なので、カード付きでお願いします」

相変わらず私の手持ちはゲッコウガとモウカザルだけであるのを考えると、フタバタウンのあの家へ帰つてくるのはもしかしたら私よりヒカリの方が断然早いかも知れない。そのお詫びも今の内に兼ねて、なんて伝えたきつと拗ねられてしまうのが目に見えているから本人に言うつもりはないけれど——せめて、これまでの感謝の気持ちだけでも伝えられたらいいな、なんて思いながら私は店員さんからカードとペンを受け取つた。

『セツナ、誰かにお花贈るの？』

「うん。私が一番お世話になつた人に、ね」

早速花束の用意に取り掛かってくれている店員さんの背中を眺めながら、借りたペンでアヤコさんに宛てたメッセージをカードに書き連ねていく。そんな私を他所にモウカザルはお店の入口まで歩いていくと、ただ風に揺られている外の花々へ再び目を向けていた。

店員さんに花束をつくつてもらえた私は、書き終えたカードも添えてアヤコさんの家宛てに配送をお願いすると漸くポケモンセンターへ向かった。いつの間にか日が暮れていたことに驚いてしまったが、よく考えれば昼過ぎにはクロガネシティを出ており、その上トレーナーたちとバトルもしながらやつて来たのだからそれだけ時間が経つていても別段おかしい話ではない。ゲツコウガとモウカザルの入っているボールを預け、ひとまず今日の分の宿泊手続きも済ませてからアヤコさんに連絡をとる。クロガネジムのジムバッジを貰えたこと、今はソノオタウンまで来ていることを伝えるとまるで自分がのことのように喜んでくれたアヤコさんの声を聞いているだけで、何だかこちらが気恥ずかしくなってきた。結局今日送った花束については何も伝えないままで会話を終えたが、おそらく明日中にはアヤコさんの手元に届くだろうし、花束の感想はまた後日連絡するときにもうそれだけで十分な気がする。

「明日、明後日は晴れているみたいだけれど……明々後日から雲行きが怪しくなりそうね」

ジョーイさんに預けたふたりの回復が終わるまでの間、ポケモンセンターのロビーでテレビを見ているとちょうどソノオタウン周辺の天気予報が発表されていたので簡単にメモをとつておく。先程出会った店員さんにおすすめされたソノオタウンの花畠は、私自身一度訪れてみたいと思っていたところだったので明日はそこへ行つてみようと考えていたものの、なるべく雨が降り出す前にハクタイの森を抜けておきたいところでもある。少なくとも、体力を奪われる雨に打たれながらあてどなく森を彷徨い続ける……なんて最悪の状況にだけはならないよう、念のため野宿を見越した準備も出来る限り整えておきたい。

(ともかく、明後日からの予定はまた皆に相談しながら決めようかな)

そこまで考えをまとめた辺りでジョーイさんから呼び出された私は、残念ながらこのときまだあることに気付けていなかつた。

——この町へ、ある目的を果たすためにやつて来るギンガ団と遭遇する可能性は、決してゼロではなかつたことを。

一年中、花に囲まれたここでかつてわたしは生まれた。

生まれたその日、わたしの近くにはどうしてか誰もいなくて、とても寂しくなったことをわたしは今でも覚えている。

最近はわたしと同じようにここで生まれ育つたともだちも出来たから、全く楽しくない、というわけでもない。

むしろ小柄なわたしが気になるのか、ともだちだけでなく、ここを住処にしている他のポケモンからもよく気に掛けられている辺りわたしはきつと恵まれている方なのだろう。

この辺りにはきのみをつけた木がたくさんあるし、時々通りがかつたミツハニーからあまいミツを分けてもらえることだつてある。

だから今まで食べ物に困るようなこともほとんどなくて、わたしは大好きなどもだちと遊びながらとても穏やかな日々を過ごしていた。

誰かが傷つくことも滅多にない、たくさんの綺麗な花に満ちた優しい世界。それこそがきっと、これからもわたしの生きていく世界。

(満たされているはず、なのに……)

時々、夜になると全く眠れないことがある。

そんなときに決まつて思うのは、わたしも人間の子と旅をしていたら、こうしてどうしようもないほど感じる寂しさを味わうこともなくなるのかなあ、つてこと。ともだちは、人間なんてわたしたちをいきなり捕まえようとしてくる危ない存在なんだから、なるべく近寄らない方がいいに決まつてていると言つてくる。だけど、……本当に？

この花畠の外はそういう人間ばかりじゃなくて、もしかしたらわたしたちの意思を尊重してくれる、そんな人だつてどこかにいるんじやないかしら、なんて。

そう思いはしても、結局何も言えなかつたわたしには何より勇気が足りていなかつた。

いつだつて、望みさえすればこの心地良い箱庭から出ていくのは簡単で。

それなのにそのための一歩すら踏み出せず、今日もここに留まり続けているわたしはつまるところ、こんなわたしでさえ認めてくれる誰かが現れてくれるのを——夢見た『奇跡』が起きる日を、ただひたすらに待ち続けていただけだつたのだ。

：　：　：

優しい風が辺り一面に咲き誇る花々を揺らし、何ともゆつたりとした時間が流れいく。目を凝らせばこの花畠に生息しているポケモンたちの姿もいくつか見えたが、私は自分から彼らに近付くこともなく、花畠の隅にあつた大きな木に凭れてただ目の前に広がる景色を眺め続けていた。ちなみにモウカザルとゲッコウガのどちらも勿論ボールから出していたが、お昼ご飯を食べ終えた彼らは現在私の膝の上で揃つて熟睡しているところだ。花畠に着いてから暫くはしゃいでいたモウカザルと異なり、ゲッコウガは当初私の膝を借りることにかなり躊躇つていたものの、そんな彼でも食後の眠気には抗えなかつたらしい。モウカザルと同じく目を閉じ、今も静かに眠り続いているゲッコウガの頭を起こさないように気をつけながら撫でてみると、更に私の方へ擦り寄ってきた彼に思わず笑みが零れてしまつた。

（こんなに無防備な姿も見させてくれるようになつた、つてことは……私のこと、それだけ

あなたが信じてくれていいのかしら？）

シンジ湖の近くで出会つたばかりの頃、今と違つて私に対しても一線を引いていたかつての彼を思い出すとまるで夢のように思えてくるけれど、何より私の膝越しに伝わる彼とモウカザルの体温が紛れもない現実であることを教えてくれる。こうして私に寄り添つてゐるふたりの寝顔を見ていると、花畑の空気が澄んでいることもあつてか私まで眠つてしまいそうだ。しかしながら、流石に全員意識が無い状況というのも余りに用心なので、私は眠気覚ましとして鞄から取り出したタマゴを胸元で抱えてみる。揺れる回数はまだまだ少ないものの、腕の中の温もりから確かにこのタマゴにも命が宿つてゐることを感じる。

「今日は、皆でソノオタウンの花畑に来ているの。太陽が眩しくてお花も喜んでしまうような、そんないい天気にこんな素敵なお景色を見ることが出来て私も嬉しい、と思つてゐるよ。いつかあなたが生まれてきたら……そのときは、あなたを連れてもう一度ここに来るのも、きっととても楽しいでしようね」

果たして、その日が一体いつになるのかはまだ誰にも分からぬ。しかし、無事に生

まれてきてくれたなら今はタマゴの中にいる子にも、いざれこの輝かしい景色を見せてあげたいと考えながら私は一人で語りかける。すると、抱えていたタマゴが僅かながら揺れたような気がして、それに驚きながらも今度はじわじわと嬉しくなった。花畠に吹く風は依然優しく、芳しい花の香りも絶えることがない。更には耳を澄まさずとも聞こえてくるふたりの寝息が耳に心地良いのもあり、何だか途方もなく幸せだな、なんて思つていた矢先のこと。

「？……あら、」

『！』

咲いている花々に紛れるように、いつからかこちらを見ていた小さなポケモンの姿に漸く気付いて声を漏らせば、私と視線が交わったポケモンはびくりと体を揺らすなりその場で静止してしまった。一步さえ踏み出せばお互い触れられそうなほど、いつの間にかかなり近付かれていたことに少しばかり驚くが、おそらく気付かなかつた理由は向こうに敵意がなかつたためだろう。バトルを望むでもなく、私たちを見ていたのは見知らぬ存在に対する興味からだろうか。何にせよ、今までじつと身を潜めていた辺り突然バトルに発展する気配はなさそうだ。そのように判断した私はタマゴを一旦鞄へ戻す代

わり、いくつか持っていたきのみをポケモンの目の前に置いてみる。

『……？』

「驚かせちゃつたみたいでごめんなさいね。私たちはちょっと一休みしているだけで、別にこここのポケモンたちとバトルするつもりはないの。もしお腹が空いているなら、そのきのみ、好きに食べていいよ」

とりあえずこちらにも戦意はないことを伝えるべく、そう言つてみたが向こうから更に近寄つてくることもなく、目だけが私ときのみを交互に追い続ける。敵意がないとしても、やはり初めて見る存在に対しても警戒はしているのだろう。だからこそ私は無理にきのみを押しつけるでもなく、そのポケモンから目を逸らすと再び色鮮やかな花畠の方へと意識を向ける。きのみを食べずとも、言葉通り私たちに何もする気がないということはおそらく分かってくれるはずだ。そう考えて、敢えて何も言わずにいると今度はどこからか慌ただしい羽音が聞こえてきた。

『姉ちゃん、やつと見つけたぜえ！どこまで行つちまつたのかと思ひきや……つておいおい、人間がいるじやねーか?!』

『!!』

『こうしちゃいられねえ、とつととここから離れるぞ！』

『ちょ、ちょっと待つてよ…………この人は、』

『ええい、言い訳はなしだ！人間に捕まるなんて、おれは絶対嫌だからな！変な玉ぶん投げられる前に、届かないくらいこのまま遠くまで逃げきつてやるんだぜえ！』

『お願いだからわたしの話を聞いて、ムクバード！』

『姉ちゃんの頼みでもそれは無理だなあ！つーわけで人間、あばよお!!』

羽音の主であるムクバードは何か言いかけていた彼女を器用に鉤爪で捉えると、そのまま花畠の入口側へと飛び去つていってしまう。一連の流れが余りにも唐突だったために、そんな彼らを見送ることしか出来なかつた私は何も言えない今まで呆然としていたが、やがて眠つていたはずのゲツコウガがゆっくりと起き上がつた。

『やれやれ。何とも喧しい連中だつたな…………』

「……ゲツコウガ、もしかして不機嫌？」

『折角の昼寝を邪魔されたんだ、そうなつても仕方あるまい…………セツナ、もう少し奥の方に移動しておかないと？俺はまだ眠い』

「まあ、移動するのは構わないけれど」

その前に、まだ眠り続けていたモウカザルは一旦ボールに戻しておこうとしたところ
で、ムクバードが飛び去った方向から地響きに近い音が轟く。思わずゲッコウガと一緒に
にそちらを見遣ると、それまで間違いなく穏やかだつたこの場所にはまるで似つかわし
くない、黒々とした煙が立ち上つていて——それを見た瞬間、私は猛烈に嫌な予感を覚
えていた。

……どうして、こうなつてしまつたんだろう。

「お前たち！こんな風にポケモンを傷つけて、本当に何とも思わんのか?!」

「だつたら何だつて言うんだい、じいさん。俺たちギンガ団には崇高な目的がある。それを達成するために、邪魔する奴がいたらそいつをコテンパンにする。至極当然のことさ」

「さあ、大人しくあまいミツを全部寄越しな！ついでにじいさんの後ろにいるそいつらも、折角の機会だ。まとめて俺たちギンガ団が使つてやるからよ！」

「くそつ、何て横暴な連中なんだ……！」

わたしの話を全く聞く気がなかつたムクバードに連れられて、花畑の入口に向かつているといきなり知らないポケモンたちから攻撃を向けられてしまつた。それに一早く気付いたムクバードが咄嗟にわたしを地面に下ろしたから、わたしはほぼ無傷で済んだ代わり攻撃を受けた彼の方はぐつたりとしている。騒ぎを聞きつけて、この花畑に元々

住んでいた人が駆けつけてわたしたちを庇うように立ってくれてはいるけれど、……どうやらわたしたちに攻撃してきた人と違い、自分のポケモンを連れているわけではないようだ。

『ううつ、いつてえ……』

『ムクバード、しつかりして……！』

一匹だけでなく、複数のポケモンたちから一度に攻撃を受けた所為かムクバードの顔色はとても悪い。わたしは自由に空を飛べる彼と違い、今まで他のポケモンと戦う機会なんてまともになかった。だって、そんなことしなくてもこの美しい箱庭の中だけなら、皆争う気も起こらず仲良く暮らしていけたのだから。けれどムクバードが傷つき、わたしたちの前に立っている人もポケモンを持っていない今、動けるのはわたしだけだ。何とか、しないと。

「お？……まさか、たった一匹で俺たちとバトルするつもりか？」

「それにしてはこいつ、震えているんだが……びびつていてるくせしてわざわざじいさんの前に出てくるとは、正義の味方にでもなつたつもりか？ふん、笑わせてくれるぜ！」

「全くだ。その気概だけは買つてやらんでもないが、始まる前から震えが止まらないと
は……くくつ、話にもならんな！まあとりあえず、望み通りいたぶつてやるとしよう
『そうだな。あまいミツを戴くのは、こいつをいたぶつてからでも遅くはない』

そんなこと、わたしだつて勿論分かつてゐるわよ。あなたたちの言うように体の震え
が止まらないし、出来ることなら何もかも忘れて逃げ出してしまいたいくらい。でも
ね、一緒にこの花畠で生きてきた大切なともだちを見捨てたら絶対後悔するのも分かつ
ているから、わたしはここで逃げられない。……せめて、わたしとムクバードを庇おう
してくれた人がここから離れられる程度には、時間を稼げるといいのだけれど。

「ズバット、『つばさでうつ』

「ケムツソは『どくぱり』、ニヤルマーは『だましうち』だ！」

揃つて歪な笑みを浮かべた人たちが命じたとおり、ムクバードを傷つけた三匹のボ
ケモンがわたしに向かつてそれぞれのわざを放つてくる。そんなときでもなお震えを
止められないわたし、まともにわざを防ぐ手段を都合良く思いつくはずもなく——こ
のまま直撃するのだ、と悟りながらも思わず強く目を瞑つた、その刹那。

「『たたみがえし』」

どうしてか、ここにいるはずのないあの人の声が聞こえて。

……目を開けると、さつきまであの人の膝で眠っていたポケモンたちがわたしに背を向けるように立つていて、わたしは傷一つ負つていないうことに気付く。

「なつ、何なんだよ、あのポケモン……！」

「まさか、全てのわざを防がれることは……面白い。もしあいつもここで捕まえられたら、俺たち一気に幹部へ昇格出来るかもな」

「おい、今そんなこと言つている場合かよ?!」

「……残念だけど、嫌な予感ほど当たつてしまふものね」

溜め息を吐いたあの人は心底憂鬱そうに呟くと、わざを防がれたことに驚きを隠せない人間たちに視線を移す。そんな緊迫した状況なのに、不思議とわたしは叢から垣間見た、あの人の優しくて温かな微笑みについて思い出していた。

〇三〇

黒煙が立ち上つていた方向へ駆けつけると、この花畑に元々住んでいたと思われるおじいさんの前にたつた一匹で立つていたあの子めがけ、ギンガ団のポケモンたちが一斉にわざを放とうとしているところだつた。そこでゲッコウガに『たたみがえし』の指示を出し、あの子に直撃しそうだつたわざを全て無効化させたところで、漸く私たちの存在に気付いたギンガ団のしたつぱ一人から揃つて睨みつけられる。しかし私はそんな彼らの視線を無視すると同時に振り返り、驚いた表情で未だ立ち尽くしていたおじいさんへジュンサーさんを呼んできてほしいと伝える。少し迷つたものの、町の方に走つていつたおじいさんの背中を見送り改めて前を向けば、ゲッコウガとモウカザルの両方もやる気に満ちた様子で佇んでいた。実に頼もしいふたりの姿にほんの少しだけ嬉しくなつたが、今はそんな喜びを抑えてギンガ団、ひいては彼らのポケモンたちとのバトルに頭を切り替えなければならない。

「ちつ、余計な真似を……まあいい、ならばここでお前のポケモンたちも捩じ伏せるまで！」

「ケムツソ、『たいあたり』！ニヤルマーは『さいみんじゅつ』だ！」

したつぱから受けた指示通り、ケムツソはモウカザルに向かつてたいあたりしてきたが、攻撃の当たる直前にモウカザルが躊躇したことで逆に地面へと叩きつけられる恰好となる。それと同時にニヤルマーも指示されたわざを繰り出そうとしていたが、こちらはゲツコウガが独断で『ちようはつ』を行つていたためか不発に終わつてしまつていた。数だけ見れば向こうに分があると思つていたのだろう、したつぱの二人はどちらも戸惑つた表情を見せるも、私たちにとつてはむしろチャンスが訪れた瞬間でもある。これを活かさない手はない。

「モウカザル、ニヤルマーに『マツハパンチ』。ゲツコウガはズバットとケムツソに向けて、『みずしゆりけん』！」

即座に動いたふたりは、相手のポケモンたちに向けてそれぞれのわざを放つ。特に弱点である格闘タイプのわざを受けてしまつたニヤルマーはひとたまりもなかつたようで、そのまましたつぱの足元まで吹き飛ばされることになつた。ゲツコウガの『みずしゆりけん』も、二匹を相手にしながら相変わらず威力が衰えていなかつたが、モウカ

ザルもフタバタウンを出発した頃に比べて着実に力をつけてきているようだ。本当に、こんな状況でさえなければ喜ばしい成長具合なのだけれど、とりあえず今はバトルの行く末を見守ることに徹する。

「くそつ、一匹やられたか……！ ケムツソ、『いとをはく』！」

「ズバット、『あやしいひかり』で奴等を混乱させろ！」

ニヤルマーが早々に倒され、焦つたしたつぱたちから再び指示が出されるが、残念ながら未だ『ちようはつ』の効果が残っていたためどちらも指示通りのわざを使えずにうろたえる。せめてこの時、どちらかだけでも攻撃技を指示していればまた状況が違っていたかもしれないが、こちらにとつては一気に勝負を決める最良のタイミングが来たと言つても良い。

「モウカザル、ケムツソに『かえんぐるま』！ ゲッコウガはズバットに『みずのはどう』！」

炎の赤と水の青——対照的な色が私の視界いっぱいに広がり、それぞれの攻撃が直撃

する。

地面に為す術もなく相手のポケモンたちが倒れ込んだかと思えば、ちょうどタイミングを見計らつたかのように花畠のおじいさんもジュンサーさんを引き連れて戻つてきた。手持ちが全員戦闘不能になつた現状において、最早この場からの逃走も困難であると早々に察したのだろう。したつぱの二人は力なく座り込むと、それから大人しくジュンサーさんに連行されていつた。

: : :

「まさか、長いこと争いとは無縁だつたこの花畠が荒らされるかと思つてはらはらしたが……君が来てくれて助かつたよ。若いトレーナーさん、本当にありがとう！そうだ、お礼にうちでつくつている特製のあまいミツ、良かつたら持つていつてくれないかい？家にあるのを取つてくるから、ちょっとそこで待つてくれ！」

ギンガ団のしたつぱたちとジュンサーさんが花畠から去つていつた後、満面の笑みを

浮かべた（心なしか、テンションも上がっているらしい）おじいさんもこちらが引き留めるより早く自宅に向かつてしまつたため、唯一この場に残つていた私はそこで漸く沈黙していた彼らの方へと歩み寄る。当然ながら、倒れ伏していたムクバードからは真っ先に警戒と敵意が込められた厳しい視線を向けられたが、敢えて気にする素振りも見せず鞄から取り出したキズぐすりを使用した。先程相対したギンガ団の手持ちにケムツソがいたため、毒状態になつてゐる可能性を危惧していただのだが、幸い状態異常に陥つた様子はないらしい。体力を回復させたムクバードは地面から起き上がり、何度も翼をはためかせた後で再び私を見つめてくる。敵意は消えたものの、完全に警戒を解いたわけでもないムクバードの視線は決して優しいものではなかつたが、それでも幾分かましになつたような気はする。

『……、変な人間だな。おれを捕まえずに、わざわざ回復もさせるなんて。おれが襲い掛かってきたら、そつちが怪我するかもしれないのに。呑気な奴もいたもんだ』

やや間を置いて聞こえてきたムクバードの聲音は実に率直なものだつたが、私はそれを聞いて怒ることもなく、むしろ発言の一部について納得していた。確かに、既に体力を消費していたムクバードをボールで捕まえて直接ポケモンセンターまで連れていつ

た方が、回復させるという意味でもより万全な方法だつたかもしだい。しかし、私は一方的にポケモンを捕まえることはしたくないばかりか、折角ならお互いが納得した上で一緒にいられたらしいな、なんて考へてもいる部類の人間なのだ。こうして自分のことを振り返つてみれば、呑氣と称されても仕方がないのかもしれない。そう思つた末に苦笑いが洩れそうになつたところでペシリ、と小さな音が鳴る。何事かと思つてムクバードの方を見遣ると、なぜか不機嫌そうな彼女の尻尾に軽く叩かれていたようだつた。

『姉ちゃん？ どうしたんだよ、急に』

『……ムクバード。助けてもらつたんだから、そうやつて文句を言う前にまずはお礼を伝えるのが先でしよう？』

『え、でも、こいつさつきの奴等と同じ人間だし……おれが何を言つたところで、どうせ分からぬじやん』

『そうだとしても、もしこの人が駆けつけてくれなかつたら、わたしたちはきっと更に危ない目に遭つていたと思うわ。それに、助けてくれた相手とあなたを傷つけた相手を一括りにされるのは……少なくとも、わたしにとつては悲しい、から』

不機嫌な表情から一転して、今にも泣き出してしまいそうな様子で俯いた彼女の姿はどうやらムクバードにとつてかなり動搖させられる光景だつたらしい。必死に何か言おうとするが、咄嗟に上手い言葉が出てこないのかムクバードはおろおろと彼女の周りを行つたり来たりしている。種族が違つても、彼女を姉と呼んで慕つている辺り本当に姉弟のような関係性なのだろう。そんな彼らの様子を見ていると少し微笑ましくなつたが、このまま放つておくのもどうかと思うので、とりあえずここで独り言でも言つてみることにする。

「別に、無理にお礼を言う必要はないのよ。私が気になつて、勝手にあなたたちの様子を見にきただけであつて……さつきの煙を見ていれば、私でなくとも誰かしらは駆けつけていたでしようし。まあ、最悪の事態になる前に間に合つて良かつた、とは私も思つているけれど」

こんな独り言を聞いた彼らは、揃つて穴が開きそうなくらいに私のことを見つめる。まさか、自分たちが今まで話していた内容が私にも筒抜けだつたとは思つていなかつただろうことを踏まえれば当然の反応なのだけれど、それにしてもどちらも全く同じ表情をしていた所為でつい笑い声が洩れてしまつた。

「当分、さつきの人たちがここまで来ることもないだろうし、あまり喧嘩せずに仲良くね」

そういうしている内に、宣言通り自宅からあまいミツを持つてきてくれたおじいさんの姿が見えてきたので、未だ呆然としていたふたりに背を向けた私は駆けるように花畠を歩んでいく。少し前までギンガ団のしたつぱたちとバトルしていた、とは思えないほどに穏やかなこの場所はやはり美しく、いつかもう一度訪れる時が既に楽しみで仕方なかつた。

030・5

今までが不幸だつた、とは決して思わない。

むしろわたしは恵まれている。飢えない程度に食べ物があつて、ともだちがいて、誰かと争う必要もない。

ここは、わたしが生まれてくる前からそんなところだ。

争いを好まないポケモンたちが皆穏やかに生きていける、箱庭のような世界だつた。

だけど、——優しい声で、優しい眼差しでタマゴに語りかけていたあのを、偶々叢から見かけたとき。

まだ生まられてきてさえいないのに、わたしはあの人人が持つていたタマゴのことがどうしようもないくらい羨ましくなつてしまつた。

だつて、あんな風に生まれる前から待つていてくれた存在がわたしにはいなかつたら。

いいなあ、つて思つたんだ。

きっとタマゴから生まれた後も、あの人にたくさん愛してもらえるのだろう。

うんと大事にされながら、育つていく姿を一番近いところから見守つてもらえるのかな。

それにタマゴだけでなく、あの人の膝で一緒に熟睡していたポケモンたちも何だか心地良さそうで、それがまたわたしに羨望を搔き立てる。

この花畑の空気ともまた違う、まるで、ひだまりそのもののようなあの人の傍に寄り添えたなら……或いはわたしも、幸せになれるのだろうか。

そんなことを考えていた自分に気付いて驚いたものだけれど、それからムクバードと遭遇した変な人たちとのバトルも見たことで、更に色々と驚かされてしまった。

『……姉ちゃん、さつきからずつと黙つているけれど、大丈夫か?』

『……ええ。大丈夫よ』

『実は、あいつらの攻撃が当たつていました……とか、ないよな?』

『心配性ね。大丈夫だつてば』

『なら、いいんだけどよ……』

今はわたしたちに背を向けて、この花畑に住んでいた人からお礼のあまいミツを受け取っていたあの人は、わたしが思っていた以上にとても不思議な人間のようだった。

自分からはつきりそうだと明かされたわけではないけれど、どうもあの人には他の人間と違つてわたしたちの会話が聞こえていたらしい。

そんな人間はわたしよりもずっと外の世界を見てきたムクバードも他に見たことがないようで、一緒に驚いたわたしたちに微笑んだある人から今も尚、わたしは目を離せずにいる。

『姉ちゃん、……本当はあの人間と一緒に、外へ行つてみたいんだろ?』

『!』

『やつぱりそうか。まあ、いきなり黙りこくる理由なんて、それくらいしかないよなあ』
『で、でも! あなたを置いていくわけにも、』

『おいおい。おれだつて、いつまでも生まれたてのムツクルじやあないんだぜ? ていうかもうムクバードだし。何なら、姉ちゃんよりも先に進化だつてしているし』

『……』

『……だ、大丈夫だつて。姉ちゃんも、あの人間と一緒にならその内でつかくなれるだろうしそう落ち込むなつて! 多分!』

多分、と付けられたら余計説得力に欠けてしまうと思うのだけれど、それを口に出す

代わりに溜め息を吐いたわたしは、若干慌てているムクバードにとある疑問を投げかけた。

『……意外ね。わたしはてっきり、反対されるかと思つていたのだけれど?』

『あー……そりやあ、相手がおれに攻撃してきた変な奴等の方だつたら妨害していた自信もあるけど。おれを回復してくれたあの^{人間なら}、とりあえずめちゃくちや悪い奴でもなさそだつたし、なら別にいいかなって』

『あら。人嫌いなあなたにしては、珍しく高評価なのね』

『姉ちゃんに言われたとおり、助けてもらつたのも事実だし……つて、おれのことは良くて。姉ちゃん、おれならもう大丈夫だよ。さつきも言つたけれどムクバードになつているくらいだし、ここならおれだけでものんびり生きていいける。あの^{人間}も言つていたけれど、今日みたいなことは当分起きないだろうし。それに、……これでも、姉ちゃんには感謝しているからさ! これからは、姉ちゃんがやりたいこと、めいっぱい楽しんでもらつた方がおれとしても嬉しいんだ』

『ムクバード……』

『でも、……万一、ないとは思うけど虐められたり、泣かされたりすることがあつたら。そのときは、いつだつてここに帰つてきていいんだからな!』

あくまでも毅然とした態度を崩さず、わたしの背中を押してくれるムクバードを見て
いると、そう遠くない昔のはずなのに生まれたばかりの彼のことが思い出される。

いつからかわたしを姉と慕い、後ろをついてきた可愛い弟のようだった彼が今では涙
を堪えながらも、わたしを送り出そうとしてくれている。

そんなムクバードの姿に、やはり今までのわたしは不幸ではなかつたのだと、改めて
思う。

『……ありがとう、ムクバード。次に会える日を、心から楽しみにしているわ』

『おう。姉ちゃんよりもでつかい男になつてやるんだから、覚悟しておけよな！』

『ふふ、そうね……ちゃんと覚悟、しておくわ』

さよならは言わない。

もう一度、この場所でいつかまた会えると信じているから。

それはわたしだけでなく、ムクバードも思つていることだから。

『行つてくるわ、ムクバード』

『……ああ。行つてらっしゃい』

生まれ育つた花畠の外には、一体、どんな景色が広がつてゐるのかな？

今すぐバトルに順応できるほど今の私は決して強くないいけれど、それでも、……ひだまりのようなあなたを護れる程度に、わたしも少しづつ成長していくたらしいな、とは思う。

そうして願わくは、いずれあなたの下で生まれてくる子をわたしも見守つていてたい。

今日、この場所で出会えた、あなたの傍で。

「……あれ？ どうしたの、コリンク。何かあつた？」

やがて、駆け寄つてきた私に気付いたあなたが、不思議そうにわたしを見下ろす。その頭上には雲一つない、真つ青な青空がどこまでも広がつていた。

Chapter. 5 ある光芒の一生

031

——可哀想に。君は、真実を知つてしまつたのだね？

——そうなるくらいならばいつそのこと、知らない方が君のためだつたかもしないな。

——真実とは、……否、現実とはそういう一面も持つてゐるものだ。知れば知るほど容易に傷つけられることもあり、逆に無知であるがゆえに平穏を保てることもある。

——……さて。君はこれから、どうしたい？

——分からぬ、か。それも答の一つではあるだろう。だが、私から見てこのままでははつきり言つて君が持たない。

——×はともかく、×の崩壊はそれこそあつという間に訪れる。

——現に私は、この目で何度も見てきたからよく知つてゐる。そういう、哀れなものたちが辿る末路を。或いは君も×から見ていたのかもしれない。たとえ、意識には残らずとも。

——そうなれば、君は君ですらなくなつてしまふ。×が×た君は×るのだ、永遠に。

×がこれまで君にとつて×の全てにも等しかつたなら、×た今となつては誰でもうと君の救いには成り得ない。残念ながら、この私であろうともそれは覆せない。

—理由はどうあれ、×は君を、そして×も深く×ていた、と私は思う×
—しかしながらこのまま君を……私の×であつた×諸共、結果として×た×に明け渡すのは、実に危険極まりないことだとも思われる。

—ゆえに私は、君と×を引き離すことを強く望む。このまま一生再会しないでほしいくらいだが、……まあ、これに関して×には私から釘を刺しておけば済む話か。
—先程も言つたが、私では今の君を救えない。

—だが、これからそういう存在と新たに出会える可能性も決して零ではない。

—探しなさい。君を誰より×てくれるものを、そして君自身の×となる命を。

—忘れること、そして思い出さないことは罪ではない。今の君はとつてはどちらも必要なことに過ぎないのだ。だからこそ、私は……。

: : :

「あれは……誰の声、だつたんだろう。全く覚えがないんだけど」

花畠を後にしてソノオタウンのポケモンセンターでもう一泊した翌日、奇妙な夢から目覚めた私は朝から一人首を傾げていた。不思議と夢に出てきた相手の姿を認識出来なかつたことも気にかかるが、それ以上にこれまで聞き覚えのない声であつたにもかかわらず、相手の口振りがまるで私についてよく知つているようなものだつたことも引つかかる。

(忘れる)ことと思い出さないことが必要つて、どういう意味?)

気になることは多々あるものの、誰とも分からぬ相手と夢で交わした会話を一からじつくりと思い出す、なんて作業が寝起きの頭で上手くいくわけもなく。最初の数分は粘つっていたが、その内潔く諦めた私は気分転換にテレビでも見てみることにする。

「……やっぱり、昨日はこつちに泊まつておいて正解だつたみたいね」

205番道路を進んだ先、谷間の発電所からギンガ団の団員たちが何人か逃げていく

映像が流れて思わず溜め息が出てくる。昨日花畠に現れた二人は駆けつけたジュンサーさんが通行していったため、おそらく発電所を占拠している団員にも何らかの対処がされるだろうと予想して敢えてもう一泊していくことを決めたわけだが、どうやら夜が明けない内に発電所付近は大分慌ただしいことになつていていたようだ。しかし、一日経つた今では向こうも漸く落ち着いたらしく、これから付近を通行する分には何ら問題ないとも報じられていたので安堵する。明日には雨が降るようなので、なるべく早めにハクタイの森を抜けてハクタインティまで到達出来たら理想的なところだけれど、あの森はベテランのトレーナーであつても容易に迷う場所と聞いているので無理は禁物だ。一応、昨日の内に野宿の準備もある程度整えておいたので大丈夫だとは思うが、念のため持ち物の確認をしていると布団から「そぞろ」と動く音が聞こえてきたためそちらに視線を向けてみると、まだ眠い様子の彼女とちょうど目が合い、自然と笑みが零れていた。

「おはよう、コリンク。まだ眠いならそこで寝ていいよ?」

『んー……大丈夫、起きる』

昨日花畠で出会い、私と一緒に外の世界を見てみたい、と宣言してきたコリンクは布

団から姿を現すと、覚束ない足取りで私の膝に凭れかかりそのまま目を閉じてしまう。起きると言つたにもかかわらず、完全に寝る体勢になつた彼女に突つ込むべきか少し迷つたが、元より急ぎの旅ではないので結局何も言わず目の前の小さな頭を優しく撫でるだけにしておいた。ふと、彼女と同じような体格だつたりオルのことを思い出して今頃どうしているだろうかと考えてみたが、ゲンさんや彼のルカリオと一緒にならばきっと大丈夫だろう、と今は信じておくことにする。いつか私も、こうてつじまに訪れる機会があつて再び彼らと出会えたならば、そのときに元気なりオルの姿を見ることが出来れば嬉しいものだ。

「……これから先、あなたも生まれてきたらもつと賑やかになるのかな？」

鞄の中で未だ沈黙を保つタマゴを眺めながら、いつかの遠い未来を想像する。たとえ今朝の夢で聞いた声から可哀想だと言われようとも、私は何となく自分が真実から目を逸らすこととはしないのだろう、と予感していた。

コリンクが目覚めるのを待つてから朝食を摂り、持ち物の確認も終えた私は相変わらず花の香りに包まれているソノオタウンを出発して205番道路へと向かう。その途中、通りがかった谷間の発電所付近では小さな女の子と“ふうせんポケモン”ことフワントンテが遊んでいるらしい光景を垣間見て思わず微笑ましくなったが、隣で歩いていたコリンクも興味を持ったのか一緒に遊びたそうにしていたので、少しだけ彼女たちに接触させてもらうことになった。昨日まで発電所がギンガ団に占拠されていたこともあり、本当は疲れているのではないかと危惧していた私の予想に反して女の子はむしろ声をかけられたことに喜び、ポケモン図鑑にフワントンテの姿を写すことにも快く許可してくれたので助かつたのはここだけの話としておきたい。別れ際、名残惜しそうに手を振つてくれた彼女とフワントンテにこちらも勿論手を振り返し、更に205番道路へ進んだ先で何人かのトレーナーとのバトルも経て、ハクタイの森入口に辿り着いたのは昼になる手前のことであつた。

『花畠と違つて、この森、何だかひんやりするね……』

「そうだね。コリンクは大丈夫？ 寒くない？」

『わたしは平気よ、ありがとう。でも、辺り一面同じような木がたくさんあるから、なるべく迷わないように気をつけて進まないとね』

木漏れ日が射す森の中はコリンクが言うとおり、周囲を木に覆われている上叢もよく生い茂っている、まさに緑に満ちた場所となっていた。迷いやすいとはいえた以外の場所は行き止まりになつていていた箇所も多く、その場合は一度通つた道を戻りさえすれば時間がかかつても進めそうな印象があつたのだが、実際目に見える景色にほとんど変化がないので簡単に方向感覚が狂いそうなところが森の怖い一面でもある。入口から見て左側にある、表面が苔に覆われた岩をちらりと見ながらとりあえず出口を目指して歩いてみようかと考えていると、後ろから微かに靴音が聴こえてきたためその場で振り返る。そうしてそこにいた人物を見て内心で驚く一方、私は同時に納得してもいた。なぜならば、ゲームでこの森に訪れた際、私も彼女にはお世話になつたものだから。

「まあ、良かった。ちょうど人が居てくれて助かつたわ」

「……ここにちは。見たところ、あなたもこの森を進む予定ですか？」

「そんなところね。出口まで行くつもりで来たんだけれど、ニュースじやギンガ団、なん

て怪しい人たちがうろついているつて聞いていたから実は一人で進むのも心細くて……私、モミつて言うの。良かつたら、あなたも私と一緒に行かない?」

「構いませんよ。私はセツナです、宜しくお願ひします」

「セツナさんね。ええ、こちらこそ宜しく」

縁の長い髪を軽やかに揺らした彼女は、にこやかに挨拶すると早速私の隣に並ぶ。

(……本当は、ここで彼女と出会うのはヒカリの方だつたんだろうけれど、到達のタイミングでこうなつたのかな?)

おそらく私の後にこの森を通るであろうヒカリは一人で大丈夫だろうか、と気になつたが、ヒカリがどうしているかはハクタイシティのポケモンセンターに到着してからアヤコさんにそれとなく聞いてみることを決めてまずは森を進むことに集中する。昨日と比べて雲の量が多くなつてきていていることから、やはり明日には雨が降り出すと見ておいた方が良い気はする。とはいって、今後の進行速度は隣にいる彼女の歩行ペースにもよるので、私たちが出口に着くまでどれくらいの時間がかかるのか定かではないが……さて、どうなることだろうか。

「うーん……入口からここまで、約二時間。やつと半分つてところかしら。ねえセツナさん、ちよつとこの辺りで休憩しない？」

「そうですね。私、ポフィン持つているんですけど、良かつたらモミさんたちも一緒にどうですか？お口に合うといいんですが」

「わあ、嬉しい！私もね、この森を抜けるまでどれくらいかかるか分からなかつたから、ちよつと多めにサンドイッチをつくつておいたの。セツナさんも摘んでくれると嬉しいわ」

「……何だか、こうしているとちよつとしたピクニック気分ですね」

「うふふ、そうね。ソノオタウンの花畠と比べたらこつちはとても静かだけれど、空気が綺麗で目にも優しい分、私はここでゆっくりするのもありだと思うわ」

……結論から言うと、モミさんは私から見てとても優秀なトレーナーだつた。彼女のパートナーであるラツキーが色々とベテランで頼もしかつたのも理由の一つだが、彼女自身迷いやすい森の中になつても常に冷静であり、叢から野生のポケモンが出てきそうな気配があればそれとなくこちらも気に掛けていてくれた点では何度助けられたこと

か分からぬ。そんな先輩トレーナーである彼女となるべく慎重に進んできたおかげか、入口からこれまで特に大きな問題が起ることもなく、私たちは至つて順調に出口へと向かつていた。

しかしながら、流石に二時間も歩き続けていればその分体力も減つてくるものである。それに野生のポケモンとのバトルを極力避けていても、森の中には普通にバトル目録のトレーナーたちも紛れ込んでいたのでポケモンたちにもちよど休息が必要な頃合ではないだろうか。そう判断した私はモミさんからの提案を快諾し、軽食の準備をするに当たつて最初から外に出ていたコリンクだけでなくモウカザルとゲツコウガもボールから出してみる。すると、やはり珍しかつたのかモミさんはゲツコウガの方を不思議そうに眺めていた。

「この辺りでは余り見かけないポケモンね。もしかして、別の地方の子かしら？」
 「まあ、そんなところです。ちなみに彼はカロス地方で“しのびポケモン”的ゲツコウガ、と呼ばれていますね」

「へえ、そなんだけか彼、セツナさんとぴつたり雰囲気が合つてゐるわね」「……そう見えます？」
 「ああ、別に他の子たちが合わないとか、そういう話じやないのよ？ ただ、何となく……」

あんなに穏やかな目をしているのは、きっとあなたと一緒だからだと考えたら、それは
とっても素敵なことだなあと思ったの。私がかつてこの子とめぐり逢えたのと同じよ
うに、ね』

そう言つて、微笑むモミさんのすぐ傍には同じく嬉しそうに頷いているラッキーがい
て、私はどこかこそばゆい気持ちになる。同時にモミさんからそんな風に言われたゲツ
コウガも照れくさそうにしていた姿を、モウカザルとコリンクが揃つて微笑ましそうに
見ていた。

『あらあらまあまあ、ポケモンたちがいっぱいね！ ここにちは！』

『ここにちはー！』

『こつ、ここにちは……？』

『……』

『うふふ。コリンクちゃんとモウカザルちゃんは見たことあるんだけど、……めんな
さい。そちらのあなたは、何て仰るのかしら？』

『……、ゲッコウガ、だ』

『ふむふむ、ゲッコウガちゃんね。教えてくれてありがとう！ この森を出るまでみたい
だけど、私もモミちゃんも回復は得意だから、何かあればいつでも教えてくださいね！』

！』

モミさんがつくってきたサンドイッチに私が持っていたポフイン、それから森を歩い
て いる最中見つけたきのみなどを食べながら寬いでいると、いつの間にかモミさんの
パートナーであるラツキーがゲッコウガたちに話しかけていた。最も、そこからポケモ

ンたちの中で会話が盛り上がっていたのは主にモウカザルとラツキーで、コリンクは会話よりも食事の方に集中し、ゲツコウガに至つては目を閉じた状態で彼なりに休んでいるようだつたが。人がそうであるように、ポケモンたちもその性格によつてそれぞれ取る行動に差異があることを今更ながら実感していると、ふと隣から憂鬱そうな溜め息が聴こえてくる。

「モミさん、どうかしたんですか？そのポフインに何か問題でも……？」

「あっ、ううん！違うの、セツナさんがつくつてくれたポフインはすっごく美味しいのよ？ただ、……ちょっと、ね。思い出しちゃつたことがあつて」

「……？」

「ほら、あっちの方角。奥の方に、大きい建物が見えるでしょう？」

言われたとおりモミさんが指差した方向を注視すると、そこにはぼつんと佇んでいる屋敷と思わしき建物があつた。一見、何も知らなければ単に立派な屋敷という印象を持つだけで終わっていたかもしれないが、私はこの建物によつて彼女が憂鬱になつた理由を察する。

「この先にある洋館……誰も住んでいなくて、今では幽霊屋敷、つて呼ばれているの」「……幽霊、ということは、ゴーストタイプのポケモンも多く潜んでいそうですね」

「それもあるけれど、何でもあそこは本物の幽霊も出るらしい、つて一時期噂にもなっていたのよ。で、肝試しの場所としてわざわざあそこに行く命知らずなトレーナーも何人かいたそうだけれど……そういう人たちには皆、なぜか気絶した状態で翌朝館の外に放り出されていた、なんて不思議な話を聞いたことがあってね？まあ、単純に老朽化していて危ないから、今では立ち入るのにハクタイのジムリーダーさんからの許可が必要とされているみたい」

森の洋館、と呼ばれていたその建物は入ると流れてくるBGMが不穏だつたために、かつての私も苦手な場所だつたことを少し懐かしく感じながらも、予想通り簡単に入れる場所ではなくなつていてそれを頭の片隅に入れておく。あくまでも肝試しではなく、個人的に気になつていたことがあるためになるべく行つてみないと考えていた場所だつたが——モミさんの話を信じるとすれば最低限、ハクタイジムでのバトルに勝利しなければ交渉すら難しくなるかもしないと分かつただけ、私にとつては非常に有難い情報だつた。

「……それでも、ほら。仮に自分から入る機会がなくとも、そんな日く付きの建物もあると思つたら、ね？私とラツキーだけじや、この森を進むのは本当に心細かつたのよ。とはいえ、ここを通るのが現状私たちにとつての近道でもあつたから、最悪誰か通りかかるまで入口で待つていようかとも考えていたんだけれど……こうしてセツナさんたちと行動できて、今では自分のタイミングの良さに感謝したいくらい」

「ああ、そこは私も同意します。ポケモンたちがついてくれてはいるけれど、この森、昼間でも結構薄暗いところですし。もし一人で進むとなると、私もきつかつたかもしけません」

今日は天候も穏やかな方なのでまだましだが、ここで雨が降つてくれればより薄暗さも増していくだらうことを予想してみると、私にとつても今日彼女とともに行動出来たのは幸いだつたに違ひない。そんなことを思いながらサンドイッチに加えて、モミさんから保温瓶に入つていた紅茶のお裾分けもいただいていると、それまで沈黙を保つていたゲッコウガが突然立ち上がりなぜか私たちの周囲を警戒しはじめた。

「ど、どうしたの？」

『……何か、こつちに近付いている』

言葉が通じずとも、警戒するゲッコウガの様子を見てモミさんの表情が陰るのと怯えたコリンクがモウカザルの背中に勢いよく隠れたのはほぼ同時で、辺りは一気に緊迫した空気に包まる。近付いている気配とは人間か、ポケモンか。或いはそのどちらでもない存在なのか——モミさんから聞いた幽霊、という可能性も捨て切れずに思わず睡を飲み込んでいると、やがてその正体が私たちの前に揃つて姿を現した。

『お~い、一緒に遊ぼうよ~』

「ちよつ……も、もう、勘弁してええ……!!」

頭にヘアバンドを着け、緑のケープを羽織った女性が涙目で走る後ろを、にやにやと笑っているゴーストが楽しそうに追いかけていく。そんな予想外の光景を見せられて驚く私たちを他所に、この場においても唯一冷静だったゲッコウガは瞬時にとあるわざを繰り出した。

『ぐふうつ?!』

『……喧しい。そこで暫く、寝ておけ』

影を伸ばして相手の背後から攻撃する“かげうち”により、一撃で沈められたゴーストはそのまま気絶してしまつたらしく、ぴくりとも動かない。単にゲツコウガ自身わざに込めた威力が強すぎたのだろうか、とりあえずゴーストが瀕死になつていないことを見心の片隅で祈つていると、その頃膝を突いてしまつた彼女に慌ててモミさんが駆け寄る。

「大丈夫ですか、ナタネさん?!」

「あ、あはは……さ、流石の私も、ゴーストタイプとの追いかけっこは、堪えたよ……」

モミさんに体を支えてもらいながらも苦笑を浮かべ、肩で息をしている彼女こそ。実は私たちが次に挑もうとしているハクタイシティのジムリーダーことナタネさん、その人なのであつた。

「いやあ、君たちがここにいてくれなかつたら真面目に危ないところだつたかも……本当に、ありがとうね！」

モミさんとラツキーの助力もあり、出会つた当初より大分落ち着いたナタネさんは現在にこやかに微笑みながら、ハクタイの森出口に向かつて私たちと歩みを進めていた。流石ハクタイのジムリーダーと言つたところか、彼女の足取りは私やモミさんと比べて実に軽やかなものであり、傍から見ている分には全く迷いがないように見える。おそらく、今まで何度もこの場所へ訪れたことがある人なのだろう。ちなみにモミさんとナタネさんはそもそも顔見知りであつたらしく、久し振りの再会ということもあつて彼女たちの会話は随分と弾んでいるようだつた。

「ところでナタネさん、今日はお一人でこの森に？ジムはお休みなんですか？」
「ん？ううん、完全に休みつてわけでもないよ。一応時間を決めて、それまでに戻つてくるつて約束してから、ジムにいる皆に少しだけお留守番を頼んできたの。今日こそは、

例の洋館に関する噂を確かめよう！と思つて……で、ひとまず入口から様子を見ていたらさつきのゴーストが近寄ってきて、ね？余りに勢いがすごかつたものだから、思わず頭が真っ白になつた挙句、自分のポケモンを出すのも忘れてがむしやらに逃げてきた、つてところだね。いやはや……恥ずかしながら、ジムリーダーとしては情けないところを見せてしまつた

そこまで言つて苦笑いを零した彼女は、ふと私の隣で歩いていたゲツコウガの方をじつと見つめる。コリンクとモウカザルは移動時に一旦ボールへと戻したもの、また何かあつた時でもすぐ動けるように、という理由から唯一戻らずにいたゲツコウガは、自分を見つめてくる彼女を何とも訝しげに見ていた。

「……もしかして、さつきのゴーストを止めてくれたのは君、なのかな？」
「気付いていたんですか？」

「いやあ、雰囲気的に？何だか貫禄あつたからそうなのかな？つて……それにしても、」
一步踏み出した彼女はゲツコウガの目の前で止まる、真つ直ぐな眼差しで彼と、なぜか私を交互に見てから満足そうに頷いてみせる。

「うん。やっぱりいいねえ、君のその目！・静かだけれど、奥底には煌めいているものがある。さしづめ、その正体は……」

『……、……余計なお世話だ』

「おつと、気に障ったのかな？じやあその先は秘密つてことで」

少し気に食わなさそうに呟いたゲツコウガとは対照的に、ますますにこにこしているナタネさんはあつさり自分から引き下がると、再びモミさんとの会話に戻つてしまつた。一体何だつたんだろう、と疑問に思いながらゲツコウガを見てみると、ちょうど向こうも私を見ていたのか一瞬互いの視線が交わる。

(……そういうえば、花畠では結局あれから寝かせてあげられなかつたつけ)

ゲツコウガ自身はきつと気にしていないだろうけれど、クロガネジムでバッジを得てから大して彼を労われていなかつたことを思い出す。だから自然と、私たちの前を歩く二人がこちらを見ていないことを確認しながら、私の口からは咄嗟にこんな言葉が出ていた。

「ねえ。ゲツコウガには欲しいものか、私にしてほしいことってある？」

『……また唐突な質問だな』

「そう？ クロガネのジム戦に続いて、ソノオの花畠でも前に立ってくれていたでしょ
う？だから、出来る限りのことは叶えてあげたいなあ、と思つて聞いてみたんだけれど」

『……、……』

「……なあに？ そんなに考えこんじやうくらゐ、実はたくさんあつたの？」

冗談に近い私の発言を受けてなお、無言で深く考え込む彼との間に沈黙が流れる。け
れども気まずいわけでもなく、むしろそれほどまでに考えているゲツコウガを微笑まし
い気持ちで見守つていると、やがて彼からは返答、というより更なる問い合わせを貰うこ
ととなつた。

『……それは、今すぐ、でなくとも構わないのか？』

「うん？ 決めきれないなら、決まつた時に教えてくれてもいいよ」

『セツナに出来る限りのこと、だつたら……何でも？』

「そうね。勿論、度を超えない程度に、という前提ありきだけれど」

『……、……分かつた。だつたら今は、敢えて何も言わないでおく』
 「……あれ。まさか本当に、数が多かつた感じ？」

『ふふつ……、さあ？ 精々、そこも含めて今後のお楽しみ、と言つたところだな』

ナタネさんに話しかけられた時とは打つて変わり、若干機嫌が良くなつたらしいゲッコウガはそれでも周囲の警戒を怠ることなく、こうして私の隣で歩いてくれている。
 ……今は言わない、という返答を貰つてしまつたばかりではあるが、こちらから膝枕させてあげるくらいなら今夜辺り提案してみても構わないだろうか。そんなことを考えながら、前に行く彼女たちに続いて更に森の奥へと進む。幸い、未だ雨が降つてくる気配はないようだ。

「さて、と……」ここまで来れば、ハクタイシティはもうすぐそこ、なわけだけど

そのまま暫く歩き続けて森の出口——もとい、洋館の手前辺りまで何事もなく辿り着くと、先導してくれていたナタネさんが私の方へと歩み寄る。

「……？」

「セツナさん、だつたね。ここまで来る途中、モミさんから教えてもらつたんだけれど……君、あの洋館について少なからず興味があるんだつて？例の噂も、聞かされたところで余り怖がつていなかつたそうだね」

「えつ、……ああ、はい。可能でしたら少し、調べてみたいことがありますて」

「ふうん、そななんだ？」

まさか彼女たちが私のことを話していたとは露知らず、驚きながらも正直にナタネさんからの質問に答えると、彼女は尚も真正面から私を見つめ続ける。……調べたい、といふ発言から不審な印象でも持たれたのだろうか。そう考えると、これ以上自分から何か言うのは逆効果になつてしまいそうで、思わず口を噤んだまま私も彼女を見つめ返す。しかし、そんな微妙な状況に耐えられなくなつたのは意外にも、私より彼女の方が早かつたようで。

「……ふふつ、あははっ！ そんなに心配そな顔しなくても、大丈夫だよ」

怖がらせちやつたのならごめんね？ なんて言いつつ、につこりと微笑んだ彼女は懐か

ら何か取り出すと、丁寧に私の手を取つた上で持たせてくれる。見るとそれは古びた質感の鍵であり、どうやら久しく使われた形跡がないように思えるものだつた。

「そう。お察しの通り、これがあの洋館の鍵！本来なら、君がジムバッジを受け取つてから渡すべきものなのかも知れないけれど……そもそも、先にこちらが助けてもらつちやつたからね。それに、君は見たところ肝試しが目的の無謀且つ、やんちゃなトレーナーさんつてわけじやなさそuddash;だしこうだしき？だから今回、特別に貸してあげる。ただし、この鍵も一応私が管理しているものだから、うちのジムへ来た時に一旦返却してもらう条件付きではあるけれど……どうだろう？決して、悪い話ではないと思わない？」

言われたままに頷き、たどたどしくも彼女にお礼を伝えられたところで、それまで黙つて成り行きを見守つていたモミさんがほつとした様子で口を開く。

「良かつたわねえ、ナタネさん。あなたの苦手なお化け屋敷、きっとセツナさんたちだつたらしつかりと見てきてくれるんじやないかしら？」

「うつ……それ言つちやうと、私が無理矢理押し付けた悪い人みたいになるような……？」

笑顔から一転、困惑した表情になつたナタネさんのおかげで私たちの周囲にはやや和やかな空気に包まれる。しかしながら、実はゲッコウガの心中が全く穏やかではなかつたことを、残念ながらこの時の私には知る由もなかつた。

月の光さえ届かない、しんと静まり返った館の扉は長い間とともに出入りした者がいなかつた所為か、鈍い音を立てて閉まる。日が沈んで久しい時間帯、それもほぼ廃屋と化した建物で都合良く明かりがつくわけもなく、目の前に広がるのは当然真っ暗闇だけであつた。だがそれも、セツナが持つてきていた懐中電灯という道具によつて多少ましなものとなり、周囲を照らした彼女は二階の探索から始めていくことにしたらしい。玄関から入つてすぐ、右側の階段を選んだセツナ共々なるべく慎重に歩みを進めるも、不思議と他のポケモンが潜んでいる気配は感じられない。もしかすると、昼間俺たちが森で出くわしたゴーストと何らかの関係があつたかもしれないが、正直セツナに何ともないならどうでも良かつたので今は放置しておくことにする。それよりも、俺がさつきから気になつているのは――。

(意外だつた。てつきり、もつと怖がるものかと思つていたんだが……)

ゴーストタイプのポケモンだけでなく、幽霊とやらが出るらしいと聞かされても尚怯

えるどころか、平然とこの館に足を踏み入れた彼女はどうやら俺の予想以上に肝が据わっている人間だったようだ。そんな新しい発見について声を出さずに笑つていると、暗闇のおかげで俺が笑つてることに未だ気付けていないセツナは階段を上がりきつた先、見えた扉を何の躊躇いもなく開けた。いくつかの本棚が雑然と並ぶだけのそこにも、やはりポケモンの姿は見当たらなかつたが、それでも懐中電灯片手に彼女は部屋の隅へと歩いていく。

『……なあ、』

「ん？ どうかした、ゲッコウガ？」

『こんなところで、セツナは一体何について調べたいんだ？』

館に入る前に聞きそびれたことを尋ねると、片隅に積まれていた一冊の古びた本を手に取つた彼女は首を傾げながらも唸る。

「うーん……何て言えばいいのかな。敢えて表現するとしたら、痕跡、つてところかな？」

『痕跡？』

「そう。あるかもしないし、ないかもしない。はつきり言つて……これから探そうとしている私の行動そのものが、きっと自己満足に過ぎないだろうね」

『……？ 探し物にしては、随分ぼんやりとした代物なんだな』

「ふふつ、だから言つたでしよう？ 敢えて表現するとしたら、つて。ああ、ところでゲツコウガこそ、もしかしてこういうところは苦手だつた？」

『……いや。別に得意、というわけでもないが。仮に俺を引っ込めてお前一人でここを調べさせる、なんて状況では万一何があつた場合、間に合わないかもしないじゃないか。勿論、何もないに越したことはないが、こういう場所は奇襲にも絶好の機会だらうしな……まあ、警戒程度はしておいて損もあるまい』

内気なところがあるコリンクは言わずもがな、モウカザルとて好奇心旺盛と言えどこの不気味な雰囲気漂う館には自分から入りたくなさそうだった様子を思い出せば、幼さが残る彼らとの交代は少なくとも俺の中で有り得ない選択肢となつてゐる。そこも踏まえて、この館にいる間はセツナを一人きりにさせる気がないということを伝えてやれば、僅かな明かりに照らされた彼女がいつの間にか微笑みを浮かべていたことに気付いてしまつた。

『……、……どうした。俺は何か、おかしなことでも言つていたか?』

「ん?ううん、えっと……心配してもらえたみたいで、嬉しかったから。ありがとう。でも大丈夫、例え見つからなくとも一通り確認したら、切りの良いところで帰るからね。だからもう少しだけ、私に付き合つてもらえたなら嬉しいな」

ちょうど手に持つっていた本に視線を落としたセツナは、一瞬驚いた表情を見せるもどこか懐かしそうな表情で、優しく本の表紙を撫でる。そこに何が書かれていたのか、生憎、ポケモンである俺にはちつとも分からなかつたけれど。おそらくセツナの言う『痕跡』が存在する可能性が高いと判断した俺にはもう、無言で頷く以外に出来ることはなかつたのだろう。

: : :

(もし、……もしも。俺が、人間の男だつたなら、)

こんな場所まで、セツナと行動を共にする機会はそもそもなかつたかもしれない、と二階の長い廊下を移動しながらも考える。

夜、異性の男と二人きりになる、ということについて。聰い彼女であればなるべく回避する道を選択しているだろう。自分がポケモンだからこそ、こうして信頼されて今セツナのすぐ傍にいられるという事実は確かに嬉しくもあつたが——同時にほんの少しだけ、胸が痛むような何とも言えない感覚から逃げたくて、せめてもの足掻きに頭を振つた。それでも彼女が人間で、俺がポケモンであるという現実は一切変わらないしこの先も変わるものがない。正直、この暗闇に覆われた空間で、セツナが前を向いていてくれて助かつた心地さえしてきた。昼間に見られていたなら、間違いなく彼女は俺のことを心配していたに違いないから。

『その部屋は見ておかなくていいのか？』

「うん。一応、ちゃんと見ておきたい部屋の目星は付いているから」

端の部屋から少しだけ扉を開けて中を覗くも、目当ての部屋ではなかつたらしくその隣の扉に手をかけるセツナを見て思い起こされるのは、今日森で彼女から言われた『のこと』に他ならない。

——ねえ。ゲツコウガには欲しいものか、私にしてほしいことってある?

(……、あんな風に、言われたら。期待してしまうのは、果たして俺だけなのだろうか)

唐突すぎた提案のおかげで、その時思わず黙りこくれてしまつた俺にたくさんあるのか、などと聞いてきた張本人はとても楽しそうに笑つてくれたが。答はむしろ、その逆である。俺が欲しいと思つたものは最初から、ただ一つだけしかない。

しかし、……仮に己の願いを口走つたところでセツナを混乱させてしまうのも想像に難くない。だからこそ、折角彼女から貰つた貴重な機会を敢えてすぐに使わないことを選んだ。使うにしても、時と場合をよく見極めた上で——ただ、こうしてセツナの隣にいられるだけで十分なのだと、納得するに留めたことで今の俺と彼女の関係性に至るのだ。

「……あつ。この部屋、かも」

そういうしている内に、とうとう目当ての部屋を見つけたらしいセツナが先に奥へと

進み、そこに鎮座していたテレビの前へとしゃがみ込む。懐中電灯によつて一瞬照らされた真っ暗な画面の向こうに、何かポケモンらしき影が見えて俺が身構えるよりも早く、室内は眩い光に満たされていた。

036

——どうして、ボクはここにいるのかつて？

——あの子を待つていいんだよ。ここは、ボクとあの子が一緒に遊んだ、最後の場所だから。

——ボクが探している間にあの子が戻ってきて、行き違いになつたら悲しいでしよう？

——それに、……外も、怖いから。

——ここを出て、もしも誰かに捕まえられたら二度とあの子に会えなくなるのが、一番怖い。

——……大丈夫。分かつていてるよ、ヒトはボクらより忙しい存在だと。

——もう大人になつたあの子だつて、きっと、今を生きるので精一杯だろうから。

——それでもいつか、あの子がボクを思い出してくれることをボクは今でも信じている。

——だつて、どれだけ時が流れても。ボクとあの子は、ずっと、~~×~~[×]だもの。

——もう一度出会えたら……その時は、またボクと遊んでほしいなあ。ねえ、
。

：　：　：

「あつ……目が覚めた、かな？」

『……？』

「ゲッコウガ、気分はどう？大丈夫？」

突然の強烈な光に目が眩んだ自分は、どうやら今の今まで情けないことに気絶してしまっていたようだ。その証拠に、視界に映るのはどこか見覚えがある室内とセツナの心配そうな表情で、とりあえずここがもうあの館の中ではないということだけ一早く理解する。

『ここ、は……？』

「ハクタイシティのポケモンセンターだよ。ごめんね、流石に無理させすぎちゃったね」

その眩きに平気だ、と返そうとしたものの、自分の頭を優しく撫でている彼女の手が余りに心地良かつたので、ついそのまま黙ってしまう。そうして少し落ち着きを取り戻したところで、漸くセツナに膝枕されている体勢で寝かされていたことにも気付いたが、どうやらこちらを気遣ってくれている彼女の厚意に敢えて甘んじることにした。力尽きるほどに疲弊したわけでもなかつたが、この状態でセツナと視線を交わすのも、偶には悪くないものだ。

『そういえば、どうやつてあの館から出てきたんだ?』

「ん? 玄関まで直接案内してもらつたの。あなたを気絶させちゃつたお詫び、なんだつて」

『……やはり、あの部屋に潜んでいたのはポケモンだつたか』

「怒らないであげてね。向こうも、びっくりしただけで敵意はなかつたそうだから」

(確かに、もしもあちらに敵意があつたなら……俺とセツナは最悪、あの館で一晩過ごすことになつていたのかもしれない)

そんな想像をすれば今頃になつて寒気がしてきたが、不覚にも気絶した自分はさてお

き、とりあえずセツナが無事で良かつたと思うと自然に安堵の溜め息が出ていた。

『ところで、お前が探していた痕跡、とやらもそのポケモンに関することだつたか？』
「……、うん」

『……その様子だと、どうやら捕まえてはこなかつたみたいだが』
「うん。私はね、あの子に会えただけでもう、満足したから』

『そうか。まあ、それでお前の目的が達成されたのなら、俺にも特に文句はない』

本当は、なぜセツナが今までして調べようとしていたのか、元々の理由について全く興味がなかつたわけでもない。おそらくこちらが尋ねさえすれば、可能な限り彼女ながら答えてくれるだろう、という確信だつて持つていた。けれども、今日一日俺とセツナがふたりで歩いた距離はそれなりであり、他の人目もない空間でやつと落ち着ける現状を思えば、そんな些細な疑問をぶつけるという行いさえ無粋な気がして。つまりは文句がない、なんて啖呵も既に切つてしまつた手前、口を噤んだ俺はただ彼女からの温もりを享受するだけに留まる。

お願ひしたいことがあるんだ。聞いてくれる?』

『お願ひ、だと?』

「うん。えっと、ゲツコウガはあの子以外のポケモンに出会わなかつた、と思うんだけど

『……?』

「その、ね? 私、帰り際に幽霊っぽい人影を見掛けた気がして……今になつて、一人で寝るのは怖くなつてきた、というか……。それではまた、一緒に寝てくれないかなあ、と思つて」

『……つまり。あの館へ乗り込んだ時の度胸もどこかに行つてしまつた分、心細い、と?

「そ、そうだけど! 別に、そんなじつくり確かめるように言わなくともいいんじゃない?』

先程まで俺を心配していた時の表情とは打つて変わり、件の幽霊とやらを思い出したのか、若干涙目になつてゐるセツナの年相応な姿に思わず笑つてしまふ。それは決して、怖がつてゐる彼女を馬鹿にしているからではなかつたのだが、当の本人にはそれと然して変わらない反応をされたと思われてしまつたようだ。鞄からタマゴを取り出し

たセツナは、やや恨めしそうに俺を見つめながらも腕に抱いたタマゴに頬を寄せる。
 ……未だその中で眠っている存在が、もしも俺たちのこんなやりとりを聞いていたなら
 どんな風に思つたのだろうか。ふと、そんなことが気になつてしまつた。

『……く、くくつ。悪い、な。俺はてつきり、あの時何ともなさそくな顔をしていたから。
 お前は元々、こういつたものが平気な性分、なのかと……』

「……もう。その表情、絶対悪い、なんて思つてないよね？ ゲツコウガが駄目なら、今夜
 はコリンクにお願いしてみようかなあ……」

若干拗ねた様子でそんなことを呟くセツナは、続いてコリンクが入つてていると思われる
 ボールにも触れようとしていたが、結局その手が届くことはなかつた。なぜならば、
 途中で俺の手が彼女の腕を軽く掴んだことにより、行動そのものを阻止されてしまつた
 からだ。

『まあ待て。誰も嫌だ、とは言つてないだろ？』

「？ そうだけど……あなたには今日も頑張つてもらつた分、ゆっくり休んでほしいし』

『今日は思わぬところで不覚を取つたが、俺にとつてはこの程度、本来何てこともないん

だ。それにゆつくり休むべきなのは、お前にも言えることだ。それほどに闇が怖いと言うのならば……、……望み通り、一緒に、寝てやつてもいい』

照れくささゆえに少々言葉が詰まってしまったが、セツナはそんな俺を気にも留めず、普段と何ら変わりない笑顔で頷く。その微笑みを間近で見て、改めて彼女の身を脅かす事態が起きなかつたことに俺が安堵していたなんて——本人は、ちつとも想像していないだろうけれど。不思議と、今の自分たちはこのくらいの気安さがちょうど良いのだろう、とも思えた。

「ふふっ……やつぱり、ゲッコウガがいてくれると、頼もしいね」

間にタマゴを挟んだ状態で、俺と彼女は再びともに寝そべる。万一寝ている間に潰してしまわないだろうか、という空恐ろしい可能性を一瞬考えてしまったが、それもタマゴを優しく撫でるセツナを見ていれば無用な心配でしかなさそうだ。

『さあ、安心して休むといい。万一何かが現れようと、その時は俺が返り討ちにするだけだ』

「……お願いだから、ゲツコウガも今夜はちゃんと休んでね？」

じつ、と訴えかけるようなセツナの真っ直ぐな眼差しに、思わず息を呑む。

『……まあ、……善処、はする』

「だーめ。ちゃんと約束して?』

苦し紛れに答えたこちらの返事さえ、無防備な彼女はいつも難なく受け取ってしまうものだから。全く以て、この世はままならないものである。おそらく、いや間違いなく今夜も眠りに落ちるまで相当の時間がかかるだろうことを察し、溜め息を吐いていた俺は決して悪くなかった……と、思いたい。

036・5

洋館の散策、及びそこであの子と遭遇した結果、私が考えていた『ある予測』は概ね合っていたことが分かった。

即ち、ギンガ団のボスこと『アカギ』と『ロトム』というポケモンとの間には、かつて前者の人格や思考に影響を及ぼすほどの関係性があつたのではないか、ということ。そして、後者は洋館のテレビに潜んでいたあの子と見てほぼ間違いない、ということだ。

それらを知った上で、昨夜の私はあの子を【捕獲しない】ことを選択した。

仮に説得でも試みていたなら、僅かながら私についてきた可能性はあつたかもしだい。

しかし、少なくとも原作の登場人物であるヒカリやジュンたちと異なり、私は本来世界に存在していなかつたはずの者だ。

旅の最中、一組織のボスであるアカギと運良く遭遇する機会があるとも限らない。

それにアカギという人物は、少なくとも自分の目で見たもの以外をすんなりと信じるような、そういう生易しい人間ではなかつたようだ。

ならば、こちらが捕獲したあの子を見せたとして、敵意と警戒を抱かれるだけではないか？

そういつた考え方と、あくまでもあの場所で待つていたいと願うあの子自身の意志を尊重したかつたがために、話を終えた私はあの子と別れ、そのままハクタイシティへと向かつた。

……いずれ辿り着く結末は、私がかつて知つたものと然して変わらないかもしねない。

しかし、そこに至るまでの経緯を知らずにいるのと自ら知ろうとするのでは、意味合ひが全く異なつてくる。

ただ恐れているだけではいけない。

好奇心と向上心あつてこそ、人とは前に進めるものだ、と×も言つていたのだから。

(……、あれ?)

×、とは——果たして、誰のことだつただろうか？
 残念ながら、一瞬頭を過ぎつたその存在について今の私では何一つ、思い出せそうもない。

: : :

『好奇心と向上心あつてこそ、人とは前に進めるものだ』

遠い昔、この私にわざわざそんなことを言つてきた者がいた。

私はその発言に対し、自分が何と言つたかまでは覚えていない。

それどころか、碌に返事もせずその場を立ち去つた可能性の方がずっと有り得そうだ。

私の知る限り、かつての奴は単に凡庸な人間だつた。

夢だの、未来だの、そういういつた余りに不確定なものについて日々期待しながら息をしている——その辺を探せばすぐにでも見つかりそうな、ごくありふれたタイプの人間だった。

だから自身の×と巡り逢つた末に×も成し、当然の如く平穩な×を築いてみせた。

……しかし、それこそ凡庸だつたはずの奴が×に至る引き金となつたのは、何とも皮肉な話だ。

69

“感情の神”と称されたポケモンが棲む湖で見かけた、とある光景を今だからこそ思い出す。

白髪の娘と、寄り添っていたのはおそらく他地方に生息する、と思わしきポケモン。そんな彼らの、まるで互いの心を通わせているかのような場面まで記憶を遡ったところで……思わず、私は自身の拳を固く握っていたことに気付く。

「下らんな。心も、感情も、所詮はまやかしに過ぎないのに」

私が見たあの在り方は、ひたすらに受け入れ難いものでしかなかつた。
 そして、私がこれから創る新世界においても彼らは不要な異物でしかないと言えよう。

自ら関わるつもりがないのなら、それでも別に構わない。

だが、気付いた時には全てが手遅れとなつていいだろう。

そうして彼らの間に芽生えた如何なる情とて、結局は無意味だつたと悟るだけのこと。

「心が、感情があらゆる苦痛を齎すがゆえに。早急に、完全な世界を創らなければならぬ」

私はアカギ。

己が理想たる新世界のためならば、たとえ何者が相手になろうとも容赦はしない。

Chapter. 6 誰かが月を射らねばならない

037

しとしどと、朝から小雨が降っているハクタイシティの町並みを眺めながらジムまでの道のりを歩む。あの洋館を出てから昨夜、ポケモンセンターに辿り着いた際はすぐ真後ろの位置にギンガ団のビルがあつたことに少なからず驚いてしまつたが、流石に雨の中でも立ち尽くしている団員は現在見当たらないようだ。それどころか、この雨のおかげで自分以外に出歩いている人がいない光景にどことなく安堵する。

ソノオタウンの花畠では、コリングクを助けるために止むを得ずギンガ団のしたつぱたちとバトルすることになつてしまつたが、あの時は相手が二人だけだつたために私も大して恐怖を覚えていなかつた。しかし、よく考えてみればあんな大きさのビルも建つ程度にギンガ団の構成員が多く存在するならば、これからは極力目立つ行動を避けた方が良いのかもしれない。勿論、私について来てくれたゲッコウガたちを信じていかないわけではないが——万一、ギンガ団のポケモンたちに周囲を囲まれて逃げ道を失つた場合、トレーナーになつたばかりの自分に未だその状況を打破出来る判断力があるとは言ひ難い。それに、彼らにも無用な争いを経験させたいとは露ほども思つていない。この考

え自体、或いは生温いものかもしれないが、他者との対立自体避けるに越したことはないはずだ。そんなことを一人で考えながら歩き続けていると、いつの間にか今回の目的地であるハクタイジムへと到着していた。

「……やあ、昨日振り。君ならきっと、ここまで辿り着くと信じていたよ」

ハクタイジム内にいるトレーナーたちとのバトルも終え、一番奥まで進んでいくと笑顔でこちらを見据えていたナタネさんと再会する。外では未だ雨が降っていたが、草タップのジムだから室内は緑が多いこともあり、和やかな雰囲気につい気も緩んでしまった。

「その様子だと、どうやら納得いくまで調べられたみたいだね」

「ええ。昨日は、快く鍵を貸してくださいました」とうございました」

「どういたしまして！それで、ええつと……肝心の幽霊、はどうだつたかな……？」

借りていた洋館の鍵を返却すると、笑顔から一転、やや不安そうな表情でこちらを

窺っているナタネさんに何と答えるべきか少しだけ悩んでしまう。けれど、私は別に彼女を怖がらせたくてここに来たわけではないので、とりあえず不要な情報は省いた上で昨夜分かったことを伝えるだけに留めておいた。

「私が見た限り、あの場所はゴーストタイプのポケモンにとつて大事な住処となつているようなので、これまで通りそつとしておくのが賢明かと思います。もし興味本位で侵入した人がいたとして……その時は、仮に何が起きても自己責任、としか言えないでしようね」

「つまり、こつちが余計なちょっかいをかけない限りは、向こうからも手を出してくることがない、って認識でいいのかな?」

「まあ……そんな感じ、ですね」

「そつかあ、なるほどね。ポケモンの住処になつちやつているのなら、今後も私は見守るに徹するだけで良さそうだ。今更だけど、見てきてくれてありがとう! 本当に助かつたよ!」

こちらの話を聞いたことで、どうやら憂いが晴れたらしいナタネさんは徐に私の手を握ると、嬉しそうに何度も頷いてみせる。本当は、……ゲツコウガにも言つたように幽

靈に似た人影を見掛けたので、もしかすると本物の幽霊が未だ潜んでいる可能性はゼロだと言い切れなかつたのだが。わざわざ蒸し返すべき話題でもないので、敢えて無言のまま握手に応えた私のこの真意に幸い、上機嫌な彼女が今のところ気付く気配はなさそうだ。

「さて、と。雨が降る中、ここまで足を運んできてくれたそのお礼も兼ねて、早速バトルといこうか。あつ、ところでそつちの準備はもう万端かな？」

「はい。宜しくお願ひします」

「それは良かつた！ 実は君とのバトル、私も昨日から楽しみにしていたんだよね。だからこそ、今日は全力でお相手させてもらうよ！」

にここに微笑みながらも、その実眼差しに力が入つていたナタネさんは握っていた私の手から離れた後、審判役のトレーナーも呼び寄せてバトルの準備へと移る。そんな彼女といい、以前立ち寄つたクロガネジムのヒヨウタさんといい、この世界のジムリー・ダーを務める人々は今更ながら皆しつかりしていることに感心する。……前世で彼らの年代だつた頃、自分もこんなにしつかりしていたか、と聞かれたら正直余り自信がない。ポケモンが傍に居る、という環境そのものによる違ひも当然あるだろうが、それに

してもかつこいいなと思う。

「そうそう、始める前に一応ルール確認しておきましょか。まず、使用ポケモンは君の所持数に合わせてこちらも三体、で行わせてもらうね。お互いにバトル中の回復薬は使用不可、ポケモン一体につき使用するわざは最大四つまで！それと、挑戦者側はポケモンの入れ替えが可能な点も他のジムと共通だけど……ここでは、審判から声がかからない限り特に回数制限は設けていないわ。つまり、入れ替え自体を利用した余程めちゃくちやな戦術を用いるつてわけでもなければ、タイミングを見て自由にしてもらつて構わない、つてところね」

大体はクロガネジムの時と大差のない説明を聞きながら、入れ替えの回数に対して細かく制限があるかどうかは各ジムリーダーの個人的判断に委ねられているのかもしれない、ということを念のため頭の片隅に入れておく。今後役に立つか分からぬ情報だが、トレーナー同士で行われる比較的自由度が高いバトルとは異なり、ある程度のルールが設けられたジム戦に慣れるためにも思考することに決して損はないはずだから。

「外は生憎の雨模様だけど……そんなの忘れちやうくらい、楽しいバトルにしましょう

？さあ、私の一番手はあなたよ！ナエトル！」
「行つておいで、モウカザル！」

確認も済んだところで、随分と楽しそうなナタネさんの一声をきつかけにとうとうハクタイジムでのバトルが始まる。暫く会つていなが、彼女の一番手はジュンの最初のポケモンでもあるナエトルに対し、こちらはモウカザルに出てもらつた。相手がどんなわざを指示してくるのか分からぬが、まずは様子見も兼ねてこちらから近付くのは控えることにする。

「モウカザル、『ひのこ』！」

「うん、当然炎タイプのわざで来るでしょうね。でも……ナエトル、『こらえる』よ！」

草タイプにとつて、効果が『ばつぐん』だつた炎タイプのわざを受けても尚、彼女の指示を受けたナエトルが未だ倒れることはない。しかし全くの無傷、というわけでもなく、むしろナエトル自身は気合でどうにか立ち続けているように見えた。

「あと少しだけ頑張つて！『にほんばれ』！」

外の雨にも関わらず、ナエトルの『にほんばれ』によつて私たちの周囲だけが僅かに明るさを取り戻したが、私はこのタイミングで『にほんばれ』を指示した彼女に対する違和感を拭えずにいた。陽射しも強くなるこのわざを使えば、炎タイプのわざの威力も上げられる。それを、よりもよつて草タイプのジムリーダーである彼女が知らないはずもないのだが——敢えて指示してきた、となればそうするに値する大事な理由があるのだろう。だが、今は一旦理由を気にせず、まずは彼女の策略そのものをこちらでも利用させてもらう。

「モウカザル、チャンスよ！ナエトルに『かえんぐるま』！」

私の指示を聞き、すぐさま駆け出していつたモウカザルの『かえんぐるま』が直撃したことによつて、ナエトルは目を回しながらも倒れる。そんなナエトルを静かにボールへ戻したナタネさんは、特別傷ついた表情を浮かべているわけでもなかつたが、代わりに真剣な眼差しが私とモウカザルを真つ直ぐに見つめていた。

『にほんばれ』の効果もあるんでしようけれど、その子の炎、なかなかに強力ね。気を

引き締めて……次はあなたよ、チエリム！」

ナエトルの代わりに放たれたボールから、つぼみのような姿のチエリムが出てくる。しかし、今も『にほんばれ』の効果によつて降り注いでいた強い陽射しを受けた瞬間、そのポケモンはまるで花が開くように華やかな姿へと変じ、見ていた私とモウカザルの両方を驚かせた。

「驚いているみたいだけど、余所見していいのかしら？ チエリム、『ソーラービーム』！」

「しまつ……、モウカザル！」

私が指示を出すより早く、チエリムから放たれた『ソーラービーム』は容赦なくモウカザルへと注がれると、勢いに耐えきれなかつた彼の体が容易く宙を舞つていた。思わず悲鳴を上げそうになるが、モウカザル自身は器用に体勢を整えると再びチエリムと真つ向から対峙する。相性上は『いまひとつ』とされていても、『ソーラービーム』は草タイプのわざの中でも特に威力の高いわざだつたはずだ。炎タイプのモウカザルでも、受け止めるにはきついわざだったと思う。迂闊だつた。天候の操作と組み合わせて使

用するわざの脅威を、すっかり忘れきつていた自分自身に歯痒く思うが、それよりずつとモウカザルの状態が気に掛かる。

「……解説させてもらうと、チエリムはね、天気によつて晴れの時ならつぼみが開いた状態、それ以外の天気ではつぼみが閉じた状態になるの。更に、『フラワーギフト』という特性も合わさつてとつても可愛くなるから、まさに『にほんばれ』さまざま、つてところかな？」

ナタネさんの解説に耳を傾けながらも、私はモウカザルの背中から決して目を離さない。

「モウカザル、大丈夫？」

『うん。大丈夫。僕はまだ、平氣！』

声を潜めて尋ねた私に対し、当のモウカザルはこちらに振り返ると、力強く相槌を打つてくれる。その姿に、私は思い出す。反省は後でいくらだつて出来る。けれど、モウカザルと如何に目の前のバトルを乗り越えるか——それは、今この時にしか出来ない

ということを。

「……なら、もう一度『かえんぐるま』をお願い！」

「チエリム、『いつも通り』でいこう！『しんぴのまもり』！」

ナエトルと同じく、『にほんばれ』によつて強化されたモウカザルの攻撃を受けたチエリムもゆっくりと地面に倒れていつたが、それで安心するにはむしろ早すぎることを私とモウカザルはともに理解する。なぜなら、最後の三体目であるそのポケモンこそ、挑戦者である私たちにとつて間違いなく強敵と思われる存在だからだ。

「これで、当分状態異常は防げるはず。その炎は確かに脅威だけど、俄然やる気が出てきたわ……私たちだつて、まだ終わつてはいない。待たせたわね、出番よ！ロズレイド！」

ナタネさんのポケモンで倒れていないのは、今私たちの目の前に佇んでいるロズレイド一体のみとなつた。

対して私の手持ちは三体とも健在だが、タイプの相性で有利なモウカザルがチエリムの『ソーラービーム』で少なからず体力を消耗していることを考えれば、ロズレイドとのバトルを長引かせるのは決して得策だとは言えないだろう。モウカザル自身の状態にもよるが、もしかすると土壇場でゲッコウガの『あのわざ』に頼ることになるかもしない。何にせよ、相手側が最後の一體という状況だからこそ、これまで以上に用心して臨んだ方が良さそうだ。

「あらあら、さつきまでの勢いはどうしたのかしら？ 何だか悩んでいるみたいだけど……そつちが来ないなら、遠慮なく行かせてもらうわよ？ ロズレイド、『まもる』！」
「（！）モウカザル、行ってみましょう！ 『フェイント』で攻撃！」

「何っ?!」

こちらが考えていた隙を突かれ、先んじて展開されていた『まもる』は生憎『フェイント』によって無効化されるとともに、ロズレイドへのダメージも与える。『フェイント』自体はノーマルタイプのわざであるため『ばつぐん』の効果を与えられなかつたが、それでもこのわざが成功した、という事実は私とモウカザル両方に一種の高揚感を齎していた。しかし、そうして私たちが喜んでいた束の間でも、ジムリーダーたる彼女は決して対処を怠らない。

「まあ、それもそうか……炎タイプ以外のわざも、選択肢にあつて当然だよね。でも、こんなに近付いてくれたのはこちらにとつても好都合！ロズレイド、『しごれごな』だ！」
『ぐつ……！』

「モウカザル！」

「この至近距離で浴びる『しごれごな』を避けるのは、なかなか難しい芸当だろうね。さあ、続けていこう！『どくづき』！」

互いの距離が近付いたことを利用し、ロズレイドから『しごれごな』を浴びせられたモウカザルは咄嗟に避けることも叶わず、どうやらまひ状態に陥つてしまつたようだつた。それから休む間もなく、更に容赦のないロズレイドの『どくづき』も迫つてくるが、

ただでさえ体が痺れて動けないモウカザルには回避行動を取ることさえ出来ない。結果として、『どくづき』を受けてより苦しむモウカザルの姿を目の当たりにすることとなつた私は再び声を上げそうになるが、それを堪えながらも必死でどうすべきかを考える。

(ルール上、回復薬は使えないし、モウカザル自身が状態異常を治すようなわざは覚えていない。自力回復もまず難しそうだし、このままロズレイドの『どくづき』を受け続けいたら今度はどく状態になつてしまふ可能性だつて十分に有り得る……だったら、私は)

「モウカザル、……初めてのジム戦で、よく頑張ったね。ありがとう。ゆっくり休んでいて」

これ以上の無理はさせられないと判断し、未だまひ状態にあつたモウカザルを一旦ボールへと戻す。タイプ相性では不利、という共通点こそあるが、バトルの経験が他の二体と比べて格段に少ないコリンクは元々今回のジム戦を休んでもらおうと考えていた。だから、モウカザルの次に私がこの場で出すポケモンといったら——彼以外には、

有り得ない。

「行くよ、ゲツコウガ！」

「気を取り直し、モウカザルに代わつて今度はゲツコウガのボールを手に取ると、臆することなく姿を現したゲツコウガがこちらに背を向けた状態で佇む。昨日話しかけた時の内容を覚えていたからだろうか、ナタネさんはそんな彼を見るなり随分と嬉しそうに微笑んだ。

「うん、昨日も見ていて思つたんだけれど……やつぱり、素敵なポケモンだね。その強い眼差しから、君のことを強く信頼しているんだつてこと、こつちにもよく伝わつてくる！」

「……、ありがとうございます。そう言つてもらえると、私も嬉しいです」

「ふふふ。ロズレイドも、そんな君たちが自分の相手になると知つたから、かな？いつも以上に張り切つているみたい！」

思わぬところでナタネさんの発言を受け、たどたどしくお礼を伝えながら氣恥ずかし

くなつてきそうな気持ちを今はどうにか鎮める。ここからは背中しか見えないが、ゲッコウガが自分を信じていて、という言葉はモウカザルのことで気落ちしそうになつていて自分の心へ波紋のように広がつていくような気がした。そうだ、私を信じてくれる存在がいるのなら落ち込んでいる暇なんてない。私もまた、ここから報いなければ。

「よし、いい感じにお互い戦意も高まつてきたところで、バトル再開だね。それじゃあロズレイド、早速彼にも『しごれごな』をお見舞いしてあげて！」

「ゲッコウガ、『みずのはどう』で防御！」

再びロズレイドから放たれた『しごれごな』を、こちらも今度はただ受けるのではなくわざを出すことで相殺させる。まひ状態を狙つて振り撒かれた『しごれごな』は、ゲッコウガの周囲を包むように展開された多量の水滴とぶつかり合うことで十全な効果を発揮させるに至らず、その粉末は私たちの視界から溶けるかのように消えていった。

「おつと、防がれちゃったか。仕方ない、それならもう一度『どくづき』だ！」

『みずのはどう』によつて防がれてしまつたために、モウカザルの時と同じく『しごれご

な』でまひ状態にさせるのは難しい、と判断した彼女は即座に次の指示を伝える。無論私もゲツコウガへ指示するわざについて考えるが、ふと走り寄るロズレイドの片手に括りつける形で持たせられていたとあるものを見つけた時、敢えて無謀とも思われる言葉を口にした。

「…………めん、ゲツコウガ！そのまま『わざを受けて』！」

攻撃でも、防御でも、まして現在の状況に何らかの変化を齎すでもなく。傍目から見ればきつと滑稽だつた指示をされても、ゲツコウガは動じることなく私の言われたとおりにロズレイドの『どくづき』を受ける。一方、攻撃を指示したナタネさん本人はといえば驚いた表情で私の方を見つめてきたが、私自身は自棄になつたわけでも、勝負を諦めたわけでもない。

「この近さだつたら、あなたにも見えるかな？そう、そこで『どうぼう』よ！」

『どくづき』を放つため間近まで接近されたことを逆に利用し、それまでロズレイドが片手に隠し持つていた『オボンのみ』を奪いとることに成功したゲツコウガは、私が言う

までもなく一口できのみを平らげる。もしもロズレイドが『まもる』を使用していたら、『どろぼう』 자체を無効化されてしまう可能性もあつたので今更ながら危なつかしい作戦であつたが、あちらに回復の手段が残された上で長期戦に持ち込まれるのを避けるためにもある程度、ナタネさんの注意を私の言動で引き付けておく必要があつた。

(……そのために、ゲッコウガにも無理をさせたところはトレーナーとして褒められたものではないでしょうかれど)

反省と、彼に対する労いはこの勝負が終わつた後で存分に行うことを己の胸に刻み込みながらも、今はただ対峙する彼らを見据えることに集中する。

「……なるほど。ロズレイドに持たせておいたきのみを奪うことで、受けたダメージ分は回復出来ると見込んだからこそその指示、か。やれやれ、まんまと利用されちゃつたね」

よろけたロズレイドが体勢を整えるところを後ろで見守っていたナタネさんの目に、少なくとも怒りや焦りといった感情は見られない。その代わり、笑みを浮かべながらもいつしか真剣な眼差しを携えた彼女もまた、私とその前に立つゲッコウガを真っ直ぐ見

据えている。

「奪われちゃつたのは残念だけれど、それで決定打となるダメージを与えられたわけでもない。ロズレイド、下手な小細工はなしでいこう！全力で『マジカルリーフ』！」

これまで以上に声を張り上げたナタネさんの指示により、まさに気合を籠めた『マジカルリーフ』がロズレイドから放たれる。相手を追跡する上、攻撃は必ず命中するわざから逃れる手段なんて都合良く見つかりはしなかつたが、相手からわざを仕掛けられたこの瞬間はむしろ、私たちにとつても好機であつた。

「ゲッコウガ、ロズレイドに向かって走つて！」

「あの子の『マジカルリーフ』を受けながら、怯んでいない？何て、タフなんだ……！」

本来ならば、効果が『ばつぐん』である草タイプのわざを受けてゲッコウガが何の痛みも感じていなかはずがない。しかし、それでも私が何を伝えたかったのかおそらくは察していたのだろう、彼はやはり文句の一言も零さずロズレイドの元へと駆けていく。『まもる』で防御されてしまうよりずっと早く、それこそあつという間に距離を縮めながら

らも『マジカルリーフ』で傷ついたゲッコウガの頬もしい背中に向けて——私もまた、形振り構わず声を上げた。

「ナタネさん、私たちも全力で行かせてもらいます……！ ゲッコウガ、『れいとうパンチ』！」

瞬く間に冷気を纏つたゲッコウガの拳から渾身の『れいとうパンチ』が放たれ、明らかに動搖を隠せない様子だったロズレイドとぶつかり合う。『まもる』を発動出来ずとも、せめて少しでも自分の身を護るべく両手を前に出したロズレイドにはその勢いを抑えることさえ能わぬ。

結果として、『れいとうパンチ』を真正面から受ける羽目となつたロズレイドは、すっかり目を回した状態でナタネさんの足元まで盛大に吹き飛ばされていたのだつた。

「……お疲れさま。真っ直ぐにぶつかりあう、実に清々しいバトルだつたよ！」

氣絶したロズレイドを、ボールに戻したナタネさんの発言には、負けたトレーナーとしての悔しさではなく、こちらを劳わりながらも互いの健闘を称えるジムリーダーとしての意思が多分に込められていた。その言葉を受けて、彼女とのバトルが終わつたことを今になつて実感出来た私は漸く、ゲツコウガの隣まで歩み寄る。未だしつかりと立つてはいるが、思い返せばこちらが出した無茶な指示に何度も従つてくれた反動か、流石に疲れを隠せない様子のゲツコウガを見ていると心の奥底がじくりと痛んだ。バトルの最中、モウカザルがわざを受けて傷つく場面を見たこともあり、氣を抜けばこの場でうつかり泣いてしまいそうな勢いだ。そんな苦々しい痛みを必死に抑えていると、見かねたゲツコウガが私の頭を軽く撫でた後で自らボールの中へと戻つていく。……この一瞬、トレーナーとして私もまだあることを痛感させられたが、同時に優しい彼への感謝も改めて募らせることとなつた。

「さて、お節介ながら次に向かうジムのアドバイスとして……順当なのは、ヨスガシティのヨスガジム、と言つておこうかな。キッサキジムも近いけれど、あそこへ行くにはテンガン山と216番から217番にかけての雪深い道路もあるから、準備に万全を期してからの方がいいと思うね。シンオウの中でも、特に寒いし。ただ、ヨスガジムのジムリーダーは時々コンテストに出ているから、その関係で何日間かジムを空ける場合もある。そんな時は212番道路の先にあるノモセジムか、更に遠いけどいつそトバリジムまで行くのもありかも。ノモセには大湿原があるし、トバリなら『パートやゲームコナーもあるから……きっと、どちらに行つても暫くは楽しめるんじやない?』

フォレストバツジと『いあいぎり』のひでんマシンを渡した後、親切に他のジムに関する情報も教えてくれたナタネさんへ十分お礼を伝えてから、ハクタイジムの入口に向かう。今回バトルに出なかつたコリンクはともかく、まずはモウカザルとゲツコウガにゆつくりと休んでもらうことが必要だ。外に出れば、相変わらず小雨が降り続けていたがそう考えた私は雨も気にせず、真っ先にポケモンセンターの方角まで走つた。

：：

:

「あつ、お姉ちゃん！」

ポケモンセンターに着いてすぐ、彼らのボールを預けて一息ついていると少々懐かしく感じる声に呼び止められる。てっきりこの雨の中、わざわざハクタイの森を抜けてきたのかと思ったが、何日か振りに会えた妹のヒカリはどうも違うルートを辿ってきたようだ。

「クロガネシティから207番道路の方に向かつてみたら、サイクリングロード付近限定で誰でも使える貸出自転車があつてね。ハクタイシティ側の、サイクリングロードの入口にもいくつか置かれてあつたよ！」

かつての知識に従い、少なくとも自力で自転車が手に入るまでクロガネシティからハクタイシティには行けないと思い込んでいたのだが、実際はソノオタウンとハクタイの森を経由せずともここには辿り着けたらしい。ただ、私の場合は元々ソノオタウンの花畠とあの洋館にも行つてみたいと考えていたので、実質遠回りをしたことについての後

悔はない。ポケモンセンターのロビーで、適当に飲み物を飲みながらこれまでのヒカリの道中も聞いたところ、彼女自身も既に様々な経験をしてきたという。ちなみに私と別れてから、ヒカリがいざクロガネシティへ向かおうとした折、ちょうどナナカマド博士に言いがかりをつけていたギンガ団のしたつぱたちもコウキ君と二人で撃退してきたらしい。……姉としては、なるべく無茶をしないでほしいものだが。かくいう自分も、ソノオタウンの花畠でヒカリと似たような事態に見舞われたことを思い出すと、残念ながら強く注意することは出来なかつた。

「本当は、サイクリングロードの下にある噂の洞窟にも行つてみたかつたけれど……そつちは、天気が回復した頃に改めて行こうかと思つて。それで、ハクタイシティに来たんだ」

「噂の洞窟、の噂とは一体何を指していたのか。最初は分からなかつたが、にこにこと笑みを浮かべているヒカリを観察していればその内、自ずとあることに思い当たる。

「そういえば、……ヒカリは昔から、シロナさんの大ファンだつたものね」「うん！シロナさんとガブリアス、テレビで見てからずっとかつっこいいな～って思つて

！だから私も、いつかトレーナーになつたら一度はフカマルを育ててみたかつたの！」

ヒカリは私が知る限り、コンテストにも多少興味を持つていたが、そのコンテスト以上に興味津々なのは専らこの地方における現チャンピオンとそのポケモンたちのことであつた。家で過ごしている時も、時折テレビでチャンピオンのバトルが放送された場合には毎回欠かさず録画を行い、そうしてきらきらとした眼差しで彼らの雄姿を見つめるのが日課となつていたことを思い出す。

（確かここで、彼女にも出会えたはずだけれど……ヒカリ、喜びすぎて卒倒しないかしら）

大分朧気になりつつあるが、単に遭遇するだけでなくハクタイのジムバッジを得た後には彼女からポケモンのタマゴを託されるイベントもあった、ようと思う。その時、彼女の 大ファンだと自他ともに認めるヒカリは果たして大丈夫だろうか、と聊か失礼なことを想像していると、ポケモンセンターに一人の男性が入ってきた。茶色のトレンチコートを身に纏つた彼は、一通り周囲を見回して私たちを見つけると、なぜかこちらの方へと歩いてくる。

「？」

「……その白髪。君は、もしや……？」

「あつ、コトブキで見かけた変なおじさんだ！」

「むむっ?! 私は変なおじさん、ではないぞ！ 世界を股に掛ける国際警察、ハンサムだ！」

面識がない相手だったのでひとまず様子を窺つていると、何とも率直な呼び方をしたヒカリに向き直った彼が呆気なく自身の正体を告げる。……何とも元気よく発言してくれた彼には悪いが、自らをハンサム、と名乗るのはたとえコードネームだとしても大人の男性としてどうなのだろうか。とはいえ、子ども相手でも臆せず自己紹介している辺り、おそらく悪い人物ではないのだろうが。

「ところで、……万一一、人違いだつたら申し訳ないのだが。君はもしかして、ソノオタウンに現れたギンガ団を食い止めたトレーナーではないだろうか？」

「……、……あれを食い止めた、と言つていいものかどうか迷いますが。確かに、ギンガ団の人たちと遭遇はしました。ただ、最終的に彼らを連行したのはあの町のジュンサーさんであつて、私はむしろその場に居合わせていただけ、とも思えますね」

「ああ、突然不躾な質問をしてすまない。実は、ソノオタウンの花畠で君に大変感謝していた老人を見掛けたものでね。私もギンガ団の動向を探っているのだが、何はともあれ、善良なトレーナーがいてくれて本当に良かった、と個人的に思つていただけなんだ」

そのことを伝えたかった、と告げた彼に僅かでも警戒してしまつたことを申し訳なく思つたが、彼はそんな私を気にも留めずまたすらすらと言葉を語る。

「このハクタイシティには、ギンガ団の所有するビルがあるだろう？私はこれから、そこへ情報収集も兼ねてちょっと潜入するつもりだ……おっと、国際警察の私は何を隠そ
う、変装が大の得意だからね。無論、君たちの心配は無用だとも。

残念ながら、未だ連中の目的そのものが掴めない手前何とも言い難いが……極力、ギンガ団の奴等に絡まれないよう、注意することだ。君たちにポケモンがついているのと同じように、奴等もまたポケモンを連れている。ポケモンがいるとはいえ、大人と子ども、という視点でみれば単純に力の差があるからね。なるべく人気の少ない道や夜の移動を避けるだけでも、自分の身を護る一步に繋がる、と私は思うぞ！」

そこまで言い切った彼は、私とヒカリの返事も待たずさながら嵐のようにポケモンセ

ンターを去ってしまう。結局、ポケモンの回復もしないままギンガ団のテリトリリーに向かつた彼が、なぜここに訪れたのか理解が及ばなかつたが、彼の背中を見送るヒカリはぽつりと、ただ一言呟いた。

「やつぱり変、というか……何だか、愉快なおじさんだつたね？忠告はありがたいけれど」

……子どもの目とは、どんな世界であろうと斯くも厳しいものらしい。

040

ヒカリや自らをハンサムと名乗る彼に出会った後、ポケモンセンターでゆっくり休息をとつた私たちは天気が回復してきたこともあり、翌朝ヨスガシティに向けて出発する。ヒカリの助言通り、サイクリングロード入口付近に置かれていた貸出自転車に乗つてクロガネシティ方面へ下つていけば、あとは207番から208番道路にかけて真つ直ぐ歩いていくだけなので然程時間もかからないはずだつた。サイクリングロード真下にはヒカリが行きたがつていた洞窟も存在する206番道路が広がつていたが、私は彼女ほどフカマルを捕獲したいという気持ちが強くなかったこともあり、今回敢えてそこに立ち寄るのは見送つた。元々急ぎの旅ではないが、ヨスガジムのジムリーダーに近々ジムを空ける予定があるのか、そちらの情報を確認してからでも寄り道は可能だと考えていたからだ。しかし、今になつてむしろ寄り道しておくべきだつたのかもしれない、なんて無駄な後悔をしている。その理由は、私の目の前に存在する『ある人物』とここで遭遇してしまつたことにある。

「……君は、世界の始まりを知つていてるか？」

想定外の遭遇で動搖する私を他所に——アカギはただ、静かな口調で語りかける。

気にしていないのか、或いはテンガン山内部におけるこの薄暗い空間ゆえにそもそも私の様子に気付いていなかつただけかもしれないが、少なくとも未だあちらからの敵意は感じない。安堵するには早すぎるが、同時に彼の前で取り乱すのも極力避けるべきである、と直感した私は未だ一言も口を挟まず、彼が語る内容を聴き取ることだけに集中していた。

「このテンガン山は、シンオウ地方始まりの場所。そういう説もあるそうだ。出来たばかりの世界では、争いごとなどなかつたはず……だが、どうだ？人々の心、というものが不完全であるために皆争い、世界は駄目になつてゐる……實に愚かな話だ……」

周囲が薄暗いこともあり、彼がその言葉通り世界の現状を憂いでいたのかどうか、表情もよく見えなかつた私には分からぬ。ただ、生前の記憶に誤りがなければ、ここで出会つた時点でバトルすることはなかつたはずだ。この一方的な会話が終わつたら、彼は一人何処かへ去つていくばかりだと——そう信じきつていた私に対し、現実は、その結末さえも覆す。

「……、折角の機会だ。ここで一つ、与太話でもしてやろう」

相変わらず敵意は向けられていない代わり、話が“続いてしまった”ことにいよいよ驚きを隠せない。テンガン山に生息するポケモンたちもちよど近くにいなかつたのか、おかげでこちらが息を呑んだ音もアカギには聞こえてしまつたようだ。覚えていたかつての結末が、その記憶通り上手くいくとは限らないと考えることもあつた。だが、あくまでも考えるだけだつたがために、何とも言えない恐怖で身が竦む。

これから一体、何が始まるというのだろう。

「そう怯えなくてもいい。ここには、私と君以外の誰一人も潜んでおらず、まして私が君相手に何か危害を加える予定も無い。これから聞かせるのは、言葉通りただの与太話に過ぎないものなのだから」

「！」

「とは言つても……『そちら』に警戒されるのは、致し方ないことか」

『……』

「……、……ゲッコウガ、」

「ふふ。逃げるどころか、一歩も退く気がなさそうな辺り。余程君のことが大事らしい」

アカギに向けられる視線から庇うかのように、無言でボールから出てきたゲッコウガは凛とした佇まいでの前に立っていた。

……何一つ言えずにいたのに、どうして、彼はいつも頼もしく私を助けてくれるのだろう。その答に思い至る前に、アカギはゲッコウガを一瞥して尚自分のポケモンを出すこともせず、彼曰く与太話とされるものを私たちに向けて語りはじめる。

「ある時、裕福な家庭に生まれ育つた男がいた。

裕福な環境ゆえに、ただ生きていくだけならば一生困ることはなかつただろう。だが、男はいつからか常人には思いも寄らぬ、一つの夢を望むようになっていく。

人とポケモン、この世界に存在する二つの生命を仮に“融合”させられたのならば——その時、我々にどんな可能性が齎されるのか？

……言葉通り、大層な夢だと思うだろう。

ほとんどの人間が“有り得ないこと”だと、真っ向から否定したものを、その男だけは長年追い求め続けた。

どれだけ周囲の人間が離れようとも、ずっと夢を見続けた。夢の結末を知る、という

ことに大層執着していたのだろうな。

最も、ごく少数だが夢を否定しなかつた者もいた。男の家族、というやつだ。血と絆によって生まれた繋がり……それもまた、かつての男を支える支柱だった。悍ましい真相を知る、その時まで。

愛するがゆえに、一度抱いた憎悪はより深まる。

愛していたがゆえに、人は容易く狂人へと至る。

ああ、そうとも。心というモノがあるからこそ——悲劇は、この世に幾度も生み出される。

その度、我々は性懲りもなく己が身に降りかかった苦痛に苛まれる。

他者に裏切られ、挙句の果てには絶望の底へと容赦なく突き落とされるのだ！

私は……私には、そのような世界が今でも間違っていると思えてならない……！」

アカギが与太話と言つたとおり、それは余りに突拍子もない話だつたにもかかわらず、自ら語る本人の声音はいつそ熱が籠つていくようにも感じられる。私以外の誰もが聞いたら普通は空想だと思うだろう、そんな狂つた夢について——不思議と、私は嫌悪するどころか異質なことに“受け入れて”いた。おかしい。そんな人物と、面識なんて全く無いはずなのに。

「“時よ止まれ、おまえは美しい”……これは、いずれ自身を裏切る妻と子を得て幸せの絶頂、とやらを味わつた男が遺した言葉だという」

どこか、それに覚えがあると確信している自分自身は。

この“肉体”は——いつ、どのように形作られたのだったか？考えた瞬間、頭が割れるような痛みに襲われる。知つているはずでも今の自分には思い出せない、何一つとして。

「うつ、……！」

『?!セツナ、どうした？しつかりしろ！』

「この私の誘いまでも断り、ただ最期まで、一途に己の夢を見続けてきたその男は——かつて“ファウスト”と、呼ばれていたのだ」

痛みに耐えられず、その場で蹲つてしまつた私に呼びかけるゲツコウガの声を遠く感じる。薄く微笑むアカギとは裏腹に、私の中ではいつまでも、警鐘が鳴り響いていた。

040・5

「いざれ君も、私の語つた者が味わつた苦しみを理解したその時、一体何を思うのか？あの男のように、奴自身にとつては地獄そのものだつた世界を真つ先に呪うのか、それとも……否、私がここで断言するのは止めておこう。幸か不幸か、私にもまだ数多くのやるべきことがある。せいぜい、それが全て終わるまでによくよく考えておくことだ。

……私が創生する、心なきゆえに安寧を齋す理想郷と。心あるがゆえに、誰もがいつでも苛まれる世界。どちらが真に、必要とされるべきなのかを」

結局、アカギは“ファウスト”という人物について語ることで一通り満足したのか、蹲つた私に最後まで敵意を見せることもなくテンガン山を去つていつた。なぜ私相手にあのような話をわざわざ聞かせたのか、その真意が掴めずただ困惑するばかりではあつたが、ひとまずこのまま居座つたところでどうにもならないのは私自身にも良く分かつていた。アカギがいない今、突如として生じた頭の痛みも多少和らいではきたものの、早く明るいところに出なければいつそのことどうにかなつてしまいそうだ。そんな恐怖から何とか立ち上がつてはみたが、直後にふらついた自分を支えてくれたのは他で

もない、私の傍に居てくれた彼で。

「つ、ごめんね、ゲツコウガ……ありがとう」

『……』

「？……えっと、歩くくらいなら大丈夫だから」

もう支えなくとも平気だよ、と言いかけた自分を遮るかのように持っていた鞄が奪わ
れた後、あくまでも無言を貫くゲツコウガに手を引かれて歩き出す。

(……、怒つて、いるのかな)

そうだとすれば、きっと心配させたことが理由としては大きいのだろうけれど。何と
なく、自分から言葉をかけるのも憚られて歩みを進めながらも俯く。すると、そんな私
に応えるかのように一瞬だけ、強く手を握られた気がして——わけもなく、泣きそうに
なった。

：

：

『わー！すつごい、迫力のある滝だねー！』

『これが、滝……？わたし、初めて見たわ』

『そうなの？まあ、僕も今までそんなに見たことないんだけどさ。ああいう滝の下つて、

兄さんが修行とかしていてもそんなに違和感なさそうだよねー』

『確かに。夜に颯爽と出てこられたら、ちよつとだけ、怖いかも』

『あはは、それはきっと僕が見てもびっくりするだろうね！……、……ところで、コリン
ク。あのふたり、この後どうしたらいいと思う？』

二つ目のジムを乗り越えてきた僕たちは現在、テンガン山の一部を通った先、208番道路と呼ばれる場所の片隅で各々休憩している最中だった。僕とコリンクは橋を渡つて暫く、滝が流れる雄大な景色を仲良く眺めていたのだけれど、問題は僕の言つた『ふたり』——セツナと兄さんが、お互に對してほんのちよつとだけ、ぎこちなくなつているところにある。

『うん……どつちも、自分から何かした時に相手を驚かせたり、もしくは拒まれたりされるのが怖い、と思っているのかもね』

コリンクのその意見には僕も概ね賛成であり、その上でのふたりをどうしたものか、なんてぼんやりと考えてみる。セツナは自分が兄さんに迷惑をかけた、とでも思つてしまつたのか、テンガン山を出てからは申し訳なさそうな表情を浮かべていたんだけど。対する兄さんは決して怒っているわけではなく、自分がセツナの手を引いて歩く、なんて行動を無意識でとつていたことについて動搖していただけのようだ。

(……ヒコザルだった頃は、まさかね、と思つていたけれど)

兄さんがセツナに抱く想いは、僕やコリンクのそれとも違う種類なんだろうなあ、ということを、今日の僕は何となく察していた。セツナもまた、兄さんのことを全く意識していないわけではないだろうが、彼女の場合は仲間として向ける『信頼』の比率が高い所為でそもそもそういう可能性に気付けていないような気がする。要するに、ふたりの関係性を一言で表すとすればもどかしいのだ。互いを気遣い、距離感を保つてゐるのならば、なおさら。

『どりあえず、折角次の町ももうすぐなのにふたりがあのまま、つていうのも嫌だから……』『は僕が、ふたりを何とかする番、つてことなんだろうね！』

『……モウカザル、一応言つておくけれど、何かするにしてもほどほどにね？』

『ふふふ、大丈夫！少なくとも、悪戯するつもりじやないから』

心配そうに言うコリンクを他所に、一つ決意した僕は取り急ぎ橋からセツナの元へと駆け寄る。テンガン山入口付近に腰掛け、どうやら地図を見ていたらしいセツナは駆け寄ってきた僕に気付くと若干微笑んでくれたが、隣に佇む兄さんとの雰囲気は今も改善されていないようだ。それも分かつた上で——僕は彼女の胸元目掛け、思い切つて飛び込んでみた。

「わっ?!……ど、どうしたの、モウカザル。何かあつた？」

突飛な行動をとった僕を叱るでもなく、驚きながらもしつかり受け止めてくれたセツナはやつぱり出会った時と変わらず優しくて、人知れずそのことにほつとする。軽く抱き着いたままセツナを見上げてみると、視界の隅にはちょうど目を見開いて固まつた状

態の兄さんも映つてはいたが、そちらのフォローはまた後でさせてもらうことにして。兄さんには悪いが、僕から先にセツナへ伝えておきたいことがあつたから。

『強いて言えば、セツナが元気なさそうに見えたから……僕なりに元気付けたかつた、つてだけ！』

「……え、」

『難しいことは、正直僕にもよく分からぬけれど。誰が何を言つてきても、僕はセツナと一緒に旅が出来て楽しいし、嬉しい、つていつも思つてゐるよ。それはきっと、コリンクや兄さんも同じさ！もしもセツナのことが嫌いなら、皆今頃ここにはいなかつたはずだもの』

目の前の彼女を嫌いになる、だなんて。

……それこそ、僕にとつても一番考えたくはない可能性だつたが、敢えて言葉にした後で再び兄さんへ目を向けてみると、やつと硬直が解けたらしく何度か頷いてくれていた。そして僕の後を追つてきたのか、戻つてきていたコリンクもセツナの膝元に身を寄せるなり喉を鳴らしてさり気なく甘える。

『まあ、兄さんと比べたら、まだまだ頼りないかもしけないけれど……これからも、一緒にいることなら出来るからさ。ほら、この体勢なら暖も取れるし！僕って結構お得意やない？』

『……でも、進化して同じことをやろうとしたら、今度はセツナが火傷しちゃう気がするわ』

『確かに……』

『うぐつ…………コリンク、それは分かっていても敢えて言わないでほしかつたかな』

……

「……、ふふ。ありがとうね、モウカザル。その気持ちだけで十分だよ」

三者三様な僕らの反応を見ていたセツナは、僕の思惑通り少しは元気になつてくれたのだろうか。

僕とコリンクの頭を撫でると、穏やかに微笑んでいたが——肝心の、兄さんが僕らへ羨ましそうな視線を向けている意味にはやはり気付いていない辺り、ふたりの距離が縮まるまでまだまだ時間がかかりそうだ。そう考えた僕は溜め息を吐きそうになりながらも、このささやかなひとときを皆で一緒に楽しんでいた。

Chapter. 7 硝子の靴は拾わない

041

テンガン山でアカギと遭遇する、という一種のハプニングはあつたものの、その後通過した208番道路では特に何事もなく、私たちは次の目的地だつたヨスガシティへと到着した。このシンオウ地方において、ヨスガシティが毎年一番住みたい町に選ばれている理由としては勿論ポケモンコンテストが開催されている場所、ということもあるが、やはり他の町と比べて圧倒的にバリアフリー化が進んでいることも大きいと言えるだろう。

ちなみに今年一番住みたい町で二位に選ばれたのはトバリシティ、三位に選ばれたのはミオシティだったことも未だ記憶に新しい。ミオシティとは僅差で今回四位だつたナギサシティも、テレビで見かけた夜景はなかなか綺麗なものだつたが、あちらはジムリーダーによるジム改造で度々停電が起こっているため贊否両論の意見も寄せられているようだ。その話はさておき、ヨスガシティに着いた私たちはこの町を散策する前に、まずはヨスガジムがどんな状況であるのかを確かめにいくこととする。途中、町の至るところでベビーカーを引く母親の姿や、穏やかな表情で歩いているお年寄りを多く

見掛け、町全体に漂うどこか和やかな空気に流石は一位に選ばれる町だな、と感心しながらジムを訪れた私が見たものは。

“ポケモンコンテスト開催準備に伴い、二週間ほどジムを休業させていただきます”

そんな文章が記載された張り紙と、当然ながら開く気配は微塵も感じられない、閉ざされた扉だけであつた。

(……どうしよう。そんなに急いでもいいけれど、二週間なら先に別の町でジムに挑戦してきてもいいのかな?)

それこそ、ゲーム中ではいつ、どんな時間帯でも各地のジムやポケモンリーグへ挑戦可能だつたものだが、現実であるこちらでは当然そういった都合の良いことが起きるわけもない。とはいっても、現在のヨスガジムが実質休業状態だと知つてしまつた以上、これからどのように過ごすべきかを決める必要はあるだろう。そこまで考えた私は一旦踵を返そうとするも、ちょうど通りがかった『とある人』に呼び止められたことで足を止める。

「あら、セツナじゃないの！久し振り！」

「アヤコさん、どうしてここに……？あつ、もしかして、コンテスト関係ですか？」

「うふふ、その通り！二人とも旅に出ちゃつたから、家にいるとちよつと寂しくて……というのもあるけれど、コンテストって聞いたら何だか、居ても立つてもいられなくてね？思い切つて、ヨスガシティまで遊びにきちゃつた！」

久し振りに出会ったアヤコさんは、そう言つてにこにこと笑いながら私の方へと駆け寄る。私の手持ちには飛行タイプのポケモンがおらず、そもそもいたとしても『そらをとぶ』が使えるわけでもないので自力でフタバタウンへ戻るにはもう少し時間がかかりそうだが、それにしても彼女が元気そうで良かつたことに内心安堵する。

「この間の電話でも伝えたけれど、ソノオタウンのお花、届けてくれてありがとうね。お母さん、うつかり玄関先で泣いちやうくらい嬉しかつたわ！」

「ふふ……喜んでもらえたのなら、良かつたです。そういえば、最近ヒカリと連絡は取りましたか？」

「うん。一昨日くらい、だつたかしら？その時ハクタイに着いたばかりだつたらしいけ

れど、ジムバッジを貰えたらフカマルを探しにいくつもりだから、長くて一週間くらいは連絡がとれなくなるかも、なんて言つていたわねえ。駄目元で、ポケモンコンテストがそろそろ始まるけれど？つて、さり気なく誘つてみたんだけ……フカマルが私を待つていてるから、今年は遠慮しておきます、とか言つて断られちゃつた」

まさか、あんなにフカマルを追い求める子になるなんて……と呟いていたアヤコさんだつたが、少し間を置いて私を見つめた彼女は途端に目を輝かせはじめた。

「？　えっと、アヤコさん……？」

「……いやだわ、私つたら。ヒカリが駄目でも、今ここに逸材がいるということにどうして今の今まで気付けなかつたのかしら？」

がしつ、と強くアヤコさんに手を握られながら一気に詰め寄られて焦りはじめる私を他所に、残念ながら火がついたらしい彼女の勢いは全く止まりそうにもない。

「お気持ち嬉しいんですが……その、コンテストについては正直、余り詳しくなくて、」「大丈夫！誰にだつて初めてはつきものよ。それには、実はヒカリに声をかけたのは、

元々あの子と一緒にやつてみたいことがあつたからなの。代わりに頼めそうなツテも皆無、つてわけじやないんだけど……ほら、私たち、親子だし。一緒にやり遂げられたなら、きっと素敵な思い出になること間違いなしだわ！」

「は、はあ……」

「うふふ。先に言つておくと、これから順次始まるノーマル・グレート・ウルトラランクのコンテストが終わつて……そうねえ、大体今から一週間後くらいに開催されると思うマスター・ランクの前座として、実はエキシビジョンマッチがあるのでよ」

「エキシビジョン、マッチ……？」

聞き覚えがない単語に首を傾げていると、コンテストについてはベテラン経験者であるアヤコさんが丁寧に解説してくれる。

「そうそう。いつも公に募集しているわけじやないんだけど、大体は今までマスター・ランクに出たことのある人が自主的に立候補してくれる感じ？ある意味、ボランティアに近いかも。これは通常のコンテストと違つて、最初からビジュアル審査とダンス審査が省かれていて、単純にポケモンの演技だけでお客様や審査員……つまりは、マスター・ランクを控えてうんと熱気が高まつた会場の雰囲気を更に盛り上げてもらう、つてこと

が一番の目的！

基本的に、エキシビジョンマッチは二人のトレーナーがそれぞれ一体ずつ、ポケモンを出してバトル形式で魅せるか、バトルに拘らず互いに協力して統率のとれたパフォーマンスを魅せるのも良し、とされている。セツナはコンテスト未経験だけど、私と一緒に申込しておけば然して文句言われないと思うわ。審査員の人たちとは元々顔見知りだし、何より」

「な、何より……？」

「私……セツナに一度、着てみてほしいドレスの候補、たっくさんあるんだから！うふふ、あなたは一体どんなドレスが似合うのかしら……ああっ！やつぱり、実際この目で見てみないと分からないわね！王道のプリンセスラインにAラインは勿論、マーメイドラインやタイト系でもぐつと大人っぽくて可愛いでしょうし、いつそのこと、意外性を狙つて膝上のミニ丈というのも悪くなさそうだし……うくん、迷う！ものすごく、迷うわ……！」

「……（まだ一緒に出ます、つて返事したわけじゃないんだけどなあ……）」

やはりヒカリに断られたのが少なからず残念だったのか、ますますヒートアップしていく様子のアヤコさんに思わず苦笑が漏れてしまつたが、ささやかながら親孝行として

偶には彼女の提案に乗つてみるのもありかもしれない。衣装云々に関してはともかく、一旦コンテスト会場に行つて雰囲気だけでも知りたいな、と思ひながら、今暫く私はアヤコさんの熱弁に付き合わされるのだった。

042

仮にアヤコさんと一緒に、彼女が熱を込めて語ってくれたポケモンコンテストのエキシビジョンマッチに出るとしても、そもそも現在申込 자체が有効なのかどうかを確かめなければならない。

そう私が提案すれば、アヤコさんは少々残念そうな表情を見せはしたものの、確認ついでに久し振りに会う友人にも挨拶してくると言つて颯爽とコンテスト会場に向かつていってしまった。流石に日が暮れるまで、という長時間には至らないだろうが、つい先ほどヨスガシティに到着したばかりということもあり、私はこの場からすぐ近くにあつたふれあい広場の方へ一旦足を向けてみる。ここは極端に大きな体格の……例えば、ギヤラドスやイワーノクといった大型のポケモンでもなければ、誰もが自由にポケモンたちと触れ合える、まさに憩いの場として利用出来る施設のようだ。

記憶の片隅では、確かにここで連れ歩けるポケモンは一体だけだったはずだが、入場に際して受付のお姉さんにモンスター・ボールを渡してもゲッコウガを連れていることに若干驚かれたくらいで、特に何の問題もなく全てのボールを返却してもらえた。もしかすると、一体だけというのは単にゲーム上の仕様だつたのかもしれないなと思いながら

ら、私はボールの開閉スイッチを押して皆を外に出してみる。207番道路から208番道路までの道すがら、出会ったトレーナーたちと何度かバトルする機会もあつたために皆が疲弊していいなか実は心配だつたのだけれど、相変わらず静かに佇んでいるゲッコウガはさておき、きらきらと目を輝かせて周囲を見渡しているモウカザルやコリンクの様子を見て内心安堵する。

『わあ……あの洞窟みたいなの、何だろう……ねえねえ、セツナ。ちょっとだけ、この辺り探検してきてもいいい？』

「うん。私が見えなくなるくらい、遠い距離じやなればいいよ』

『やつた！じやあさ、コリンクも。良かつたら一緒に行かない？』

『うん！探検……楽しみだね！』

聞いていて何とも微笑ましい会話を交わしながら、モウカザルとコリンクは早速探検を開始するべく、仲良く揃つて広場の片隅を駆けていく。対して、ふたりについていかなかつたゲッコウガは備え付けのベンチに腰掛けると、無言で私に視線を向ける。直接懇願されたわけでもないが、何となく、シンジ湖で一緒に過ごしていた時のように隣に座らないのかと言われたような気がしたので、私も同じように腰掛ければ漸く彼が口を

開いた。

『やれやれ。あいつらは本当に、元気だな……』

「まあ、初めて来た場所だからね。わくわくしちゃうのも仕方ないことなんじやない?
……ところでゲツコウガは、あの子たちと一緒に行かなくて良かつたの?」

『あいつらと違つて、俺は余り人目につくのが好きではないし……それに、お前を一人に
させるわけにもいかないだろう。あの男のように、ここでもお前に妙な話を持ち込む輩
がいない、とは限らないからな』

ゲツコウガの語るあの男、とは十中八九、テンガン山で遭遇したアカギのことには違
ない。確かに、私たちと同じようにこの広場に訪れている人やポケモンたちの姿は少な
からず見えるが、皆それぞれ寛いでいるだけであつてそもそも警戒する必要性はないよ
うに感じられた。それでも彼だけ気を抜かず、こうして今も私の傍についていてくれる
のはやはり私を心配してくれているからなのだろう。そんな彼の態度は、客観的に見れ
ば所謂過保護、というやつなのかもしれない。それでも、私は一緒に居てくれることが
とても嬉しかった。そして心配をかけさせてしまふ自分自身、更に時間はかかるかもし
れないが、もつとしつかりしなければならないとも思つた。

「ありがとう。心配かけさせて、ごめんね？」

『別に謝らなくてもいい。それより、体の調子は……あれから何ともないのか？』

「ああ、うん。今はね、本当に何ともないんだ。私にも理由は、分からないけれど」

『……そうか。もし、何かあれば無理せず休むんだぞ』

はしゃぎ声を上げて思い思に楽しむ、人々やポケモンたちの姿をゲッコウガとともに眺めながら、ゆつたりと時は流れていく。しかしこの穏やかな場に対し、テンガン山でアカギが私に向けて言い放つたことが思い出された。

——愛するがゆえに、一度抱いた憎悪はより深まる。
——愛していたがゆえに、人は容易く狂人へと至る。

(確かに、それもまた真理ではあるのかもしれない。だけど、私は……)

自分なりの考えを巡らせていた途中、不意に背後で何かが身動きしたような物音が聞こえて振り返れば、見えるのは大木だけであつたが耳をすますと僅かに呼吸も聞こえて

くる。ゲツコウガも気付いたのか、目を細めて大木の向こうにいると思われる誰かを見据えながら、そのまま私に先んじて忍び足で大木に近寄つていった。それから大木の裏側を覗き込むも、その後なぜか立ち止まつたまま動く様子のない彼に首を傾げた私も、遅れてそこに何がいたのかを自ら覗くことで確かめる。

『あーあ、俺もここで運が尽きたかなあ。自分のことながらほんと、情けねえぜ……』

果たして、私たちが目撃したものとは何だつたのか。

それは、地面に倒れ伏し、愚痴を零しながらも精一杯威嚇し続けている——このふれあい広場では滅多に見かけないと思われる、とあるポケモンの姿だつた。

目立つた外傷はなくとも、なぜか自ら動く様子のないポケモンをそのまま観察していると、唐突にお腹が鳴る音が辺りに響きわたる。私のも、ましてやゲッコウガのでもないそれはどうやら目の前のポケモンから発せられた音らしく、そこで私は漸く向こうが動けなかつた理由を察した。鞄を漁り、幸いいくつか持つていたオレンのみとオボンのみを取り出して今なお倒れているポケモンのすぐ傍に置いてみれば、ちょうど怪訝そうにこちらを見遣る彼と目が合う。ぱっと見てコリンクと同じくらいの体格だが、目付きはあちらの方が断然鋭く、万一道中で遭遇していたならバトルに発展する事態も有り得たかもしだれない。

「……先に言つておくと、私はあなたを捕まえる気はないよ」

『……？』

「お腹、空いているんでしょう？ 口に合うかは分からぬけれど、それ食べて、少しでも早く元気になれたらいいね」

忙しなく、置かれたきのみと私を交互に見つめるポケモンに背を向けてその場から離れていくと、私についてきたゲツコウガが後ろで重い溜め息を吐く。

『お前も相変わらず、野生の奴等に対する警戒心が薄いな……』

「ごめんね。わざと倒れている風には見えなかつたし、よほど空腹だつたのかと思つて『そういう考え方もお前らしいが。本当に、このまま立ち去るつもりか?』

「? だって、私たちに見られながらじや向こうも食べづらいんじやない?」

『……俺には、あいつがセツナ自身にも興味を持つてているように見えたんだが』

「そうかな? 案外、他にもきのみを持つていなか気になつただけかもよ?』

歩きながら振り返るも、先程のポケモンが私たちの後をついてきているような気配はなく、周囲の空気も相変わらず穏やかなものだつた。それでもゲツコウガ自身はどこか納得がいかないような表情を浮かべていたものの、自身は特に気にせず鞄からポケモン図鑑を取り出して生息地について調べてみる。

(ノモセ大湿原……確かに、他の町と比べれば距離は近いかもしだれなけれど。うーん、元々生息していたとして、わざわざここまで足を運ぶ理由が分からぬなあ……)

首を傾げながらポケモン図鑑を眺めていると、その内探検を終えたらしいモウカザルとコリンクが私たちの元へ戻つてくる。どちらもにこにこと楽しそうな表情を浮かべていたが、よく見ると身体の端々に綿毛や羽のようなものもくつつけてきた辺り、どうやら相当夢中になつて遊んできたようだ。そんな彼らの無邪気な姿に笑いかけながら、しゃがみ込んだ私はふたりの毛並を整えるべくゆつくりと手を伸ばす。その直前、鞄に仕舞われた図鑑には私とゲツコウガがここで見かけたポケモン——即ち、スコルピの姿が表示されていた。

：　：

「いやあ、それにしても親子でエキシビジョンマッチ出場とは。アヤコ君も、なかなか粹なことを思いつきましたね？」

「本当は、もう一人娘がいるので三人で出来たら理想的だつたんですけど……あの子は今回、残念ながら都合がつかないそうで。でも、どちらかとだけでもいつかは一緒に

参加してみたいなあ、と思つていて。実はここ数年、ずっと楽しみにしていたんですよ！」
「そうでしたか。ふむ……今のところ、あなた方以外にエキシビジョンマッチへの出場を申し出ている方もいないうえでし、我々審査員側としてもベテランのアヤコ君が出てくれるというのならむしろ有難いお話です。お嬢さんは未経験者とのことでしたが、そう不安がらなくとも大丈夫。初めてだからこそ、まずは基礎を身に着けた上であの舞台に立てば、きっと大いに楽しんでいただけると思いますよ」

コンテスト会場から戻ってきたアヤコさんとも合流した私は、現在二人でとある人家にお邪魔している。アヤコさん曰く友人と言つていたその人は、シンオウのポケモンコンテストにおいて長年審査員を務めており、その関係で会場近くに一軒家を構えていた優しそうなおじいさんだった。

「ところで、ご一緒に参加するとなればお二人にはそれぞれどんなポケモンと出るのかも決めていただく必要がありますが。その辺りは既に、候補も絞っているのでしょうか？」

「ええっと……私としては、セツナのポケモンによつてどうするか考えていいたいと思つていましたが。そもそも、あの子の手持ちでコンテストに出てみたいポケモンがい

るのか、というところから確かめないと伺せんでしたねえ……」

「おやおや。まあ、エキジビジョンマッチに関してはどれだけ場を盛り上げられるかと
いう点が当日の肝であつて、いざとなれば私のポケモンをお貸ししても問題ないとは思
いますが……こればかりは、お嬢さんに聞いてみないと分かりませんなあ」

居間で和やかに会話を続けていた二人の視線が、縁側で座っている私の方に向けられ
たのを察して思わず苦笑いが零れる。コンテストに関して、ゲッコウガはまず目立つこ
とそのものが苦手なようだし、内気なコリンクにも荷が重い……とくれば、唯一好奇心
旺盛なモウカザルなら一緒に参加してもらえそうな可能性はあつた。ただし、バトルと
違つて彼に自分を着飾るという行為が許容出来るのかどうかが怪しいところではあつ
たが。ひとまずモウカザルと話だけでもしてみようか、と考えていれば突如、ボールの
中から誰かが出てくる。

「……コリンク?」

『ええつと……もし良かつたら、セツナと出てみたいな、と思つたんだけれど。だめ?』

意外な申し出で驚く私をさておき、私の膝に乗ると小首を傾げた彼女が続けてこんな

ことを語る。

『だつて、せつかくあの花畠から出て、外に何があるのかを知つていけるようになつたんだもの。どうせなら、一度くらい怖がらずに楽しんでみたいし……偶には戦うだけじゃなくて、一緒に思い出をつくりたいと願うのは、贅沢なことなのかな?』

「……、ううん。私はむしろ、嬉しいよ」

『本当? いやじや、ない?』

「うん、本当。挑戦してみることつて、今まで知らなかつたことが分かる大きなチャンスでもあるんだよね……それに、コリンクだつて女の子だもの。偶にはふたりで、着飾つてみるのもお互い、素敵な経験になるだらうなと思つて」

どこか不安そうに私を見上げるコリンクの頭を撫でながら振り返れば、穏やかに微笑むおじいさんは対照的にきらきらと瞳を輝かせたアヤコさんの姿を目の当たりにしてしまい、これからちよつとだけ覚悟しておいた方がいいのかもしれないと考える。

「うふふ、どうやらセツナはあの子と参加するみたいですね。それなら早速、あと一週間程度と時間も限られていることだし、まずは肝心の衣装を決めていかないと!」

「……はて、アヤコ君。君はどのポケモンと出るのか、そこは検討がついたのかね？」
「ええ。とつておきの子がいるので、明日にでもセツナと一緒にポケモンたちのわざを
調整していくつもりです。ああ、それにしてもセツナには一体どんなドレスがいいのか
しら……ビックさん、ちょっとそちらのカタログをお借りしますね！」

鼻息荒くカタログをめくつていくアヤコさんに対し、おじいさんと私たちはお互い何
とも言えない視線を送つてしまつたが、既にエキシビジョンマッチのことでの頭がいつぱ
いになつていて彼女には効果のない代物だつたらしい。ともあれ、これから最低一週間
はヨスガシティに滞在することが決まり、その間暇を持て余すと思われるゲッコウガと
モウカザルにはどう過ごしてもらおうか、今夜にでも決めておきたいと私はぼんやり考
えるのだった。

044

コリンクと一緒にポケモンコンテストのエキシビジョンマッチへ参加する、と決まってから、時間はあつという間に過ぎていった。アヤコさんの宣言通り、ヨスガシティに到着した翌日からお互いのポケモンがどんな風にわざを出していくのか、その順序やタイミングをとことん話し合ったり、そのまた翌日には完全に張り切っている彼女とコンテスト用の衣装を探すべく、一日かけて買い物に出掛けたり。その後数日間、本番に向けた予行練習を繰り返し行ってきた甲斐もあり、どうにかコンテスト初心者だった私たちもそれなりに映えるパフォーマンスが出来るようになってきたのではないか、と思つていい。

勿論、これは手厚く私たちをフォローしてくれたアヤコさんや、審査員としてコンテストを熟知しているおじいさん……もとい、アヤコさんの友人でもあるビックさんの助言があつてこそ成し得た成果なので自惚れるつもりはない。しかしながら、緊張しすぎて頭が真っ白になるという最悪の事態を避けるためにも、まずは楽しむということを頭に置いてこれから臨みたいところだ。

「いよいよ本番間近ね。でも、これまでの練習を意識してやつたら大丈夫よ！ いざとい
う時は私たちも手助けするし、とにかく明日は一緒に素敵な舞台をつくりましようね」
「はい、アヤコさん。こちらこそ宜しくお願ひします」

「それにしても……、……うふふつ」

「？」

「そのドレス、やつぱりセツナによく似合つていてるわね！ 何だかウエディングドレスに
見えなくもないから、このコンテストが終わつた時に誰かさんから求婚されないか……
お母さん、今頃になつてちよつびり心配になつてきたわ～」

本番前日、コンテスト会場の控室でドレスを試着している私を見て一緒にいたアヤコ
さんが、満足気に何度か頷く。私自身、然してドレスの希望がなかつた代わりに俄然や
る気を出した彼女が見つけてきたのは所謂マーメイドラインのドレスで、全体が淡い水
色且つ袖には繊細なレースも刺繡されている何とも豪華なものだつた。当初料金的な
都合もあり、もつとシンプルなものをさり気なくすすめた私の意見が残念ながら即刻却
下されてしまつた結果、現在のアヤコさんはこれ以上ないほどに満面の笑みを浮かべて
いる。

「あはは……求婚、つて。大袈裟ですよ、アヤコさん」

「ええ、そう？ それこそ、頭にベールでも被せたら花嫁さんに見えそうだけれど……まあ、今回はコンテストだし、実際ベールは被せられない代わり髪飾りでうんと華やかに仕上げていきましょか！」

その言葉通り、意気揚々と私の髪飾りも選ぼうとしていたアヤコさんだが、ちょうど控室の外から誰かに呼びかけられたことで扉の方へと駆け寄っていく。そのまま控室を出てからすぐには戻つてこない辺り、もしかするとコンテスト関係者の人と明日のことについて話しこんでいるのかもしれない。そう考えた私は三つのボールを手に取ると、一つずつ開閉スイッチを押していく。明日は本番が終わるまで一息つく暇もなさそうだし、折角なのでアヤコさんが席を外している今の内に皆の感想を聞いてみたい、と思つてのことだった。

「いきなり出てきてもらつてごめんね。明日、一応こんな感じでコンテストに出る予定なんだけれど……皆はこの恰好について、どう思う？」

『わあっ、いいんじゃない？ セツナによく似合つていると思う！』

『わたしもっ！ おめかししたセツナ、すつごく可愛い！ 明日が楽しみだなあ』

『……、……』

ボールから出てきたモウカザルとコリングクからは、幸いすぐさま肯定的な感想を貰うことが出来た。しかし、残るゲツコウガはといえばなぜか無言を貫いており、はしやぐふたりとは対照的にどこか気まずそうな表情をしているようにも見える。

「ゲツコウガ、どうしたの？どこか、変なところでもあつた？」

『あ、いや……、違うんだ。そういうわけじゃなくて、』

『ちょっと兄さん～？ 何も言われないと、セツナだつて不安になつちやうでしょ？ ここはむしろ、兄さんからもいっぱい、それこそ僕ら以上に褒めてあげるべきじゃないかな』

『そうね。あなたに褒めてもらえたなら、セツナも絶対嬉しくなると思う！』

『ぐつ、』

「ふたりとも、そう言つてくれる気持ちは嬉しいけれど……私はその、気になるところがあるなら教えてもらえたなら助かるなあ、と思つただけで」

自分より幼いふたりから捲し立てられるゲツコウガを見かねて、別に無理矢理褒めて

ほしいわけではないことを伝えればその瞬間、目を見開いた彼から距離を縮められる。急に接近されたことで驚く私を他所に、ゲツコウガはいつになく真剣な眼差しで私を見つめながらも、とうとう重い口を開いた。

『変だなどと思つてはいない。ただ、……お前にそういう恰好をされると、その。俺としては、余計な虫がつくのではないか、と勘織つてしまつただけで』

「虫？うーん、今回マスター・ランクのコンテストに出場する人たちって、誰も虫ポケモンは連れていなかつたと思つたんだけどなあ……」

『……、……いや。俺が言つているのはそういう意味での虫、ではなくてだな……？』

『つまり、おめかししたセツナがどつても魅力的だから、人間の男に言い寄られそうで今の兄さんは心中穏やかじやない、つてこと！』

「……ん？」

『!!』

ゲツコウガの発言を受けて、咄嗟にマスター・ランク出場者の手持ちポケモンについて思ひ浮かべていた私はどうやらかなり見当外れなことをしてしまつたらしい。というのも、基本どんな時でも冷静な性格を崩さない彼が目を泳がせつつ、うつすらと頬も染

めるという何とも珍しい姿を目の当たりにすることとなつたからだ。……つまり、先程モウカザルが代弁してくれたゲッコウガの考えは図星そのもの、と判断しても良いのだろうか。

『モウカザル、流石にからかいすぎじゃない……？』

『だつてさあ、このままだとセツナはずつと気付かなさそうだし。それなら潔く言つておいた方が、いつそ清々しいかと思つて』

焦るコリンクと、あくまでもにこにこしているモウカザルが言葉を交わしている間も、ゲッコウガは動搖が大きすぎたのかぴくりとも動く気配がない。本当に、かなり珍しい姿だ。可愛い、と言つたら拗ねられてしまいそうだから、それは一旦自分の胸に仕舞つておくとして。

「ありがとう、ゲッコウガ。心配してくれたんだね。すごく嬉しいよ」

『……っ、』

「仮に、そういう人が現れてもついていく気は一切ないから大丈夫よ。外見だけで好意を持たれたところで、少なくとも私の心には響かないし……それに、皆との旅を途中で

投げ出す、なんて勿体ないことだけは、一番したくないもの」

ゲツコウガの手をそっと自分の両手で包み込めば、依然として彼は言葉を語らない代わり、目を伏せながらも一度だけ頷く。そうして自分を案じてくれる存在が傍にいる今の私は、とても恵まれているのかも知れない、なんて考えがふと頭に過ぎつた。

数えきれないほどにたくさんのスポットライトが、もうすぐわたしたちが立つ予定のステージを眩しくくらい照らしている。この後で何でも一番難しい、『マスター・ランク』と呼ばれるコンテストも控えているためなのか、会場内は既に多くの人々で賑わっていた。みんな、わたしがあの時花畠から出なければこうして顔を見ることもなかつた人たちだと思うと何だかとても不思議な気分だ。子どもからお年寄りまで、年代に限らず誰もが楽しそうな表情を浮かべながら、コンテストが始まる瞬間を今か今かと心待ちにしている。わざわざここまで観にやつてくるような人たちには、おそらく花畠を荒そうとしたあの人間たちほど悪い人ではなさそうな気がした。

——それでも、わたしがついていくと決めたのは、たつたひとりだけなのだけれど。

「わあ、思つていたよりたくさん人がいるね……ちょっとだけ、どきどきしてきたかも」

ステージの裏側から、わたしと一緒に会場の様子をそつと眺めていたセツナはそんなことを言いながらも、決して不安そうな顔はしていない。淡い水色のドレスを着て、き

らきらと光る髪飾りもつけている今日の彼女はいつもに増して華やかで、ここへ来るまでにすれ違った何人か（特に人間の男）が鼻の下を伸ばしていたところをわたしは何度か目撃していた。もしもわたしではなく、控室で現在モウカザルと一緒に待機しているゲツコウガがセツナに付き添っていたとしたら、きっと誰が相手であろうと遠慮なく睨んでいたに違いない。それをすんなりと信じられるくらい、わたしの隣に佇む現在の彼女はとても魅力的だつたのだ。

『わたしには、今のセツナが不安そうには見えないけれど……緊張、しているの？』

「それは勿論。私だって、今までこんな大勢の人の前に出たことはないし……でも、緊張していても怖くはないよ？ 私一人じやなくて、アヤコさんやあなたが一緒だからね』

その場で少しだけしゃがんだセツナが、控室で彼女と同じく盛大に飾り付けられた私の頭にそっと触れると、そのまま優しく指先で撫でてくる。正直くすぐったいけれど、彼女の手はいつもほんのり温かくて、触れられると幸せな気持ちになつてしまふものだから。少なくとも、わたしは自分からこの手を拒むようなことだけはこれからもしないのだろう。

『ふ、ふふつ……セツナ、くすぐつたい！』

「ああ、ごめんね？ コリンクの頭、撫で心地がいいからつい触っちゃった」

『もう。仕方ないなあ』

「とはいえ、いよいよ本番も近付いていたし……私たちも、アヤコさんの近くにいようか」

本当は、離れてしまつたセツナの指先がとても名残惜しかつたけれど。

これから始まるコンテストが終われば、またいつだつて彼女に撫でてもらうことが出来る——そう思つたからこそ、わたしは大人しく着飾つたセツナの後をついて歩く。ステージを照らすスポットライトの眩しさも、会場に段々と満ちていく喧噪も、わたしひとりだけならばとても心細く思えただろうそれらが今では然して気にならない。

(ああ、そつか……わたしも、今のあなたと同じ)

あなたと一緒だからこそ、初めて立つこの場所でも、何一つ怖くなかったんだね。

:

：：

「シンオウ地方、ポケモンコンテスト・マスター・ランク大会へようこそ！私は審査員の人、及び司会を務めるビックと申します。遠路遥々、ポケモンコンテストを愛するがゆえに、本日はシンオウ以外の地方から集つた方々も多くいらっしゃることでしょう。審査員を代表して、この場にお越しくださった皆様へ、改めて心よりお礼申し上げます。

さて皆様、早速お待ちかねのメインイベント……の前に、本大会を盛り上げるべく、とある親子が今回エキシビジョンマッチに名乗り出してくれました。微々たる時間ではありますが、どうぞ彼女たちとポケモンたちによる演技も併せてお楽しみいただけたら幸いです」

開幕の挨拶が済んだ後、舞台裏から一瞬暗くなつたステージに向けて歩いていくと、万遍なくスポットライトの光がわたしたちに向けて照らされる。その瞬間こそ、わたしたちにとつては初めての、晴れ舞台の始まりだ。

「さあ、始めるわよミロカロス……うふふ。初めての共演、一緒に楽しみましょう！」

「コリンク、こつちも予定通りにやつていこう。練習の時を思い出して、しつかりね」

相対するセツナの母親がパートナーとして選んだポケモン、長い胴体と煌びやかな尾を持つミロカロスが『アクアリング』を身に纏うのと同じく、わたしも『じゅうでん』によつて身体に流れる電力を集中させる。そしてお互に準備を済ませたところで、一早く動いたミロカロスから『みずのはどう』が放たれた。但し通常のバトルとは異なり、こちらを傷つける意図が含まれていないそのわざ目掛けて、今度は『スパーク』で電流を纏つたわたしが何の躊躇いもなく突進していく。当然、多少水を被る結果になつてしまつたが、水と電気が合わさつて生まれた派手な光景を眺めていた人々の口から感嘆の呟きが漏れたのが聴こえた。練習の通り、この電撃でミロカロスまで麻痺していないだけ心配だつたが、そちらを見れば『しんぴのまもり』で更に防御を重ねていたと分かりわたしの心配は杞憂に終わる。あとは、わたしがあれを決めるだけ。

「……コリンク、頑張つて！」

ふと、後ろからわたしを応援するセツナの声を聴いた途端、身体がかつと熱くなるような感覚に襲われた。決して不快ではない。それどころか、わたしを見てくれている彼

女がいることが嬉しくて、胸がいっぱいになりそうなほどの幸せを感じている。今日を迎えるまで、何度も練習に付き合つてくれていたミロカロスでさえ、私の身に起きた急激な変化に目を見開きながらも驚いていた。あんなに美しく、強いポケモンに対しても一応怯ませる程度の効果はあるんだな、なんて場違いかもしれないことを思いながら、わたしは静かに微笑む。

(そういえば、……セツナの膝に乗るのは、流石に難しくなっちゃうかな)

今まで小さかつたからこそ出来たことが、これから出来なくなる場合もあることは僅かに残念だつたけれど、この変化についてわたしは微塵も後悔していなかつた。このまま大きくなれば、わたしを受け入れ、一緒にいてくれるセツナを護れることができ——これからわたしにとつて何にも代え難い、誇りになるだろうと強く確信していたから。

その想いを込めて、幼いコリンクからルクシオへと進化したわたしは、一瞬静まりかえった人々を他所に力強く吠えるのだった。

エキシビジョンマッチのラストでコリンクがルクシオへ進化する、という予想外の事態が起きたものの、結果的に会場の空気を盛り上げられた私たちは無事に舞台から退出していくつた。そして一旦控室へ向かい、着ていたドレスから普通の服に着替えた後で続くマスター・ランクのコンテストを観覧する。私の隣にはアヤコさんが陣取り、丁寧に今回参加する各トレーナーとポケモンたちについて逐次解説してくれたが、やはり一番ランクが高かつたこともあり彼らのパフォーマンスは皆どれもハイレベルなものだつた。ちなみに参加者の中には、ヨスガシティのジムリーダーであるメリツサさんの姿もあり、彼女はアヤコさんに気付くと軽くウインクを送っていた。アヤコさん曰く、二人は長年ポケモンコンテストに出場している友人であり、尚且つ切磋琢磨し続けてきたライバル同士でもあるらしい。

数々の審査種目を経た末、今回のマスター・ランク優勝者は——最後まで堂々と満面の笑みを浮かべていた、前述のメリツサさんだつた。

「コリンク……じゃなかつた、もうルクシオだね。今日は本当にお疲れさま。たくさん

頑張ってくれて、ありがとう』

コンテストの表彰も終わり、観客が大勢集まつていたホールを出て入口周辺にまで歩み寄ると漸く一息つけたような心地がする。コリンクだった頃の小さな体格から、二回り程度は成長したルクシオの頭を撫でつつふと会場内を見回すと、コンテストが終了した今や残っている人はまばらだつた。ぱつと見て華やかな衣装を身に纏つ正在ことから、おそらくそのほとんどがコンテスト関係者なのだろう。

本当は表彰終了後、アヤコさんから一緒にメリツサさんの元へ挨拶にでも行かないかと誘われていたが、互いに積もる話もあるだろうからと丁重に断つていた。大分残念がられてしまつたが、これまで私やヒカリがいることで余り遠出する機会もなかつたのだし、その分も羽を伸ばしてほしいと伝えたら最終的にアヤコさんが折れてくれた感じだ。但し、次に家へ寄る時はよほど急ぎでもなければゆつくりしていつてほしいと頼まれたので、勿論快諾した私と別れたアヤコさんは今頃メリツサさんと控室辺りで語り合つていると思われる。

『ところでセツナ、この後はどうする予定なの？』

「うーん……実を言うと、今もちよつと決めかねて正在るんだよねえ……」

というのも、ヨスガジムの休業期間終了まであと一週間残っているという現実が私の頭を悩ませる最大の理由だつた。憶測だが、多分これからの一週間はヨスガジム全体でコンテスト会場の後片付けや、所属トレーナーたちの休日に充てられるのだろう。その一週間を私たちも待つてから、そのままヨスガジムへ挑むのも一応ありではある。もしくは以前、ナタネさんからおすすめされたとおり一旦ヨスガシティを離れてノモセジムか、トバリジムへ向かうのも悪くはない選択肢だと考えていた。距離を鑑みるとここから近いのは断然ノモセジムの方だつたが、所持品の充実という意味で一度トバリシティのデパートにも訪れてみたいという気持ちもあるので正直悩ましいところだ。どのみち、あと数時間で夕暮れを迎える今日はポケモンセンターで宿泊し、移動するなら明日以降が望ましいことには変わりないが。

「……とりあえず、一度ここから出ようか。詳しいことは、また後で皆にも伝えるよ」
『うん、分かつた！』

元気よく頷いてくれたルクシオを一度ボールに戻し、会場の外へ出た私はのんびりポケモンセンターへ向かうことにして。今日アヤコさんたちと一緒に参加したエキシビ

ジョンマッチが楽しかったのも嘘ではないが、やはり煌びやかなスポットライトを浴びるよりかは、こんな風にゆっくりとしたひとときを過ごす方が性に合っているのだと今更ながら自覚する。エキシビジョンマッチの練習に集中していたこの一週間は、余りゲッコウガやモウカザルに構つてあげられなかつたので、明日の天気さえよければ再びふれあい広場に行つてみるのもいいかもしない。そのようなことをつらつらと思い描きながら、遂にポケモンセンターまで到着すると見覚えのある人とポケモンの姿が目に映つた。彼らに声をかけるよりもずつと早く、駆け寄ってきた小さな子が“いつか”と同じように私の足元へしがみつく。

「久し振りだね、リオル。元気だつた?」

私からの質問にこくこく、と何度も頷くりオルを微笑ましく見守つていれば、若干申し訳なさそうな表情を浮かべた彼と付き従つているポケモンもこちらへと歩み寄つてきた。

「やあ、セツナ。お久し振り。出会い頭にまたリオルがすまないね」「ゲンさんとルカリオも、お久し振りです。そんなに困つた顔はしなくて大丈夫です

よ？あれから変わらず元気そうで、安心しました。ところで、どうしてヨスガシティに？」

「ヒョウタに会った後、暫くポケモンたちと修行していたんだけど、偶には息抜きにコンテストでも見にいってみようかなと思いついてね。そうしたら、今日のエキシビジョンマッチにセツナが出ていることに気付いて……ここで待つていれば、また君に会えるかなって考えていたところだつたんだ。会場だと人が多くて、ゆっくり話せなさそうだつたからね。驚いたけれど、お母さんとの共演、なかなかさまになつていたよ。お疲れさま」

クロガネシティ以来の再会となつたゲンさんも、まさか今日のコンテストを観ていたとは思わず少々気恥ずかしさを覚えてしまつたが、彼はそんな私に対してただ穏やかな視線を向けながら会話を続ける。

「そういえば、ヨスガジムにはもう挑戦したのかい？」

「ああ、いえ。コンテスト開催の都合で、どうやらあと一週間くらいは休業状態だそうで。その一週間で、先にノモセジムやトバリジムに行つてみるのもいいかなと考えてはいるんですが……ひとまず、今日のところはルクシオも疲れているだろうし、このポケ

モンセンターで宿泊していくつもりですね』

「ふむ、なるほど」

『……リオル、いつまで彼女に縋りついているつもりですか?』

『……』

『……あなたも相変わらず、頑固な子ですね。本当に』

私がらいつこうに離れる気配がないリオルに、深く溜め息を吐いたルカリオの頭をゲンさんが労わるように撫でていく。彼らはこれからどうするのだろう。コンテストも終わつた今、再び修行の日々へ戻るのだろうか、なんて思つていると、ゲンさんははつきりとした口調で私に『とある提案』を持ちかけてきた。

「……そうだな。せつかくの機会だ。セツナ、もし君さえよかつたらの話なんだが。これから最低一週間、私たちとともにミオシティで過ごしてみるのはどうだろう?」

セツナお姉ちゃんと初めて出会ったのは、あたしが五歳になつたばかりの頃だつた。その時のことばは、今でもよく覚えていいる。

『初めまして。私の名前はセツナ、えつと……』れから、よろしくね?』

当時から真っ白な髪と赤い目だつたお姉ちゃんは、あたしに視線を合わせながら少し緊張した様子でそう話しかけてくれたんだよね。

あたしは最初、そんなお姉ちゃんと見惚れていたの。お人形さんみたいな人だなあ、つて。

それで、暫く言葉も出てこなくてじーっと見つめ続けていたら、お姉ちゃん、その内悲しそうな顔になつちゃつたから。慌てて、あたしからもよろしくね、つて挨拶をしたんだ。

それが、あたしたち姉妹の始まり。

『セツナは……あの子はね、自分の名前と誕生日以外、何も覚えていなかつたそうなの』
 『だから私も、セツナに本当の家族がいるのかどうかは分からない。だけど、血の繋がり
 がなくともこの家で五年暮らしてきた私たちは、もう家族同然だつて思つてゐるわ』
 『ヒカリ。お姉ちゃんのこと、どうかよろしくね。あの子、今まで私にも我儘らしい我儘
 さえ何一つ言つてこなかつたけれど、旅先では何が起きててもおかしくないから。もしも
 お姉ちゃんが困つていたら、その時は妹のあなたが助けてあげてね？お母さんとの約束
 よ』

お姉ちゃんが先にフタバタウンを出発した後、あたしも旅に出るべく家で準備を進め
 ていたら、いつになく真剣な表情をしたお母さんから大事な話があると呼び止められ
 た。

……まさかお姉ちゃんが、五年前シンジ湖で記憶喪失の状態で保護されていて、それ
 以前のことをほとんど覚えていなかつたなんて想像もつかなかつた。
 でも、お母さんの話を聞いて多少納得のいったこともある。

この一年はよく散歩にも行くようになつたお姉ちゃんだけど、それ以前、つまりあた
 したちと過ごした『四年』に関しては、そもそも自分から外出する機会がかなり少なかつ
 たのだ。

その頃のお姉ちゃんは、テレビにポケモンが映つただけで驚いていたような気がする。

今振り返れば、お姉ちゃんの中でポケモンに対する知識も失われていたからこそ、実は内心ポケモンを恐れていたがための反応だつたのかかもしれない。

この五年の内にお姉ちゃんが旅に出なかつたのは、幼いあたしを見守つていたかつたから、といつだつたか本人に教えられたこともあつたけれど。

それだつてもしかすると、野生のポケモンに接触すること自体、記憶がないお姉ちゃんにとつてはつらかつたから、という可能性も考えられる。

最も、そういう恐怖はおそらくこの一年でほぼ払拭されていつたのだろう。

「あのポケモン、やっぱりかつこよかつたなあ……」

そう呟きながらあたしの脳裏に思い浮かぶのは、あたしがポツチヤマを受け取つた日、お姉ちゃんの隣に並び立つていたゲッコウガのことだ。

マサゴタウンのポケモン研究所に寄つた際、ナナカマド博士からあのポケモンは本来、ここシンオウから遠く離れたカロス地方に生息しているということを教えてもらつた。

あたしが選んだポッチャマのように、カロスで旅立つ初心者トレーナー向けに贈られるポケモンの一体、ケロマツが進化を重ねた姿がゲッコウガなんだって。

——実は、あたしもたつた一度だけ。

お母さんにも、ジyunにも、そして勿論お姉ちゃんの誰にも言つていなければ、シンジ湖でのゲッコウガを見かけたことがある。

気付いたきっかけは、些細なものだつた。

目敏くも、いつの間にか一人だけで食べきるには多い量のポフインを持つて時折出かけるようになつたお姉ちゃんのことが気になつて、そつと追いかけてみたんだ。

いや、『気になつた』……もとい、興味というよりは嫉妬が大きかつたのかも？

断じて、あたしを可愛がつてくれたお姉ちゃんの愛情を疑つていたわけではない。

ただ、楽しそうに出かけていくお姉ちゃんの心をいつの間にか搔つ攫うような『誰か』が現れていたことが、妹のあたしとしてはちよつぴり悔しくも、寂しいなど感じてしまつて。

せめて相手の顔だけでも拝んでおこう、と幼心に思い立つたのよね。

だから、お姉ちゃんが会っていた相手がポケモンだつたと知った時は、本当に驚いた。

しかも今まで全く見たことのないポケモンだつたし、最初は相当混乱していたようと思う。

襲われたらどうしよう?!なんて焦るあたしを他所に、お姉ちゃんはあたしが近くに潜んでいたことに一切気付かず、ゲツコウガの隣に座るとお手製のポフインと一緒に食べたり、シンジ湖を眺めながら話しかけたりしていたつけ。

更にゲツコウガはそんなお姉ちゃんを警戒するどころか、むしろ慣れた様子で接していたところも見て……ああ、とつても仲良しなんだな、と気付くのに時間はからなかつた。

この時、ただでさえ好奇心旺盛な幼馴染のジユンを連れていかなかつたのは、我ながらかなり英断だつたのではないかと密かに信じている。

何せ初めてゲツコウガを見た時、あんなにもはしゃいでいたジユンのことだ。

仮に居合わせていたとすれば、ジユン自身に悪気がなくとも、お姉ちゃんとゲツコウガのあの穏やかな雰囲気は容赦なく破壊されていただろうと思えてならない。

結局のところ、お互いつつても楽しそうに過ごしていたお姉ちゃんたちを引き裂いて

しまうような真似はしたくないな、と思ったあたしは気付かれない内にシンジ湖を立ち去つた。

そうしてお姉ちゃんが自分から言わない限りは、あたしもあのポケモンを見たことを内緒にしておこう、と堅く誓った末に今へと至る。

「……ポツチャマも、いつかエンペルトになつたらあんな風に凜々しくなるのかなあ？」

そうは言つても、あたしの隣で首を傾げていたポツチャマはどうやら甘えん坊のままでらしく、あたしの足元に擦り寄つてきたかと思えばなぜか自慢げに胸を張つていて。

この様子だと、ポツチャマが進化するまでまだまだ時間がかかりそうだ。

けれど旅が始まつたばかりの今は、それでいいのだろうと微笑む。

せつかちなジユンとは違つて、あたしもお姉ちゃんのようにまずは自分だけの旅を精一杯楽しんでいきたいと願つている。

ただそれとともに、憧れたチャンピオンの姿にいつか自分も近付けるよう、トレーナーとして確実に強くなつていきたい、という目標も芽生えていた。

全ては、万一あたしの大好きなお姉ちゃんを狙いにくるような不届き者が目の前に現れた時、あたしが盾となれるようにならなければ。

「あたしだって、お姉ちゃんが大好きな気持ちは『彼』にも負けてないもんね……よーし、頑張ろう！ 差し当たつて、次はフカマルを捕獲しに行こうかな！」

ハクタイジムへ挑む前、連絡をとつたお母さんから一緒にポケモンコンテストを観な
いかとお誘いを受けていたけれど、そちらは辞退させてもらつた。

コンテストについては全く興味がないわけでもなかつたけれど、それより今はフカマ
ルに会つてみたい、というわくわくの方が大きく上回つていたから。

ここで無事二つ目のジムバッジを貰い、モンスター・ボールやキズぐすりなども可能な
限り買い揃えられた現在、あとはサイクリングロード下にある噂の洞窟まで向かうだけ
だ。

お母さんには一週間、と言つておいたものの今後の状況によつてはそれ以上の時間が
かかるかもしれない。

それでも、フカマルと……ゆくゆくは、あたしのガブリアスと一緒に旅する夢を簡単
に諦めるつもりはない。

まずはやれるだけ足搔いてみよう。ポツチャマと出発した時点で、そう決めていたも
の。

「……あら、ドラゴンタイプに興味があるのかしら？ふふつ、まるで昔の私を見ているみたいね」

決意新たに、意気揚々とサイクリングロードへ向かつたあたしの後ろ姿をちょうど見ていた人とはつきり言葉を交わせたのは、それからまた後日のこと。

よもやその人から、親切にもフカマルの育て方について個人的なレクチャーを受けたり、更にはポケモンのタマゴを受け取つたりするなんて、当然夢にも思つていなかつた。

Chapter. 8 迷宮にて君を待つ

047

ポケモンのわざを用いて人が移動している様子——たとえば、『テレポート』や『なみのり』、『ロツククライム』といったわざをポケモンに指示して実際移動しているところは、これまでの生活で私もテレビ越しに幾度となく見てきたものではあった。いつだつたか、サイホーンに乗つて順位を競い合うサイホーンレースの中継もどこかで見かけた気がする。

そんな風に、ポケモンの力を借りながら一緒に移動していくのも旅の醍醐味なんだろうな、なんて軽く考えていた過去の私に、叶うのならば一つ助言を投げかけてあげたい。せめて実際、自分が体験する前に心の準備だけでも済ませておくべきだつたと。

「……つ、」

「大丈夫。しつかり掴まつてさえいれば、少なくとも落ちることはないから」「お、落ちる、とか。簡単に、言わないでください……！」

前方からの風を受けながら、思わずゲンさんの手持ちポケモンであるボーマンダの身体にしがみつくと若干速度が緩くなつたように感じる。ゲンさんはともかく、明らかに乗り慣れていない私を気遣つたボーマンダがまたスピードを落としてくれたのだろう。ひとまず急ぎの用事は今のところない、とゲンさんは言つっていたものの、ヨスガシティまで来た時と比べて今は時間がかかるつていることを申し訳なく思う反面、生憎上空からの景色を楽しむ余裕まで持てそうになかつた。だつて、思つていたよりずっと地上からの距離が高い。それが当然のことだと頭では理解していたはずなのに、心がまるで追いつけずに入っている。

「もう半分は過ぎているから、あと少しの辛抱だよ」

後ろに座つているゲンさんからはそう緩く声をかけられるも、あと半分はこうして飛んでいる状態なのか……と思うと正直気が滅入る。今私の手持ちに『そらをとぶ』を使えるポケモンはいないけれど、いつか加わつたとしてもまずはお互い低空飛行から練習を始めた方が良さそうだ。

少なからず、憧れていたはずだつた初めての空の旅は、私にとつて図らずも「落ちるかもしれない」という恐怖と戦い続ける苦々しいものとなつてしまつた。

：：：

ヨスガシティでのコンテストが無事終わつた後、ゲンさんの提案に乗つてともにミオシティへ行くことにした私は彼のボーマンダに乗せてもらつたわけだが、一時間も経つていないにもかかわらず既に疲弊を覚えていた。別に、前世の頃から高所恐怖症だつたわけではない。それこそ飛行機や観覧車などは、よく好んで乗つっていたものだつたと記憶している。

ただ——今回はなぜか、手を離してしまえばそのまま容易く落ちてしまいそうな怖さがじわじわと、自分で湧き上がつてきて。乗せてもらつて早々、周囲の景色を見渡すこともままならなくなつていた。それなりに精神面は落ち着いていると自分では思つていたのだけれど、この身体の年齢に多少引っ張られている部分もあつたのかもしれない。

「ごめんなさい。乗せてもらつたのに、ずっと取り乱してしまつて……」

「いや、初めてなら怖いと感じるのは致し方ないことだし、そう気にしなくていいよ。むしろボーマンダこそ、久し振りに女の子を乗せられて楽しそうだつたからね」

『おつ、よく分かっているじゃないか相棒！あんたが望むなら、練習としてまた乗つてくれるもいいぞ。相棒は全然怖がらなくて、新鮮さに欠けるからなあ』

私の反応は特に気にもしていないうらしい、大らかなボーマンダの発言を聞いて内心胸を撫で下ろしていると、すかさず足元に縋りついてきた衝撃につられて自然と俯く。勢いよく揺れている青い尻尾に元気だなあ、と一瞬眩きそうになつたが、敢えて口を噤んだ。これから実際、どれだけこの町に滞在するかは分からぬけれど、同じ時を過ぎればクロガネシティで出会つた時から私も縋りついてきたリオルのことを更に知ることができるだろうか。その答を未だ分からずいる私を置き去りとして、ミオシティの水面は今日もただひたすらに穏やかだつた。